

# 葛野(2)遺跡

## 発掘調査報告書

平成10年度

青森市教育委員会



葛野(2)遺跡全景(北西上空から)

## 序

青森市内において登録されている埋蔵文化財包蔵地は、平成11年3月現在297箇所を数えており、これまで行われた数多くの発掘調査成果により、青森市の歴史が徐々に解明されつつあります。

本書は、平成10年度県営高田地区農免農道整備事業計画に先立ち実施された、当該計画地内に所在する葛野（2）遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

本遺跡は、平成8年度にも発掘調査が実施された遺跡であり、当時の調査により、平安時代の集落跡の一部を確認しております。

今年度の調査により、葛野（2）遺跡の平安時代の集落範囲のさらなる広がりを確認することができました。

これらの調査成果が、本市の埋蔵文化財の保護・活用の一助になれば幸いと存じますとともに、本書を刊行できましたことは、ひとえに関係各機関・諸氏のご指導、地元町会並びに財産区委員の皆様のご協力の賜ものによるものと、深く感謝の意を表する次第であります。

平成11年3月

青森市教育委員会

教 育 長 池 田 敬

## 例 言

1. 本書は、平成10年度に実施した県営高田地区農免農道整備事業に係る葛野(2)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した葛野(2)遺跡は、青森県遺跡台帳に遺跡番号01218番として登録されている周知の遺跡である。
3. 本遺跡の発掘調査は、平成8年度に第一次調査が当委員会により実施されており、本年度は第2年次にあたる。第一次調査成果については、「葛野(2)遺跡発掘調査報告書」(青森市教育委員会1997)として刊行しており、本書は2冊目にあたる。
4. 本書の執筆・編集は、青森市教育委員会が行い、執筆者名は依頼原稿は文頭に、その他は文末に記している。
5. 図版及び表番号は、原則的に「第 図」「第 表」としたが、依頼原稿については「図 」「表 」とした。
6. 本報告書の土層注記については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄1993)に準拠した。
7. 遺構番号は、遺構の種別ごとに検出順に番号を付したが、精査の過程で遺構と認定できないものについては欠番として、遺構番号の繰り上げは行っていない。
8. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については統一を図っていない。
9. 住居跡のカマドの主軸方位は、袖部が残存しているものは両袖、残存しないものは火床面の中央線と煙道部の中心線を基準線として磁北との差を表示した。
10. 住居跡のピットの深さについては、床面からの計測値を記し、規模については、長軸×短軸×深さで記した。
11. 土師器・坏の器高及び口径が明らか、または図上で復元可能なものについて、器高を口径で割った数値に100を乗じ器高指数として表中に記した。
12. 試料の同定・分析等は、次の方々に依頼した。

・放射性炭素年代測定	学習院大学教授	木越 邦彦氏
・須恵器の胎土分析・産地同定 及び土師器の胎土分析	奈良教育大学教授	三辻 利一氏
・石器の石質鑑定	青森県総合学校教育センター指導主事	工藤 一彌氏
13. 引用・参考文献は巻末に収めた。
14. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
15. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の諸氏からご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す。(敬称略・順不同)  
中嶋友文・工藤清泰

# 凡 例

1. 本報告書で使用する、略称・表現方法・スクリーントーンについては以下のとおりである。

(1) 図中で使用したアルファベット

P - 土器 S - 石器 LB - ロームブロック B - Tm - 苫小牧・白頭山火山灰

(2) 図中・表中で使用した略称

「第1号竪穴式住居跡」 「1住」

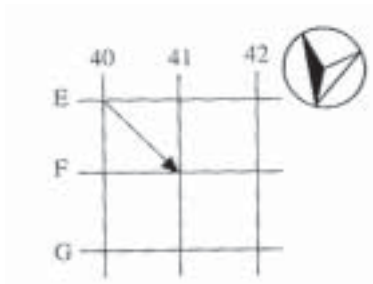
「第1号土坑」 「1土」

「第1号竪穴遺構」 「1竪」

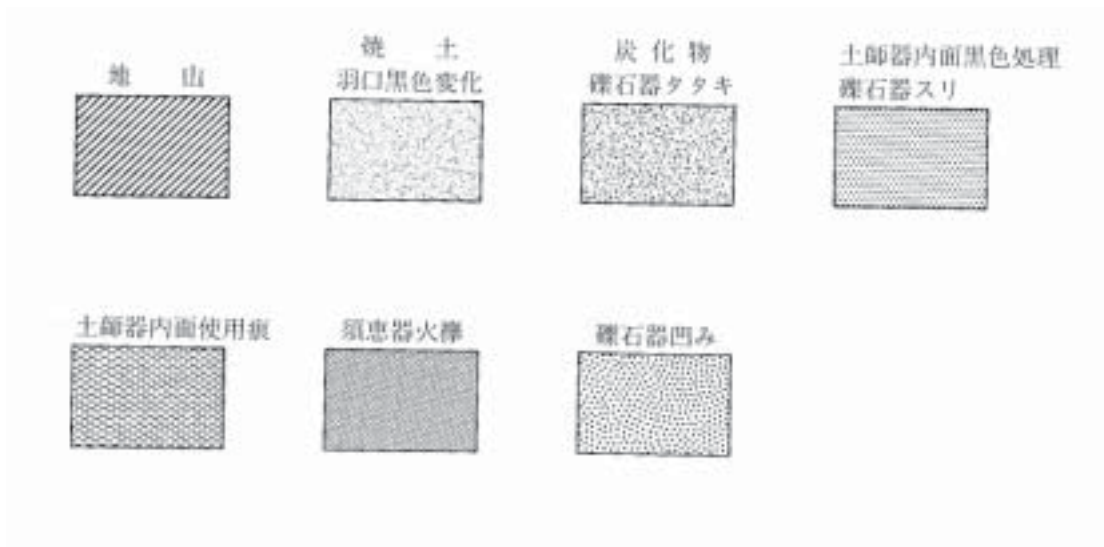
「第1号ピット」 「1P」

「竪穴式住居跡内ピット1」 「Pit1」

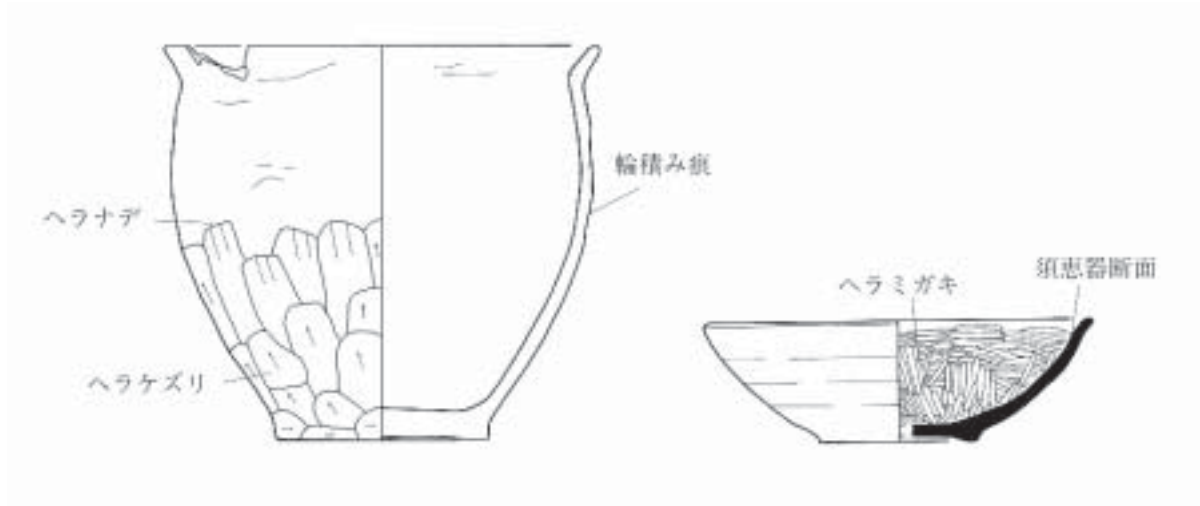
(3) グリッドの呼称(例:E - 40グリッド)



(4) 各実測図中で使用したスクリーントーン



## (5) 土器実測図での表現方法



## 2. 遺物の分類

本遺跡から出土した遺物の種別は、土器（縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器）石器・羽口・鉄滓・木製品・土製品等である。

遺物出土量としては土器が最も多く、石器・羽口等の出土量は少ないことから、土器について分類を試みた。なお、弥生式土器の時期区分については須藤 隆 1996『東北地方の弥生土器』『日本土器事典』を参考にした。

### 縄文時代の土器

- 群1類 縄文時代前期に属する土器
- 群2類 縄文時代中期に属する土器
- 群3類 縄文時代後期に属する土器
- 群4類 縄文時代晩期に属する土器

### 弥生時代の土器

- 群1類 弥生時代前期に属する土器
- 群2類 弥生時代中期に属する土器
- 群3類 弥生時代後期に属する土器

### 平安時代の土器

#### 土師器

坏 類 内面に黒色処理を施すもの

- 1類 底部から直線的に立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの
- 2類 底部付近から緩やかに外反しながら立ち上がるもの
- 3類 胴部下半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの
- 4類 胴部上半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの

坏 類 内面に黒色処理を施さないもの

1類 底部から直線的に立ち上がるもの

2類 底部付近から緩やかに外反しながら立ち上がるもの

3類 胴部下半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの

4類 胴部上半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの

土師器甕

A群 ロクロ成形のもの

類 調整がロクロナデのもの

類 調整がヘラケズリのもの

B群 非ロクロ成形のもの

類 頸部にくびれを持ち口縁部幅が広く、長く外反するもの

1類 頸部にくびれを持ち口縁部幅が「く」の字状に外反するもの

2類 頸部にくびれを持ち「く」の字状に外反する口縁部が 1類より短いもの

類 頸部にくびれを持ち口縁部が鋭く外反するもの

類 頸部にくびれを持たず口縁部が外反するもの

類 頸部にくびれを持たず口縁部が緩やかに外反するもの

類 頸部にくびれを持たず口縁部が内傾するもの

# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第 章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査要項.....	1
第3節 調査方法.....	2
第4節 調査経過.....	3
第 章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	5
第2節 遺跡付近の地形と地質.....	12
第3節 遺跡の層序.....	15
第 章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	
1 竪穴式住居跡.....	17
2 竪穴遺構.....	65
3 土 坑.....	67
4 .ピット.....	78
第2節 出土遺物	
1 縄文式土器.....	87
2 弥生式土器.....	88
3 土師器.....	88
4 須恵器.....	92
5 石 器.....	93
6 羽 口.....	93
7 . 鉄製品・鉄滓.....	93
8 木製品.....	93
9 土製品.....	93
第 章 自然科学的分析	
放射性炭素年代測定.....	101
葛野(2)遺跡出土土器の蛍光X線分析 .....	102
第 章 分析と考察.....	105
まとめ.....	121
引用・参考文献	
写真図版	



## 第 章 調査の概要

### 第 1 節 調査に至る経過

東青農村整備事務所は、県営高田地区農免農道事業を計画し、それに伴い青森市教育委員会（以下、当委員会）に対し道路建設予定地内について埋蔵文化財包蔵地の所在の有無の確認がなされた。これを受けて当委員会では所在の有無を確認したところ、当該予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である、葛野（2）遺跡が所在していることが判明した。当委員会では埋蔵文化財保護の立場から、埋蔵文化財包蔵地の現状保存のため、事業計画予定地の変更並びに見直しの要望と、もしそれが困難な場合は、記録保存のための事前の発掘調査が必要である旨を回答した。

その後、東青農村整備事務所と当委員会で、その取り扱いについて協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの結論に至り、事前の発掘調査による記録保存が図られることになった。

東青農村整備事務所より、平成 8 年 4 月 12 日付け東青農整第 23 号「埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」において当委員会に発掘調査の依頼があり、これを受けて当委員会で協議を重ねた結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るため、平成 8 年 5 月 9 日付け青市教委社第 178 号において、東青農村整備事務所に受諾の旨の回答を行い、発掘調査を実施した。平成 8 年度の発掘調査により竪穴式住居跡 4 軒、竪穴遺構 1 基、土坑 5 基、道路状遺構 3 条を検出し、縄文式土器、土師器、須恵器、土製玉類、鉄製紡錘車などが出土した。また、平成 8 年度の発掘調査区域は、遺跡範囲内を横断する道路建設予定地の一部であり、残りの部分は平成 9 年度以降に発掘調査を実施することとした。

東青農村整備事務所より、平成 10 年 4 月 20 日付け東青農整（委）第 1 号「県営高田地区農免農道事業「高県免第 8 号委託」の施行について（協議）」で、当委員会に発掘調査の協議の依頼があり、これを受けて平成 10 年 4 月 24 日青市教委社第 168 号において、東青農村整備事務所に受諾の旨の回答を行い、発掘調査を実施した。

### 第 2 節 調査要項

#### 1. 調査目的

県営高田地区農免農道整備事業に先立ち予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

#### 2. 遺跡名及び所在地

葛野（2）遺跡（くずのかっこにいせき）

青森市大字大別内字葛野 134 - 2 ほか

3. 発掘調査期間 平成 10 年 5 月 11 日～9 月 22 日

4. 調査面積 6,220m<sup>2</sup>

5. 調査委託者 東青農村整備事務所
6. 調査受諾者 青森市
7. 調査担当機関 青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室
8. 調査指導機関 青森県教育庁文化課

#### 9. 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所長兼教授	(考古学)
調査員	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事	(地質学)
	〃	三浦 孝仁	青森市立長島小学校教諭 (考古学)
調査協力員	白鳥 弘明	南部四区連合町会長	
調査事務局	青森市教育委員会		
	教 育 長	池 田 敬	
	生涯学習部長	齋 藤 勝	
	社会教育課長	間 山 義 弘	
	埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫	
	室 長 補 佐	福 士 敦	
	埋蔵文化財係長	石 岡 義 文	
	主 事	田 澤 淳 逸	
	〃	小 野 貴 之	
	〃	木 村 淳 一	
	〃	児 玉 大 成	
	〃	沼宮内 陽一郎 (調査担当)	
	〃	設 楽 政 健	
	調査補助員	蝦 名 純	

### 第3節 調査方法

平成8年度調査時の調査区の設定にあたっては、工事用中心杭No.1とNo.2を結ぶ東西方向の直線と、これに直交する南北方向の線をそれぞれ長軸方向と短軸方向の基準線とする4m×4mのグリッドを設定し、工事用中心杭No.0を起点として西に1、2、3、の順に算用数字を、南へD、C、B、北へF、G、H、の順にアルファベットを付し、各グリッドの呼称はアルファベットと算用数字を組み合わせて示していた。

今年度の調査においても調査の利便性を考慮し、平成8年度調査時のグリッドを延長し、グリッドの呼称についても平成8年度調査時と同一の呼称を用いることとした(凡例)。

長軸方向にあたる東西方向の基準線を復元したうえで、E - 35グリッドを基準としグリッドを設定し

ていった。なお、平成8年度報告時には、グリッド南北線の基準線は磁北より東偏14°としてあるが、正確には西偏14°である。

測量原点については、平成8年度に設置した原点(63.806m)を基準とすることとした。ここから原点移動を行い、最大比高差約5m、延長約450mの調査区に対処するため、7カ所の測量原点を設置した。工事路線内における調査対象範囲は、平均幅約20m程の、南東から北へ向い緩やかにカーブする細長い形状を呈しており、調査方法は、対象範囲全体に試掘先行の調査を行い、全体の概要を把握した後、本調査に移行することとした。

遺物は、遺構内、遺構外出土遺物とも各層ごとに一括し、必要に応じて番号を付して取り上げた。

遺構の精査は、原則として竪穴式住居跡は四分法で、土坑は二分法で実施した。精査の結果、遺構と判断できないものについては、精査の対象から除外し、欠番とした。

実測は、簡易遣り方測量と平板測量を併用して行い、縮尺は20分の1を原則としたが、必要に応じて10分の1を採用した。

写真撮影にあたっては、35mmのモノクローム、カラーリバーサルフィルムの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い、必要に応じて撮影を行った。

(沼宮内 陽一郎)

#### 第4節 調査経過

発掘調査は5月11日から開始した。発掘調査開始前の状況は、調査区内については調査開始前に樹木の伐採が終了していたが、地表面には撤去しきれなかった枝等が多量に残っていたことから、重機と人力による撤去を行った。

5月下旬、遺構と思われる数箇所の褐色土の落ち込みについて試掘と並行しながら精査したところ、調査区中程の平坦地から竪穴式住居跡1軒と土坑1基を確認した。その後も試掘面積の広がりとともに、土坑と思われる数基の落ち込みを確認した。

5月末、この時期になると、調査区中程から北西側にかけて複数の土坑の落ち込みが確認され、さらに北側へ向い遺構の広がりが推測されたことから、調査区中程から北側にかけて、重機による試掘を進めたところ竪穴式住居跡1軒と土坑2基を検出した。

6月中旬、試掘の成果に基づき試掘先行の発掘調査から調査対象範囲全面を対象とした発掘調査に切り替えることとした。それに伴い、遺構掘り込み面での確認が困難なこと、遺構外からの遺物出土量が少ないことなどから調査区中程から南東に人力と重機を併用した粗掘りを行い、調査区中程の平坦地から集中して遺構を確認した。

6月下旬、遺構精査を開始した。

7月14日、荒川市民センターにおいて、今年度当委員会が実施する発掘調査の合同発掘調査会議を開催した。

8月下旬、盆休みの後、調査区中程より北側の範囲について重機を併用した粗掘りを行ったところ、竪穴式住居跡8軒と土坑14基を確認した。

当初発掘調査期間を9月11日としており、残調査日数では対応が困難であると思われたため、発掘調査期間を10日間延長し9月22日までとし、遺構精査を引き続き行った。

9月18日、ラジコンヘリによる発掘調査区内の空中撮影を行い9月22日、現地での発掘調査を無事終了した。

今年度の検出遺構数は竪穴式住居跡15軒、竪穴遺構1基、土坑35基、ピット2基、遺物出土量はダンボール箱換算で23箱、平成8・10年度の検出遺構総数は、竪穴式住居跡19軒、竪穴遺構2基、土坑40基、ピット2基、道路状遺構3条、遺物出土量はダンボール箱換算で28箱である。

(沼宮内 陽一郎)

## 第 章 遺跡の環境

### 第 1 節 遺跡の位置と周辺の遺跡

青森市の南側には八甲田山から北へ傾斜する火山性台地が広がっており、葛野(2)遺跡は、その台地上標高 65m 付近、青森市街地から南に約 8km 離れた比較的緩傾斜な斜面上に立地しており、この火山性台地と平野部が接する低丘陵部分は、遺跡が多数確認されている地域である。本遺跡と主な時代が同じもので半径 2km 以内に所在する周知の遺跡としては、東側から新町野遺跡、野木遺跡、野木沢田遺跡、野木山口(1)遺跡、山吹(4)遺跡、川瀬(1)遺跡、朝日山(7)遺跡などが確認されている(第1表・第1図)。

これらの遺跡のうち、新町野遺跡と野木遺跡については平成7年度青森県埋蔵文化財調査センターにより、青森中核工業団地整備事業に先立つ試掘調査が実施され、平成8、9、10年度には同センターが、また、平成9年度からは青森市教育委員会が加わり合同で発掘調査が実施され、縄文時代と平安時代の集落跡の一部を検出している。

本遺跡は、平成5年度に当委員会が実施した市内遺跡詳細分布調査により確認された遺跡であり(青森市教育委員会 1994)その後平成8年度に当委員会が実施した発掘調査により平安時代の集落跡の一部を検出している(青森市教育委員会 1997)。

今年度の調査範囲は、遺跡が立地する丘陵地の尾根を東から西にかけて横断し、緩やかにカーブを描きながら丘陵地の縁辺部を北西方向に向かう形であった。

調査区内の地形については、平成8年度調査区においては、北へ向かい緩やかに傾斜する比高差約 1m の平坦地であった。今年度の調査区内は、38 ライン付近まで平坦地が続くが、40 ラインから 57 ラインにかけて、比高差約 2m の緩やかな沢地形であった。63 ライン付近から 75 ライン付近にかけては、比高差約 1m の平坦地となっており、75 ライン付近以北は、比高差約 3m の谷地形を 2カ所含む起伏に富む地形であった。

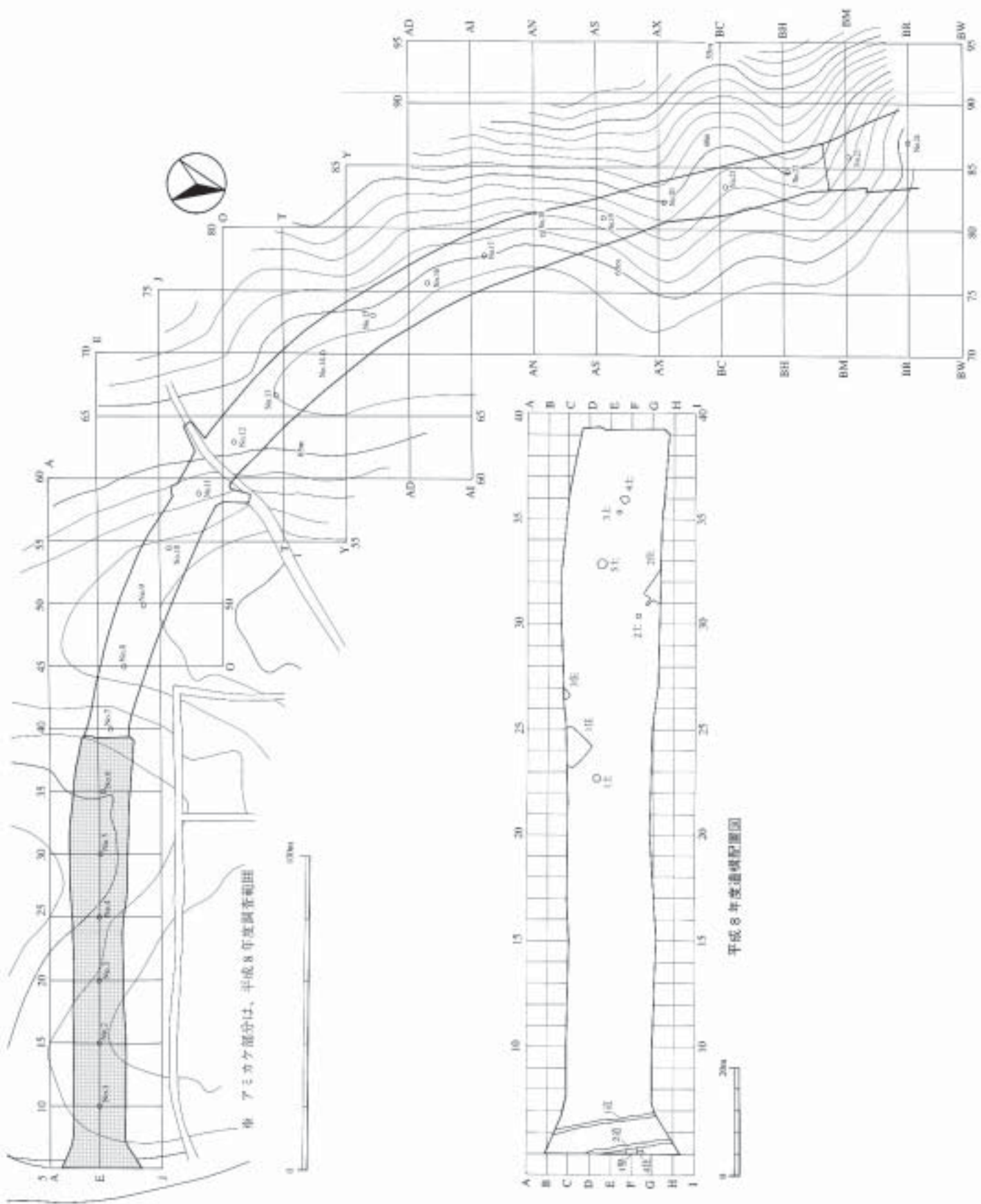
(沼宮内 陽一郎)

第 1 表 周辺の遺跡

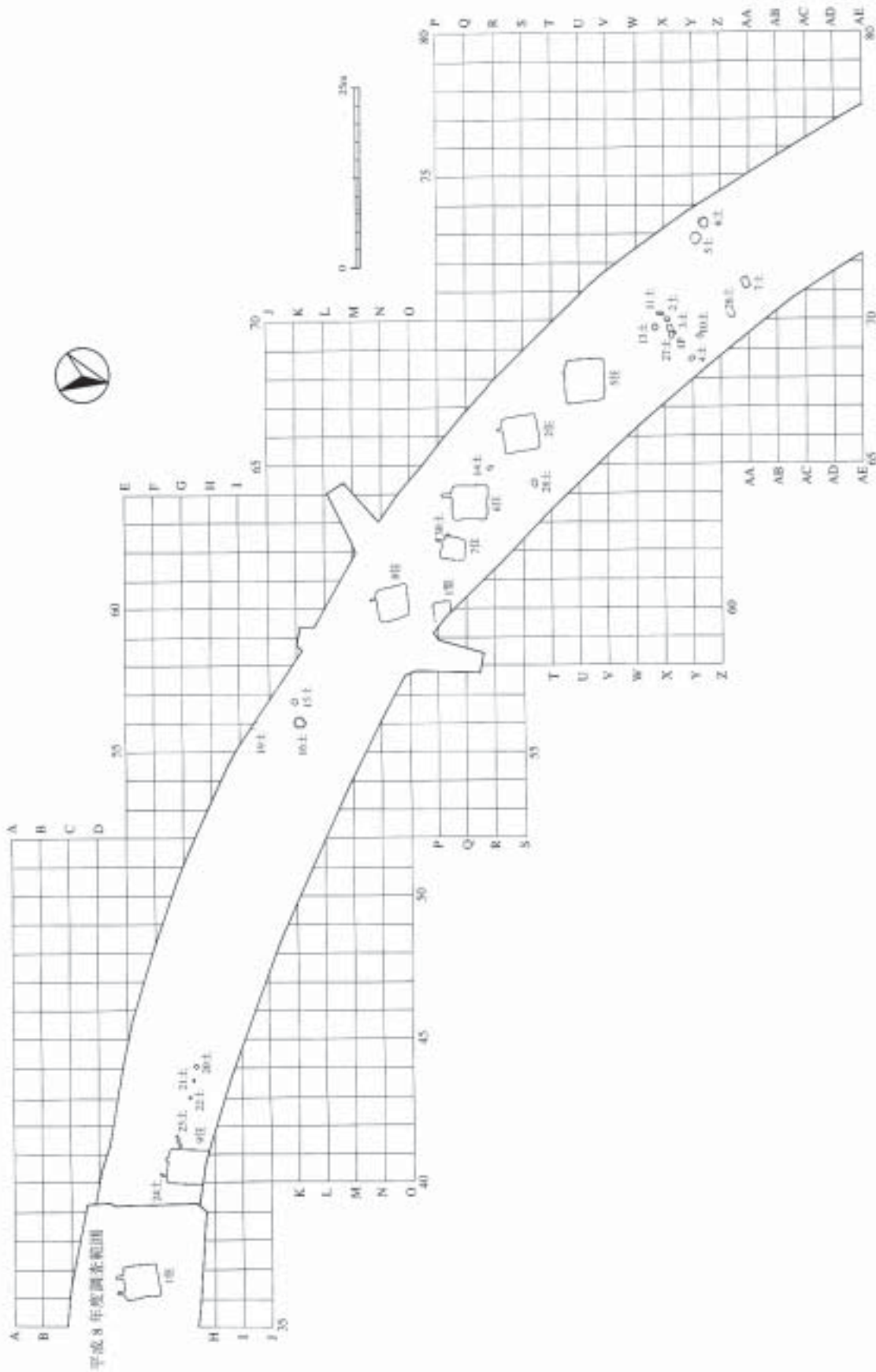
番号	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 代	文 献
1	葛野(2)遺跡	大別内字葛野	散布地	縄文、平安	青森市教育委員会1997
2	新町野遺跡	新町野字菅谷	散布地	縄文(前・後)、平安	青森市教育委員会1997
3	野木遺跡	野木字山口・野尻 合子沢字松森	集落跡	縄文、平安	青森市教育委員会1997 青森県教育委員会1998
4	野木沢田遺跡	野木字沢田	散布地	平安	
5	野木山口(1)遺跡	野木字山口	散布地	平安	
6	山吹(4)遺跡	大別内字山吹	散布地	縄文、平安	
7	川瀬(1)遺跡	高田字川瀬	散布地	平安	
8	朝日山(7)遺跡	高田字朝日山	散布地	平安	



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

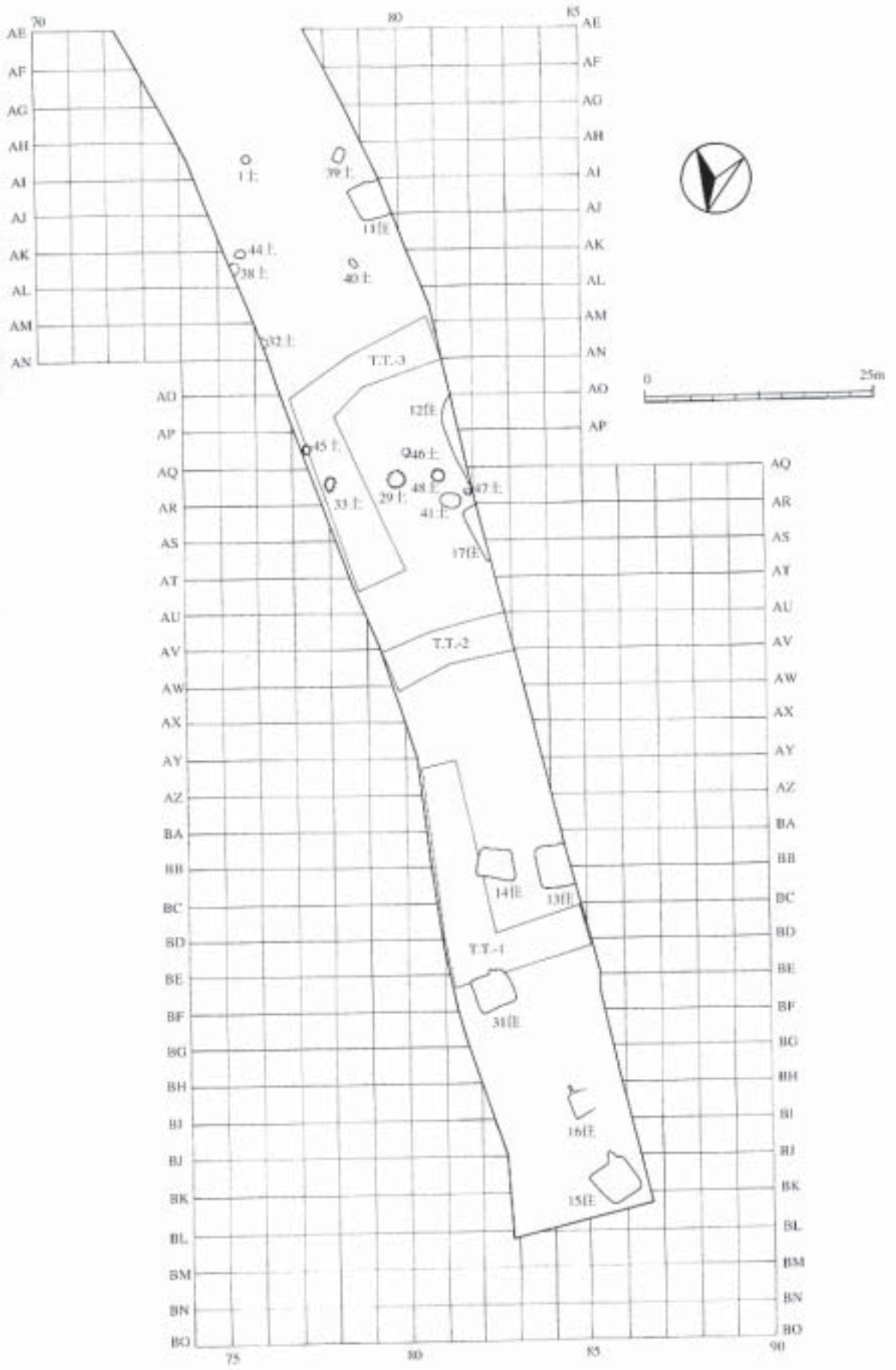


第2図 グリッド配置図・平成8年度遺構配置図



第3図 遺構配置図(1)





第4図 遺構配置図(2)

## 第2節 遺跡付近の地形と地質

青森県総合学校教育センター指導主事 工藤 一 彌

青森市は地形的・地質的にみて、北部の平野部、南部の八甲田山系、東部の奥羽山脈の延長部の三つに大別される。水系図から平野部は合流した数本の河川だけが北流し、南部は八甲田火山群を中心とする放射状の水系と、平野に向かって平坦面を北～北東に流れる平行河川、東部は折紙山・堀子岳・櫛木森山などを中心とする放射状の水系が読み取れる。

青森平野は新生代第四紀（約170万年前～現在）に形成され、東西約10km、南北約5kmのほぼ直角三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南は八甲田火山群につらなる火山性の台地、東は東岳を中心とした古い地層の分布する比較的急峻な山地、西は標高50～150mの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。火山性の台地は北～北西に流れる入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川などの河川によって細分される。本遺跡はこの内、西が荒川、東は合子沢川の二つの河川に挟まれている火山性台地の北西端に位置し、平野部に対し、北西側に緩く傾斜した台地が舌状に突き出した部分の尾根の部分に相当する。

平野部は標高15m以下の平坦地からなり、西の高田付近に荒川の扇状地、東の矢田前付近に野内川の扇状地があり、標高2～10mは各河川の三角州性の低地、標高2m以下の海岸低地は海岸線に平行な砂州とその間の湿地からなっている。それぞれの境界は市街地化や耕地整理によって不鮮明になっている。平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世初頭（約170万年前）から活動を始め、断層の東側が最大で800m以上も北に落ち込み、南方の八甲田火山群などの後背地から運ばれた大量の砕屑物により非常に厚い地層が堆積し、海岸平野が形成されていった。

南～南東側の火山性台地は、八甲田カルデラ（現在の田代平）から噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」で構成されており、八甲田火山群から北方に続いており標高は40～500mである。八甲田牧場（標高500m）、雲谷平（200m）、梨の木平（200m）、青森ゴルフ場（150m）、月見野霊園（100m）など緩傾斜の平坦面が広く残っており、傾斜は荒川右岸の青森ゴルフ場付近で約2.5度、雲谷付近で約3度、四ツ石付近で約2.2度、田茂木野付近で約2.7度、梨の木付近で約3.5度、平均で約3度である。この台地を構成する溶結凝灰岩は侵食に弱いため、入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など、いずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。

東部の山地は地質構造上、東北地方の脊梁山脈である奥羽山脈の延長部にあたり、新生代新第三紀（約2500万年前～約170万年前）の火山岩、堆積岩などで構成されており、流水の浸食作用により起伏の大きい地形となっている。

西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150mで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層が堆積している。丘陵地と平野の境界部に朝日山・細越・栄山など多数の遺跡が分布している。

本地域の地層は大部分が新生代（約6500万年前～現在）の地層で構成されており、先第三系（約6500万年以前の地層）は東部の東岳付近と夏泊半島の東岸に部分的に分布している。東岳付近のものは石灰岩、粘板岩、チャートなどの堆積岩と花崗岩からなり時代未詳である。夏泊半島のものは石灰岩、チャートからなり、石灰岩から発見されたコノドントという化石によって中生代三畳紀～ジュラ紀であるこ

とが分かった。東岳の先第三系の年代は、夏泊半島と比較的近距离にあることや他地域の花崗岩の年代から中生代であろうと推定されている。

新生代新第三紀の地層は下位から金ヶ沢層・四ツ沢層・和田川層の順に重なっている。金ヶ沢層は主に、変朽安山岩（風化・変質した安山岩）凝灰岩、凝灰角レキ岩などからなり、全体的に変質が激しく暗緑色～紫色をしている。これらの岩石は新第三紀の海底火山活動によるものであり、野内川上流一帯に分布している。四ツ沢層は金ヶ沢層分布域の周辺や駒込川・荒川の谷底に分布する。安山岩、玄武岩、泥岩、凝灰岩からなる。凝灰岩はグリーンタフと呼ばれ緑色を呈し、流紋岩質～安山岩質である。和田川層は泥岩、凝灰岩からなり、凝灰岩は野内川下流に分布し淡緑色～淡黄色で、凝灰角礫岩や細粒凝灰岩が多い。

新生代第四紀（約170万年前～現在）の地層は岡町層と十和田・八甲田火山噴出物に分けられる。岡町層は青森市西部の岡町、新城付近に分布し、砂岩、礫岩、シルト岩などからなり、西部の丘陵地の基盤を構成している。十和田・八甲田火山噴出物は八甲田火山溶岩、八甲田火砕流堆積物、降下火山灰等からなり、溶岩は両輝石安山岩～玄武岩質安山岩で多くの種類に分類されている。

八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく二つに区分され、そのうち1期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があります、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はK - Ar法により八甲田第1期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第2期火砕流堆積物を約40万年前の活動としている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000m、市の中心部では500m、市東部の矢田前付近では300mの深さまで達している。田代平付近には植物化石を多産する砂岩、凝灰岩、泥岩の薄互層からなる湖水堆積物があり、これを田代平湖成層といい、火砕流噴出によって生じたカルデラ湖に堆積したものと考えられる。

本地域の火山灰層は沢田（1976）により3層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

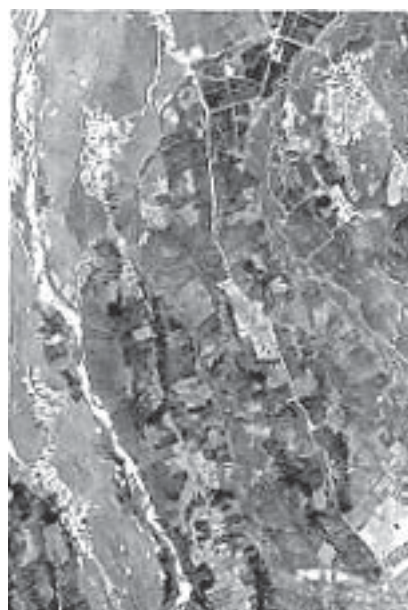
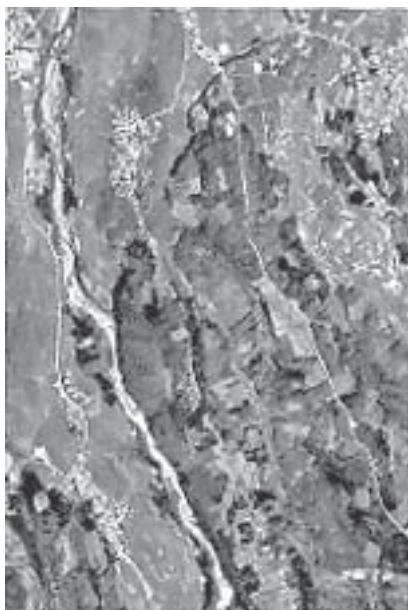
遺跡の基盤の地層は遺跡内には分布しないが、周辺の調査から八甲田火砕流堆積物と考えられる。最上位の黒色土中には部分的に十和田a火山灰、白頭山苦小牧火山灰が含まれている。黒色土の下位には広範囲に黄褐色火山灰層が分布しており、月見野火山灰と考えられる。その下位に存在する赤褐色の粘土質火山灰は大谷火山灰と考えられる。最下位の三内火山灰は遺跡では見つかっていない。火山灰層の下位の八甲田火砕流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多く、径が1mm前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は50～100mに見積もられており、荒川や駒込川の中流部などのように下位の第三系は比較的浅いところにあるものと推定されるが、遺跡周辺では下湯ダム付近で確認できる。青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布するので、本遺跡の第四系の基盤にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の火山灰層は、地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなってお

り、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。

なお、地形区分では 1948 年・1969 年・撮影の航空写真を使用した。

#### 引用・参考文献

北村信 他	1972	青森県の地質	(青森県)
沢田庄一郎	1976	近野遺跡発掘調査報告書( )	(青森県教育委員会)
沢田庄一郎	1976	三内丸山( )遺跡発掘調査報告書	(青森県教育委員会)
沢田庄一郎	1978	近野遺跡発掘調査報告書( )	(青森県教育委員会)
池田敬	1979	青森市の自然	(青森市教育委員会)
岩井武彦 他	1982	土地分類基本調査「青森西部」表層地質	(青森県)
岩井武彦 他	1983	土地分類基本調査「青森東部」表層地質	(青森県)
村岡洋文・高倉伸一	1988	10 万分の 1 八甲田地熱地域地質図・説明書	(地質調査所)
村岡洋文・長谷紘和	1990	5 万分の 1 地質図幅 黒石地域の地質	(地質調査所)



実体視写真



自然堤防



段丘面



谷底、平野、後背湿地



火山性台地

图1 地形分類图

### 第3節 遺跡の層序

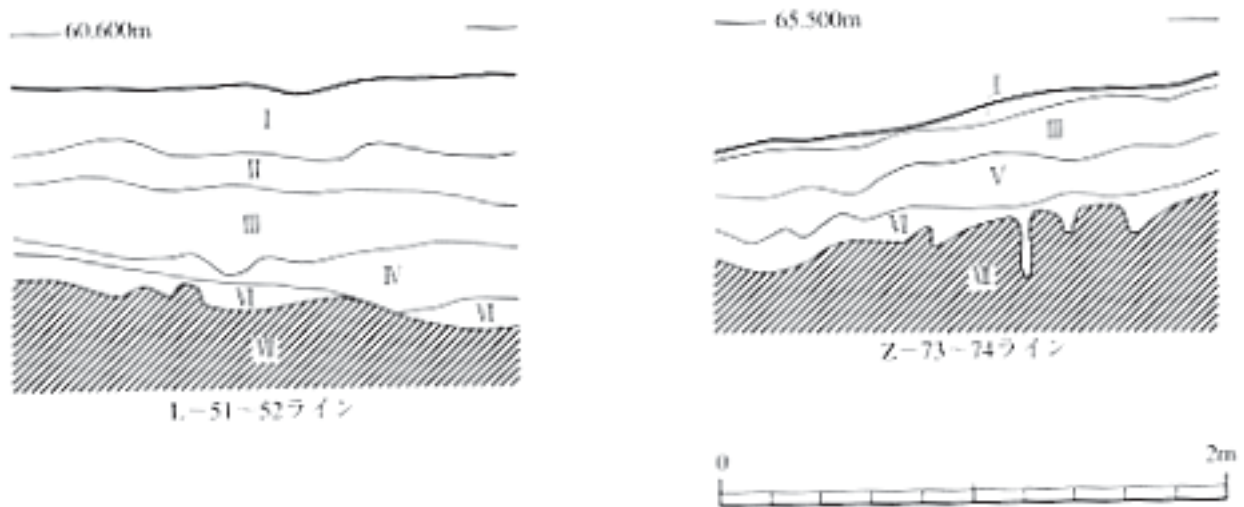
今年度の調査区内における層序は、表土から地山としたローム層上面まで、黒褐色～暗褐色系の土壌が約30～100cmの堆積でみられた。道路により攪乱された堆積状況を呈するところもあるが、調査区内のほぼ全域でプライマリーな堆積がみられ、欠落する箇所もあるが7層に分層することができた。

調査区内の基本層序については、グリッドライン35～60付近までは、概ね平成8年度調査時に確認された土層と同様な堆積状況であったが、グリッドライン60以降については、第Ⅰ層と第Ⅱ層が欠落した堆積状況であり、また今年度確認した土層と平成8年度調査時の第Ⅰ層以下については若干の差がみられた。そのため、第Ⅰ層から第Ⅱ層までは、平成8年度調査時の土層と対応するが、第Ⅲ層以下の層序については対応していない。

今年度調査区内の基本層序は次のとおりである。

- 第Ⅰ層：主に黒褐色土を呈し草木根が多い。表土。
- 第Ⅱ層：主に黒褐色土を呈する。平安時代に相当する遺物を中心に出土している。
- 第Ⅲ層：主に黒褐色土を呈する。平安時代に相当する遺物を中心に出土している。本層中位には、黄褐色を呈する粒子の細かい降下火山灰が堆積しており、視覚的並びに触覚的に白頭山火山灰と思われる。
- 第Ⅳ層：主に黒褐色を呈する。平成8年度調査時には確認されていない土層である。
- 第Ⅴ層：主に暗褐色を呈する。縄文時代に相当する遺物を中心に出土している。平成8年度の第Ⅱ層に相当する。
- 第Ⅵ層：主に暗褐色を呈する。ローム塊を多く含み、漸移層として捉えられる。平成8年度の第Ⅲ層に相当する。
- 第Ⅶ層：主に黄褐色を呈する。ローム層。平成8年度の第Ⅳ層に相当する。

(沼宮内 陽一郎)



第5図 基本層序

## 第 章 検出遺構と出土遺物

本調査により、竪穴式住居跡 15 軒、竪穴遺構 1 基、土坑 35 基、ピット 2 基が検出し、段ボール 23 箱分の土器・石器などの遺物が出土した。遺物の出土は、土師器が主体を占める。

遺構の帰属時期については、出土遺物から竪穴式住居跡・竪穴遺構が概ね 9 世紀後半から 10 世紀前半と思われる。土坑については、帰属時期の特定が可能なものと不明なものがある。可能なものについては、縄文時代と平安時代と思われる。遺跡内を全面的に調査していないため、集落跡の全体像は明確に捉え難いが、これらの遺構は大まかに住居群単位、土坑群単位のある程度のまとまりをもって検出している。以下、遺構別に記述する。

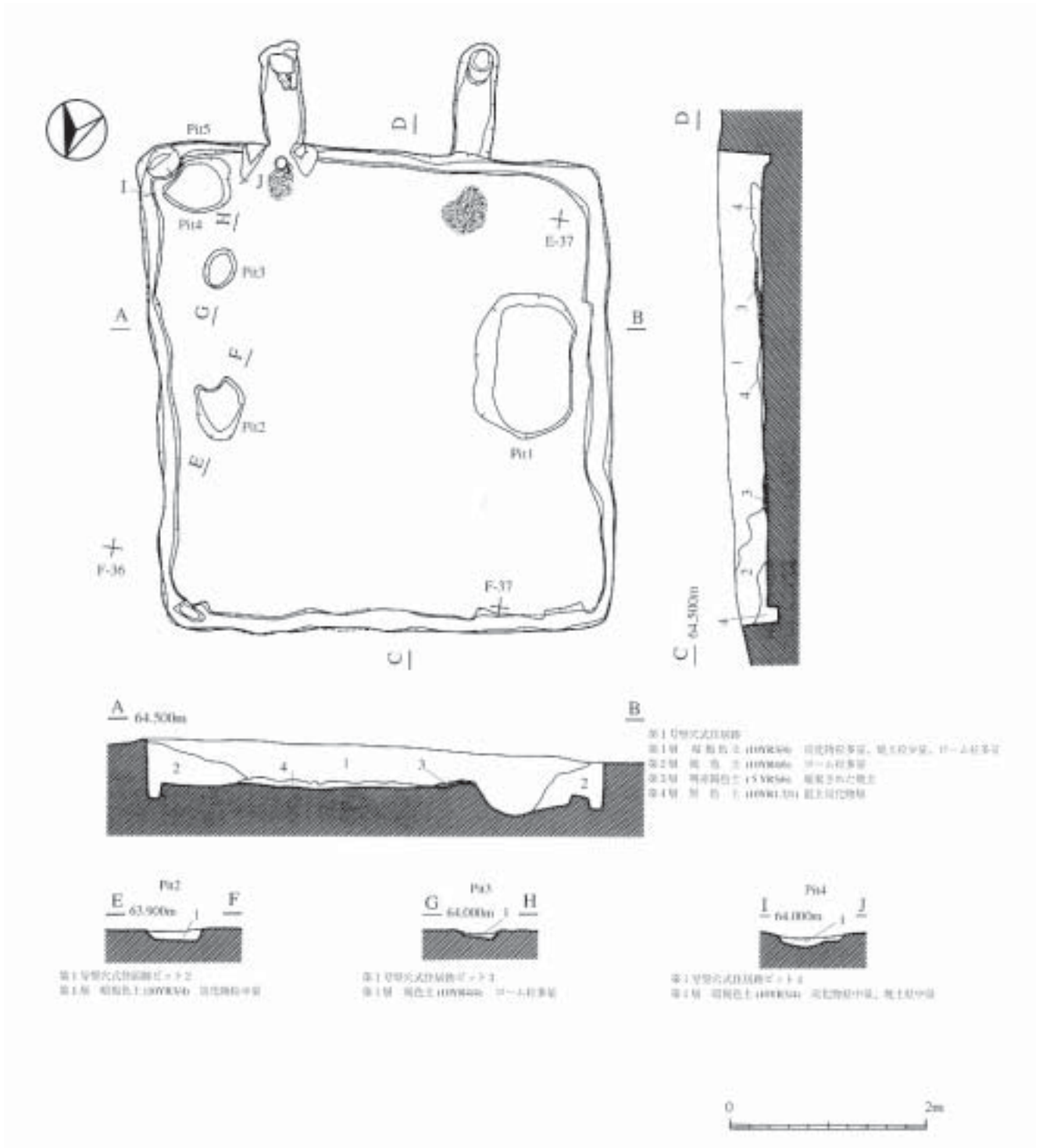
### 第 1 節 検出遺構

#### 1. 竪穴式住居跡

##### 第 1 号竪穴式住居跡（第 6 ～ 10 図）

- [ 位 置 ] E・F 36・37 グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] 第 4 号土坑（平成 8 年度）と重複する。新旧関係は不明である。
- [ 平面形・規模 ] ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺 454cm、東壁辺 490cm、南壁辺 472cm、西壁辺 464cm、下端部で北壁辺 444cm、東壁辺 486cm、南壁辺 454cm、西壁辺 444cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 46cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [ 床 ] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [ 壁 溝 ] 一巡する。規模は、上端部で幅 6cm ～ 36cm、下端部で幅 5cm ～ 34cm、深さ 2cm ～ 21cm を計る。北壁から南壁にかけて壁溝内から断続的に、炭化した腰板が直立した状態で出土した。
- [ ピ ッ ト ] 床面から 4 基、壁溝から 1 基検出した。ピット 1 は 146cm × 97cm × 29cm、ピット 2 は 63cm × 50cm × 11cm、ピット 3 は 45cm × 31cm × 5cm、ピット 4 は 73cm × 54cm × 9cm、ピット 5 は 38cm × 30cm × 8cm を計る。主柱穴は不明である。
- [ カ マ ド ] 南壁の中央より東寄り（A）と西寄り（B）から 2 基検出した。袖部の残存状況から、カマド A がカマド B より新しいと思われる。カマド A は半地下式で住居跡外に 105cm 程のびる。煙道底面は焚口付近から煙出し方向に緩やかに上昇する。袖部は粘土で作られており、火床面は 67cm × 53cm の楕円形を呈する。主軸方位は N - 25° - W である。煙道部上面と覆土中から礫が出土した。

カマド B は、煙道部と火床面のみが残存する。カマド B の煙道部は半地下式で住居跡外に 120cm 程のびる。煙道部底面は煙出しに向かい平坦にのび、煙出しで落ち込みほぼ垂直に立ち上がる。火床面は 52cm × 46cm の不整形円形を呈する。主軸方位は N - 17° - W である。
- [ 堆 積 ] 土 4 層に分層した。全体的に炭化物粒・焼土粒・ローム粒を含む。第 3 層は廃棄された焼土層であり、人為堆積の様相を呈する。



第6図 第1号竪穴式住居跡(1)

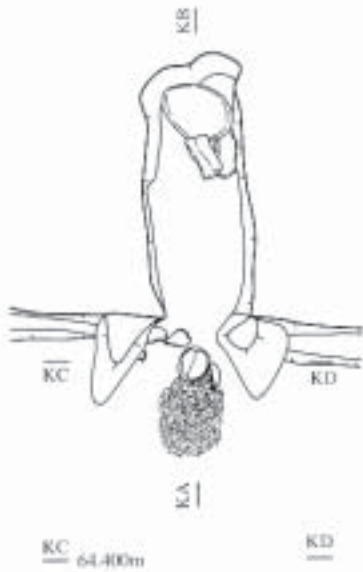
[出土遺物] 覆土、カマド、床面から土師器坏・甕が出土した。覆土から埴の破片が出土した。特に覆土からの出土が多い。

[時期] 出土遺物から、9世紀末～10世紀中頃に帰属すると考えられる。





カマドA



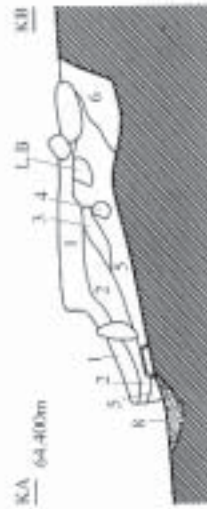
KC 64.400m

KD

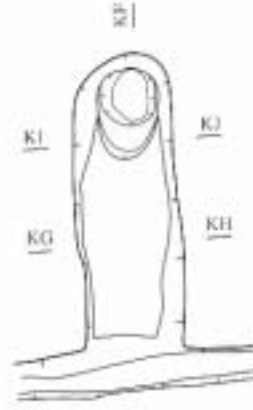


- 第1号竪穴式住居跡(2)A
- 第1層 赤褐色土 (HPR334) 沈泥物や草等、焼土粒多量、コーム粒多量
  - 第2層 赤褐色土 (HPR223) 焼土粒多量、コーム粒多量
  - 第3層 赤褐色土 (5 YR3/6) 焼土粒したコーム層
  - 第4層 赤褐色土 (5 YR2/4) 焼土層
  - 第5層 赤褐色土 (7.5 YR2/3) 灰化物粒多量
  - 第6層 赤褐色土 (HPR34) 灰化物粒多量
  - 第7層 赤褐色土 (HPR36) 焼土粒少量
  - 第8層 赤褐色土 (5 YR3/6) 焼土

カマドB



KA 64.400m



KE

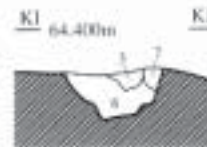


KE 64.400m



KG 64.400m

KI



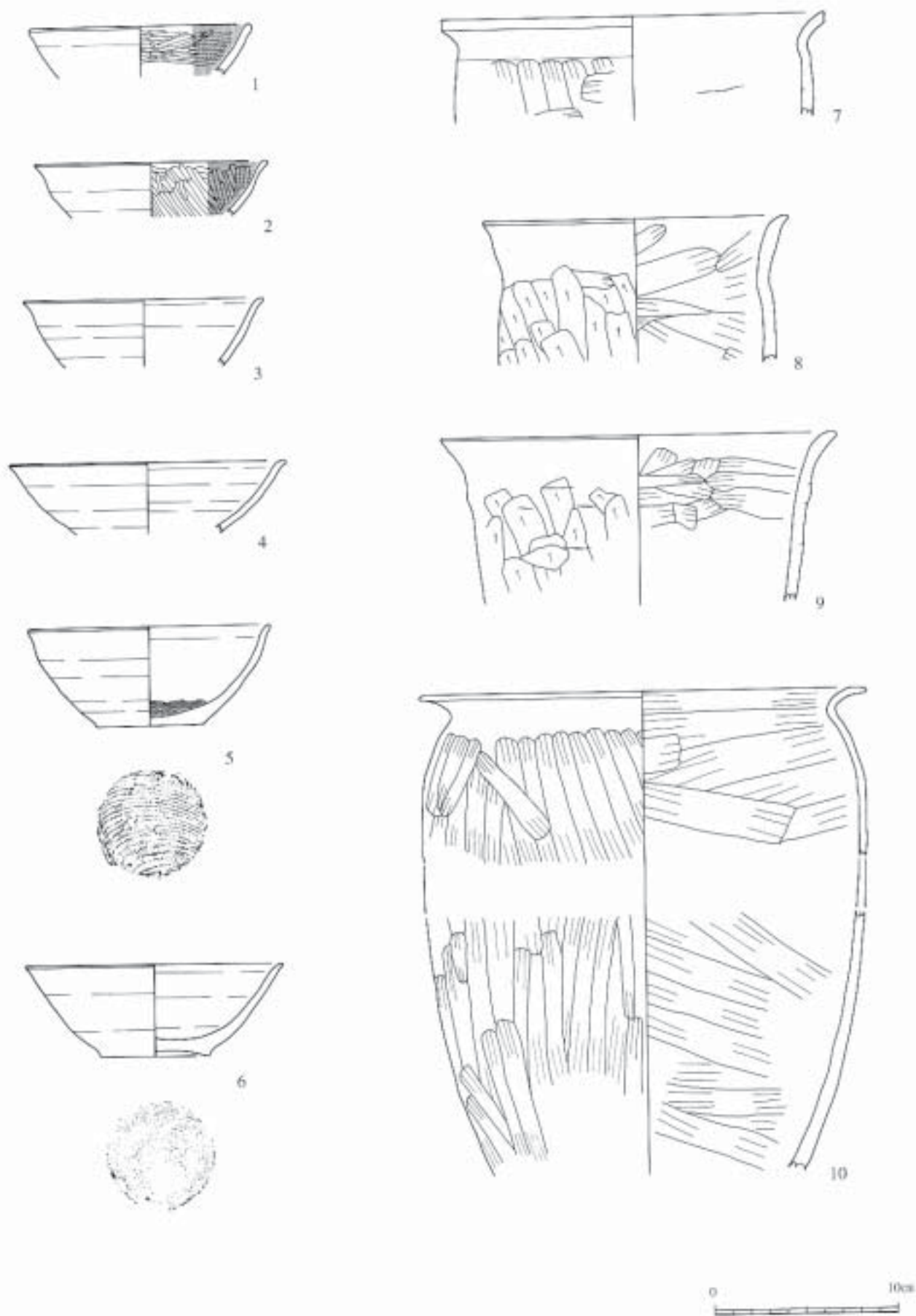
KI 64.400m

KI

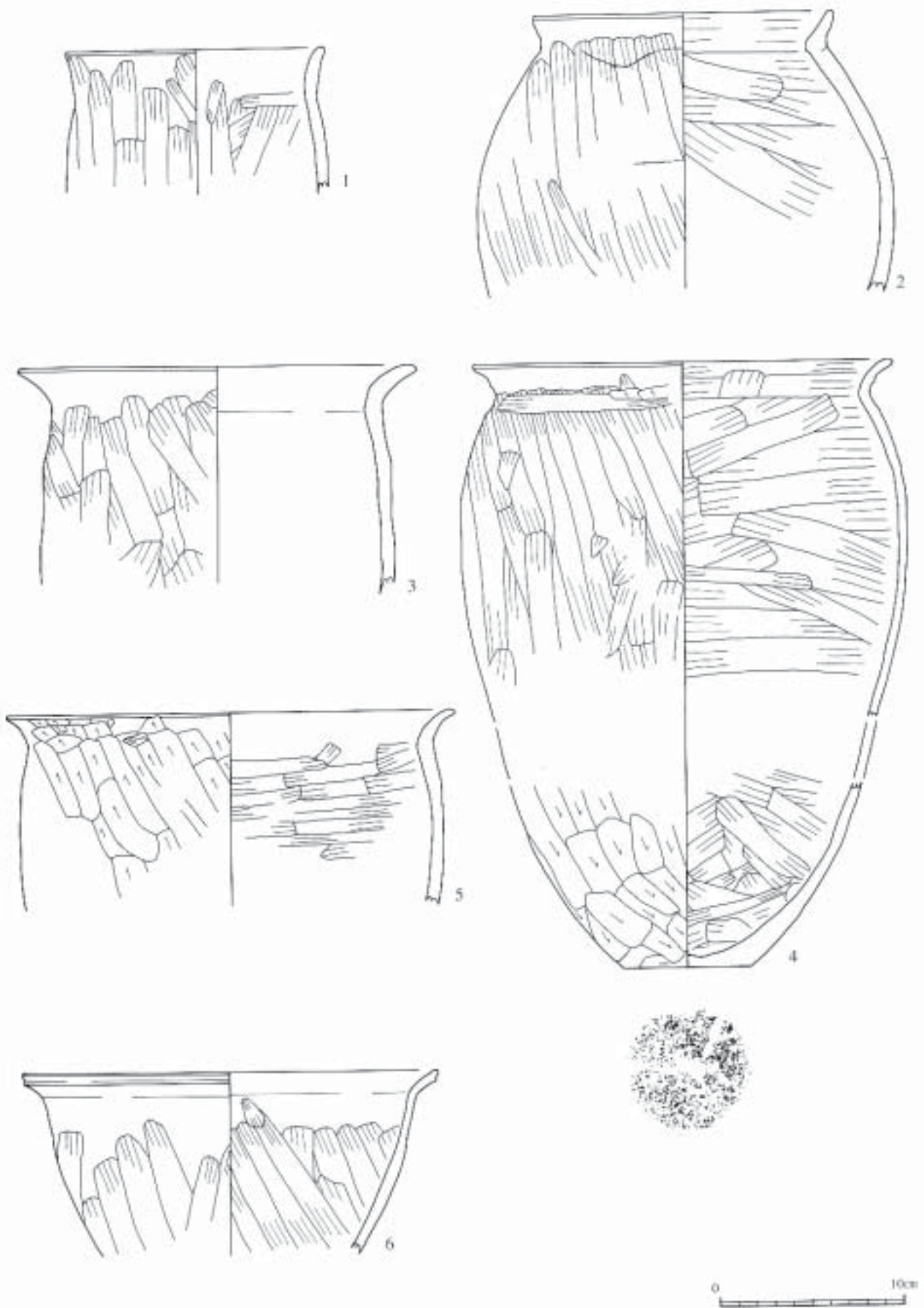
- 第1号竪穴式住居跡(2)B
- 第1層 赤褐色土 (HPR346) 焼土粒多量
  - 第2層 赤褐色土 (HPR346) コーム粒多量
  - 第3層 赤褐色土 (HPR346) 沈泥物粒多量、焼土粒多量、コーム粒多量
  - 第4層 赤褐色土 (HPR346) コーム粒、コーム粒多量
  - 第5層 赤褐色土 (HPR346) コーム粒少量
  - 第6層 赤褐色土 (HPR223) 焼土粒多量、コーム粒多量
  - 第7層 赤褐色土 (HPR346) 焼土粒少量
  - 第8層 赤褐色土 (5 YR3/6) 焼土



第7図 第1号竪穴式住居跡(2)・カマドA・B



第8图 第1号竖穴式住居跡出土遺物(1)



第9图 第1号竖穴式住居跡出土遺物(2)



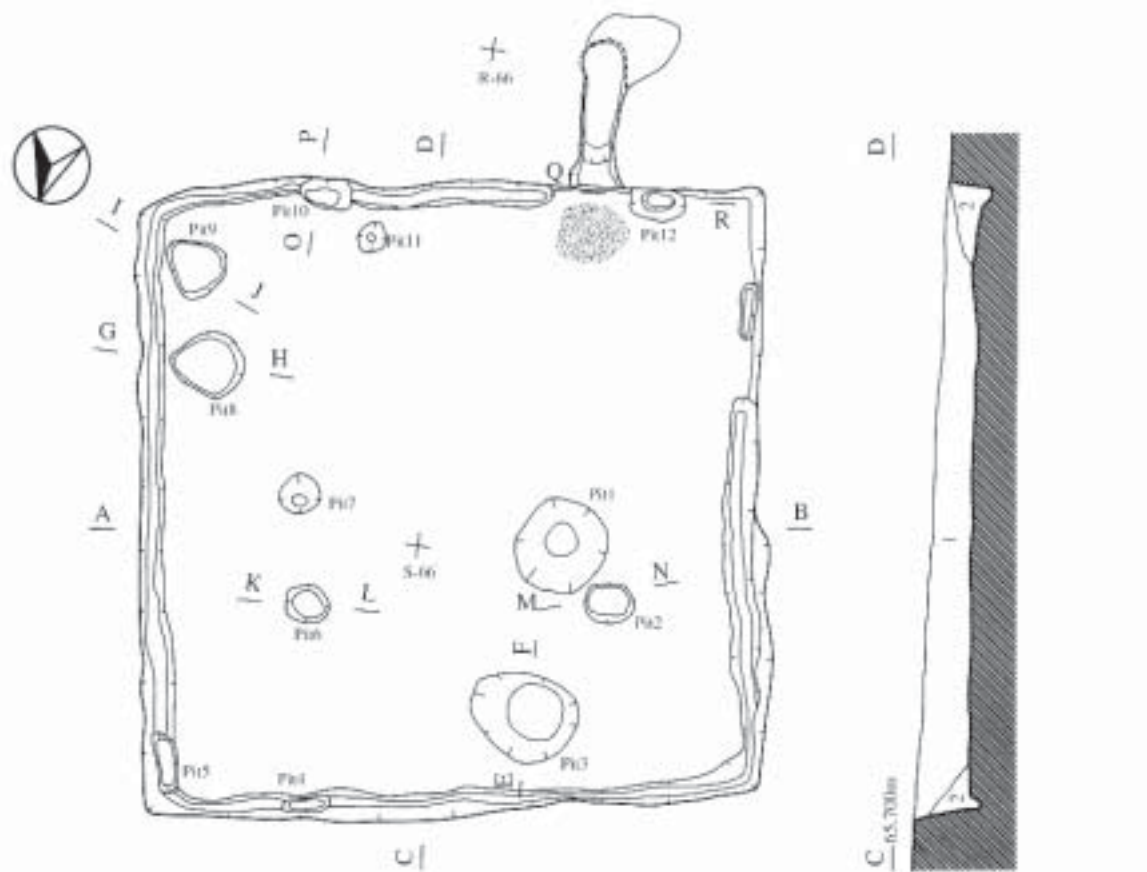
第10図 第1号竪穴式住居跡出土遺物(3)

番号	種別	器種	層位	法量(cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
8-1	土師器	杯	覆土	(12.8)	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	-	11%	4	砂粒少量・内黒
8-2	土師器	杯		(12.8)	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	-	11%	4	砂粒少量・内黒
8-3	土師器	杯		(13.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	11%	3	砂礫少量
8-4	土師器	杯		(15.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	8%	3	砂礫少量
8-5	土師器	杯	床面・覆土	(13.4)	5.4	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切	33%	4	使用痕・器高指数40
8-6	土師器	杯	カマドA	(14.2)	5.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	20%	3	器高指数35
8-7	土師器	甕		(21.0)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	12%	B a	砂粒少量・小礫微量
8-8	土師器	甕	覆土	(16.8)	-	-	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラナデ	-	16%	B b	砂粒多量
8-9	土師器	甕	カマド	(21.8)	-	-	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラナデ	-	20%	B a	砂粒多量
8-10	土師器	甕	カマドA	(24.6)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	-	25%	B a	小礫微量
9-1	土師器	甕	床直	(14.2)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	-	33%	B b	砂粒少量
9-2	土師器	壺	床面	(15.4)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-		砂粒少量
9-3	土師器	甕	床面	(21.8)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	25%	B a	小礫少量
9-4	土師器	甕	カマドA	(23.0)	-	-	ヘラケズリ・ヘラナデ	ヘラナデ	-	33%	B 2a	砂粒少量・砂底
9-5	土師器	甕	カマドA	(24.6)	-	-	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	10%	B 2a	小礫少量
9-6	土師器	鉢	床面	(22.8)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	-	12%		小礫少量
10-1	土師器	埴	覆土	(34.6)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	11%		砂粒多量

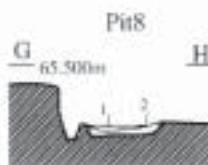
第2表 第1号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第2号竪穴式住居跡(第11~13図)

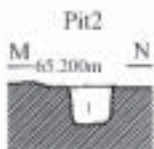
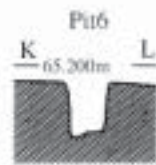
- [位置] R・S - 65・66グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺490cm、東壁辺484cm、南壁辺498cm、西壁辺486cm、下端部で北壁辺450cm、東壁辺462cm、南壁辺418cm、西壁辺452cmを計る。確認面から床面までの深さは最深部で46cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] 南・西壁の一部を除きほぼ一巡する。規模は、上端部で幅6cm~24cm、下端部で幅2cm~16cm、深さ3cm~15cmを計る。
- [ピット] 床面から9基、壁溝から3基検出した。ピット1は77cm×69cm×31cm、ピット2は41cm×30cm×31cm、ピット3は87cm×69cm×24cm、ピット4は38cm×14cm×13cm、ピット5は45cm×18cm×12cm、ピット6は34cm×29cm×41cm、ピット7は33cm×29cm×5cm、ピット8は59cm×52cm×8cm、ピット9は49cm×48cm×9cm、ピット10は41cm×24cm×35cm、ピット11は26cm×22cm×8cm、ピット12は43cm×26cm×52cmを計る。支柱穴は配列と深さからピット2・6・10・12と思われる。
- [カマド] 南壁の中央より西寄りから1基検出した。煙道部と火床面のみが存在する。煙道部は半地下式で住居跡外に110cm程のびる。煙道部底面は煙出しに向かい凹凸を伴いながら下り垂直に立ち上がる。火床面は58cm×48cmの不整形円形を呈する。主軸方位はN -



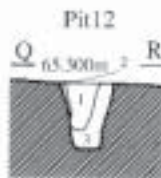
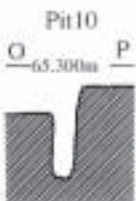
第2号竖穴式住居断面 -> 2  
第1層 灰褐色土 (09YR4/5) 中-少粘, 中-少砂



第2号竖穴式住居断面 -> 3  
第1層 黄褐色土 (09YR5/6) 中-少粘, 中-少砂  
第2層 褐色土 (09YR4/6) 中-少粘, 中-少砂



第2号竖穴式住居断面 -> 1  
第1層 黄褐色土 (09YR4/6) 中-少粘, 中-少砂



第2号竖穴式住居断面 -> 4  
第1層 黄褐色土 (09YR5/6) 中-少粘, 中-少砂  
第2層 褐色土 (09YR4/6) 中-少粘, 中-少砂  
第3層 褐色土 (09YR4/6) 中-少粘, 中-少砂



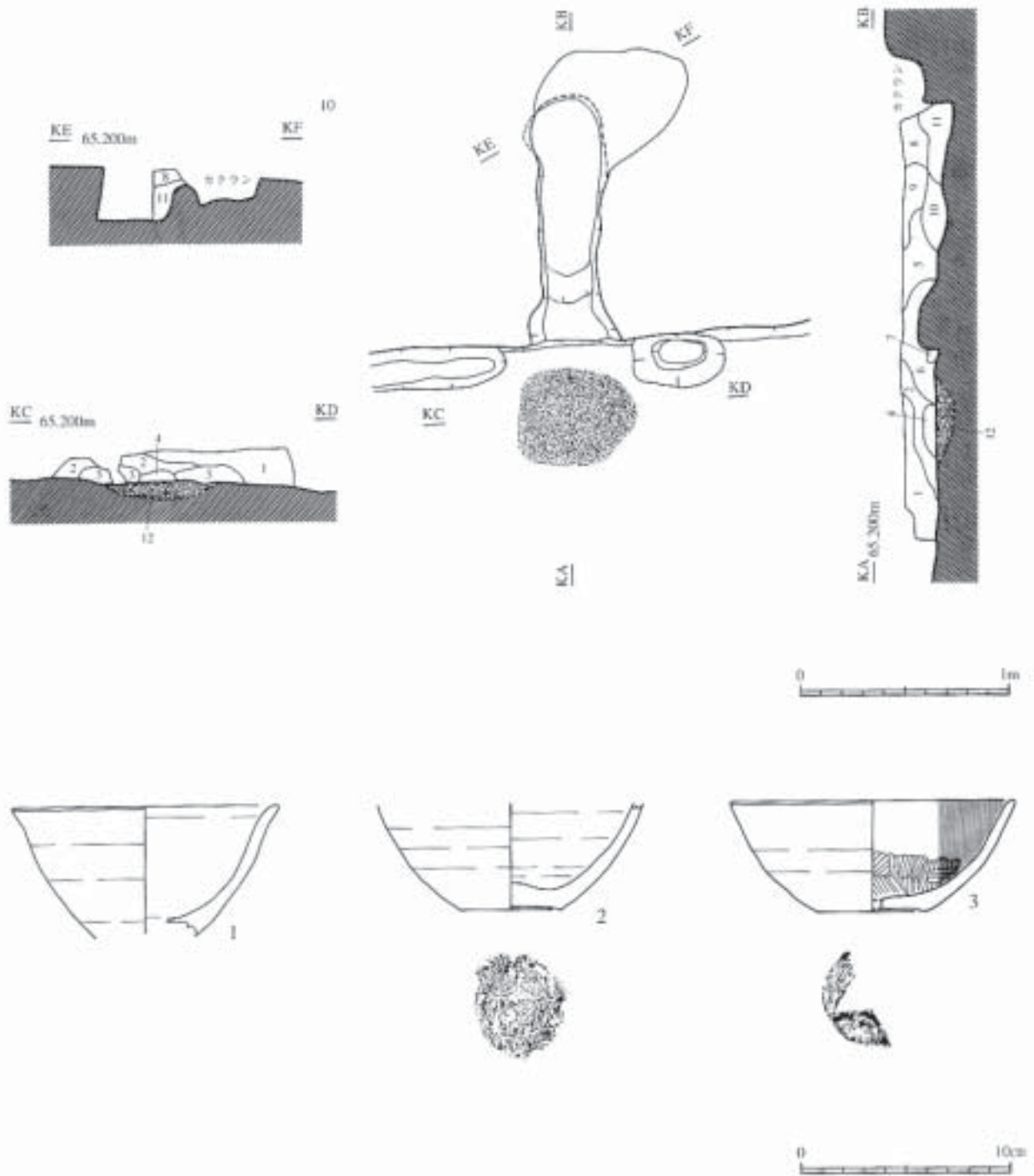
第11图 第2号竖穴式住居跡

20° - Wである。

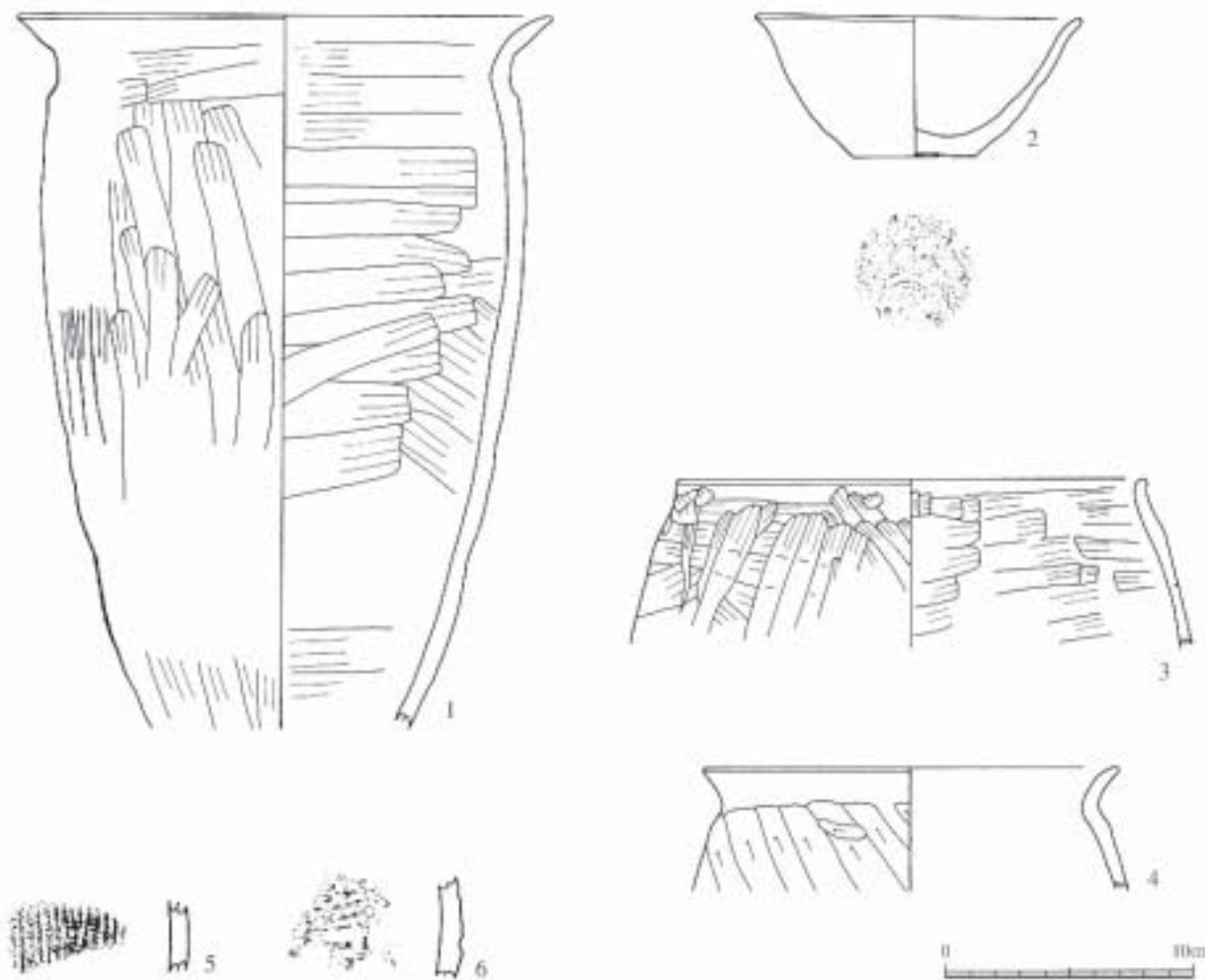
[堆積] 土層に分層した。ローム粒・ローム塊を多量に含み人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 床面とカマドから土師器杯・甕、覆土から第 群、第 群 1 類土器が少量出土した。第 13 図 1 は、第 7 号竪穴式住居跡を壊す風倒木から出土のものと、第 13 図 3 は第 5・6 号竪穴式住居跡のものと接合関係がある。

[時期] 出土遺物から 10 世紀初頭～前半に帰属すると考えられる。



第 12 図 第 2 号竪穴式住居跡カマド・出土遺物(1)



第13図 第2号竪穴式住居跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	層位	法量(cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
12-1	土師器	坏	Pit	(12.8)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	11%	3	砂粒微量
12-2	土師器	坏	床直	-	-	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	75%	3	砂粒少量
12-3	土師器	坏	床面・覆土	(13.8)	5.3	(5.4)	ロクロナデ	上半無調整・下半ヘラミガキ	回転糸切	8%	3	内黒・器高指数38
13-1	土師器	甗	覆土	(21.6)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	B 1a	砂粒少量
13-2	土師器	坏	カマド	(13.2)	5.8	5.0	摩滅	摩滅	回転糸切	83%	4	器高指数44
13-3	土師器	甗	覆土	(19.0)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	25%	B b	砂粒多量
13-4	土師器	甗	Pit	(16.8)	-	-	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	-	33%	B 2b	砂粒多量

番号	種別	器種	層位	法量(cm)			部位	文様	分類	備考
				口径	器高	底径				
13-5	弥生	鉢	覆土	-	-	-	胴部	L R 縦走縄文	- 1	
13-6	縄文	深鉢	覆土	-	-	-	胴部	L R 斜縄文 横位沈線		

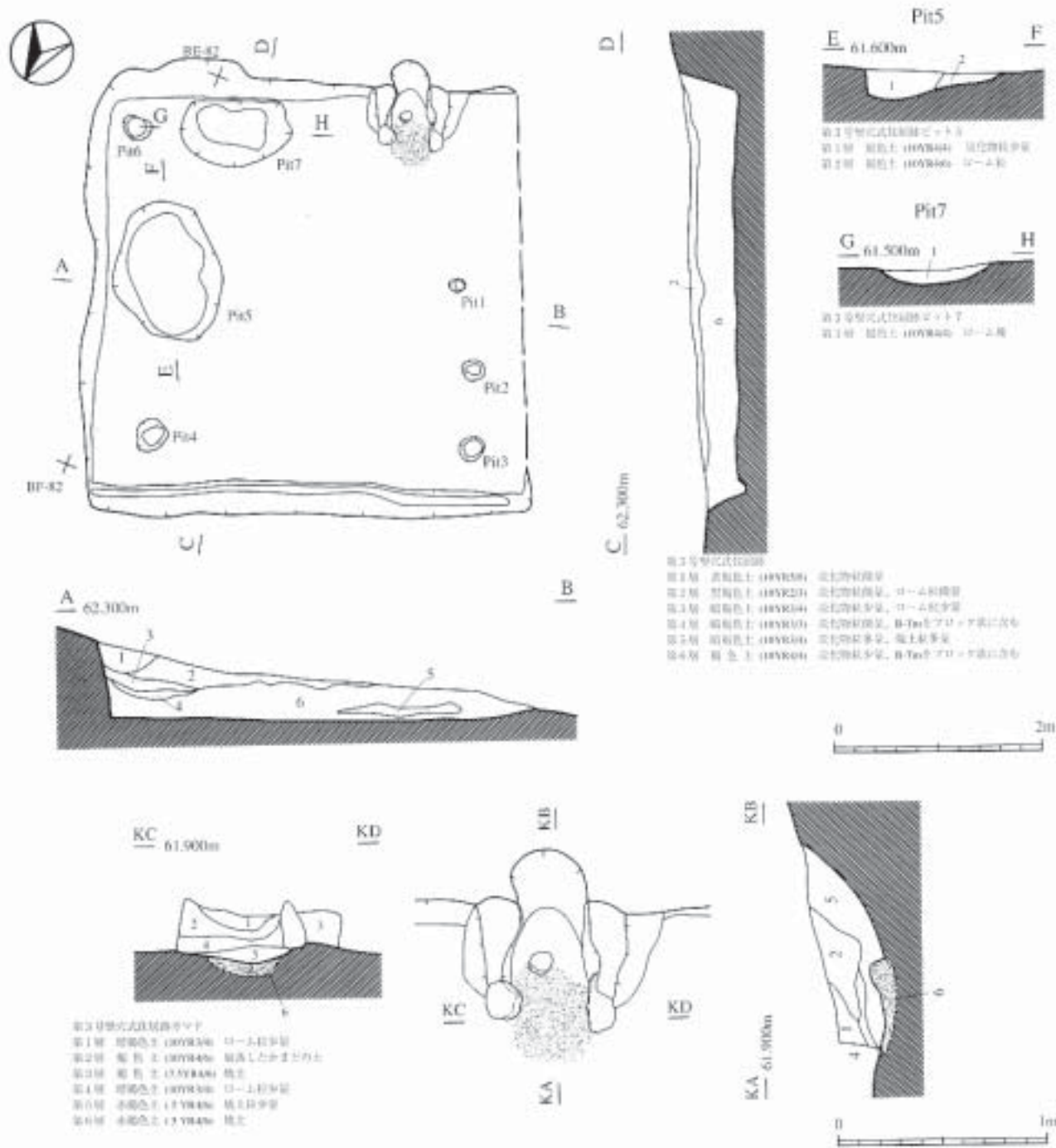
第3表 第2号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第3号竪穴式住居跡(第14~16図)

[位置] BE - 81・82 グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 南西壁が削平されているが、ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北西壁辺 424cm、北東壁辺 411cm、南東壁辺 493cm、下端部で北西壁辺 411cm、北東壁辺 365cm、南東壁辺



第14図 第3号竪穴式住居跡・カマド

383cmを計る。確認面から床面までの深さは最深部で69cmを計る。

- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [ 床 ] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [ 壁溝 ] 北西壁からのみ検出した。規模は、上端部で幅11cm～15cm、下端部で幅6cm～11cm、深さ4cm～14cmを計る。
- [ ピット ] 床面から8基確認した。ピット1は20cm×10cm×35cm、ピット2は22cm×21cm×9cm、



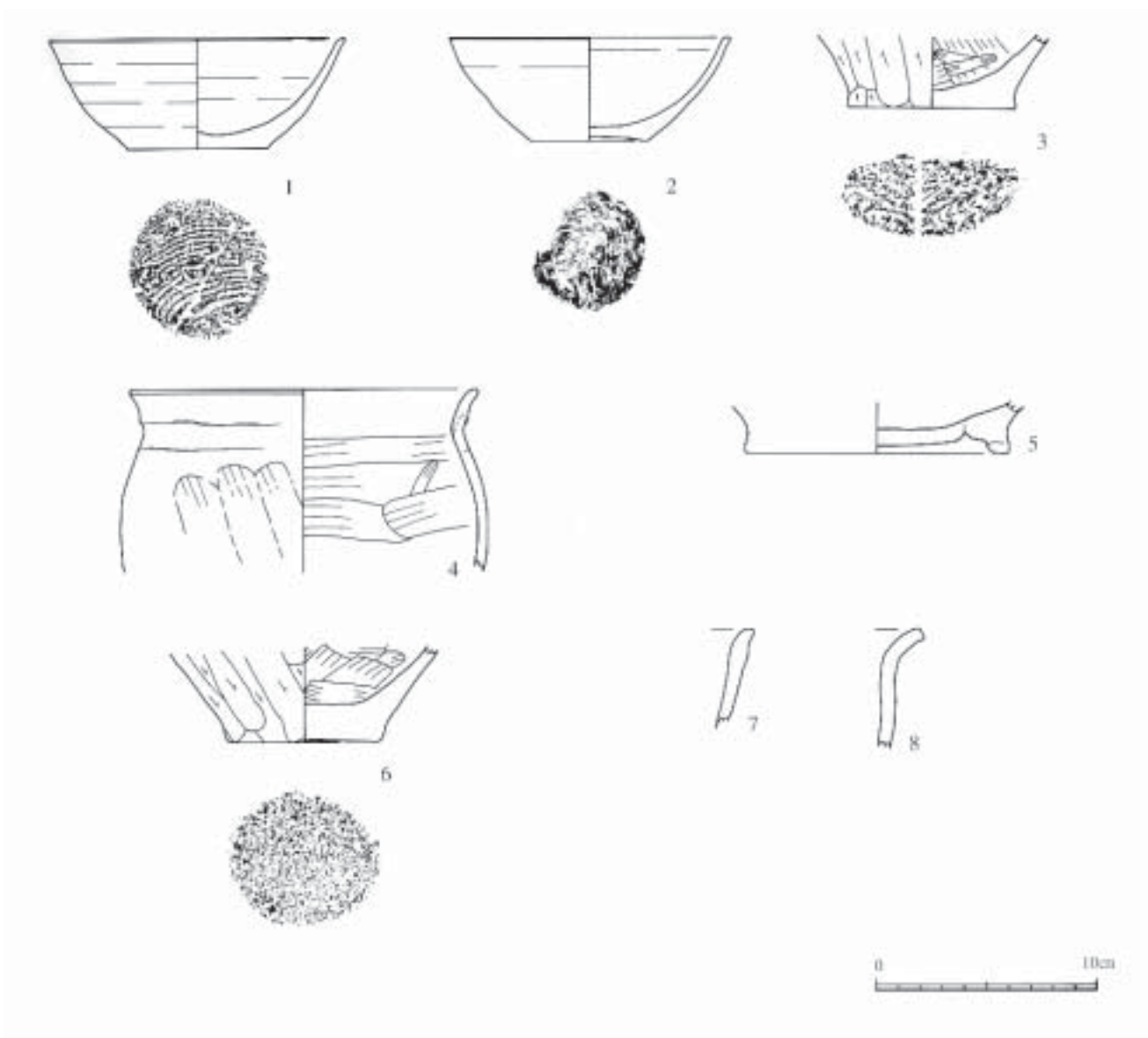
ピット3は24cm × 19cm × 27cm、ピット4は32cm × 28cm × 5cm、ピット5は138cm × 106cm × 20cm、ピット6は28cm × 21cm × 7cm、ピット7は107cm × 64cm × 14cmを計る。主柱穴は不明である。

[カマド] 南東壁の中央より南寄りから1基検出した。煙道部は半地下式で住居跡外に25cm程のびる。煙道部底面は煙出しに向かい上昇する。袖部は礫を芯材として、この上を粘土で覆い構築されている。火床面は55cm × 40cmの楕円形を呈する。焚口から支脚とした礫が出土した。主軸方位はN - 37° - Wである。

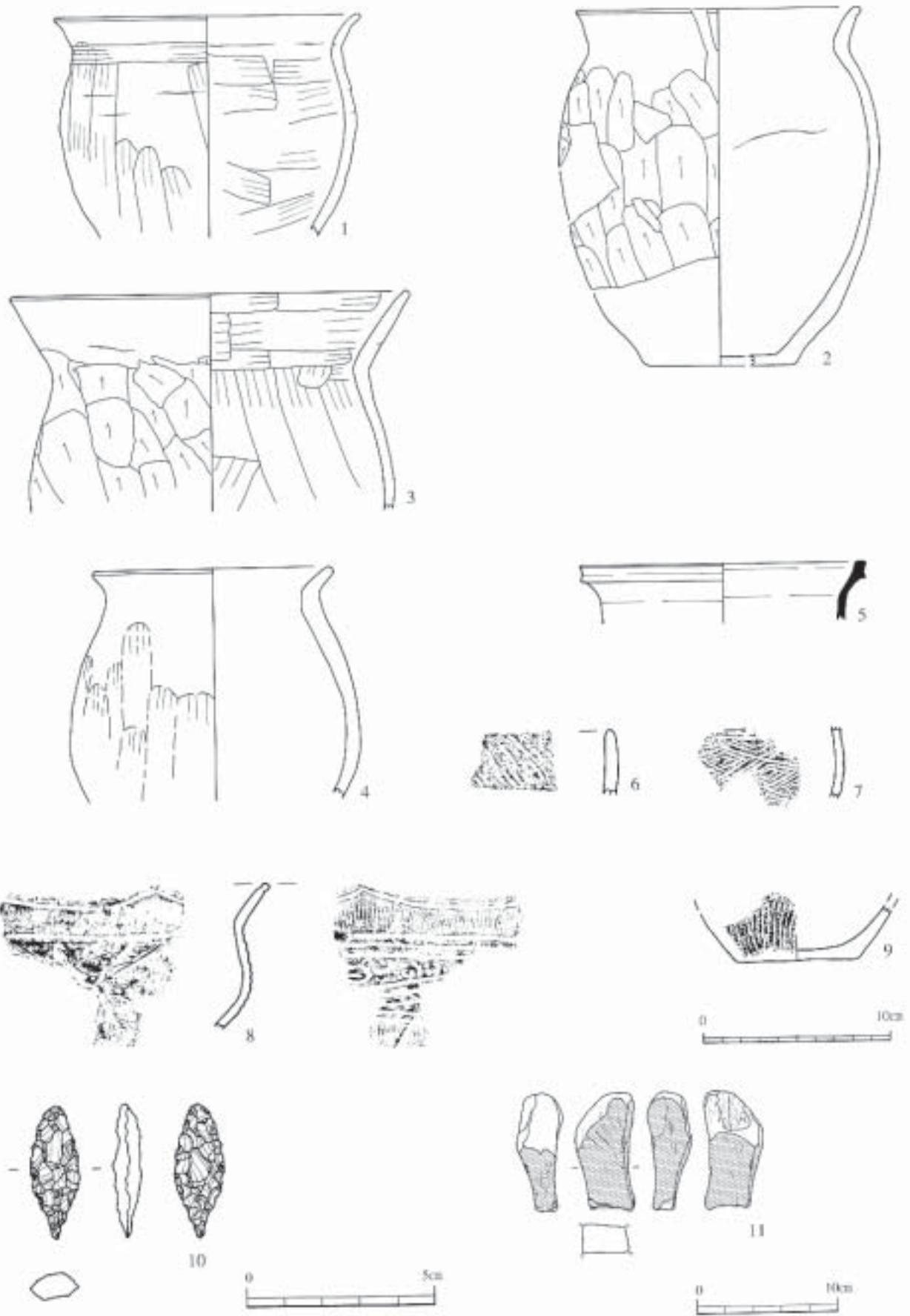
[堆積土] 下層に分層した。炭化物粒・ローム粒を含む暗褐色土～褐色土を主体として堆積する。第4層と第6層中にはB - Tmと思われる火山灰を粒状に含む。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土とカマドから土師器（甕・坏）、須恵器壺の頸部、砥石が出土した。また、覆土から第群4類、第群1・2類土器、石鏃、鉄滓が出土した。

[時期] 出土遺物と堆積土中の火山灰から10世紀前半～中頃に帰属すると考えられる。



第15図 第3号竪穴式住居跡出土遺物(1)



第16图 第3号竖穴式住居跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
15-1	土師器	坏	カマド	(13.4)	5.0	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切	80%	3	器高指数37
15-2	土師器	坏	カマド	(12.8)	4.7	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	50%	4	器高指数37
15-3	土師器	甕	覆土	-	-	(7.6)	ハラケズリ	ハラナデ	木葉痕	25%		小礫微量
15-4	土師器	甕	覆土	15.8	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	50%	B 2b	砂粒少量
15-5	土師器	甕	覆土	-	-	12.0	ナデ	ナデ	ナデ	-		砂粒少量
15-6	土師器	甕	覆土	-	-	7.0	ハラケズリ	ハラナデ	-	-		砂粒多量・砂底
15-7	土師器	甕	覆土	-	-	-	ハラナデ・ナデ	ナデ	-	-	B	
15-8	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ・ハラナデ	ナデ	-	-	B	
16-1	土師器	甕	覆土	(16.6)	-	-	ナデ・ハラナデ	ナデ・ハラナデ		25%	B 2b	砂粒微量
16-2	土師器	甕	カマド	15.4	19.3	(8.2)	指ナデ・ハラケズリ	指ナデ	ハラケズリ	50%	B 2b	小礫少量
16-3	土師器	甕	カマド	(21.6)	-	-	ナデ・ハラケズリ	ハラナデ	-	12%	B a	砂粒少量
16-4	土師器	壺	カマド	(13.0)	-	-	ハラナデ	不明	-	75%		砂粒少量
16-5	須恵器	甕	覆土	(15.4)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	12%		砂粒微量

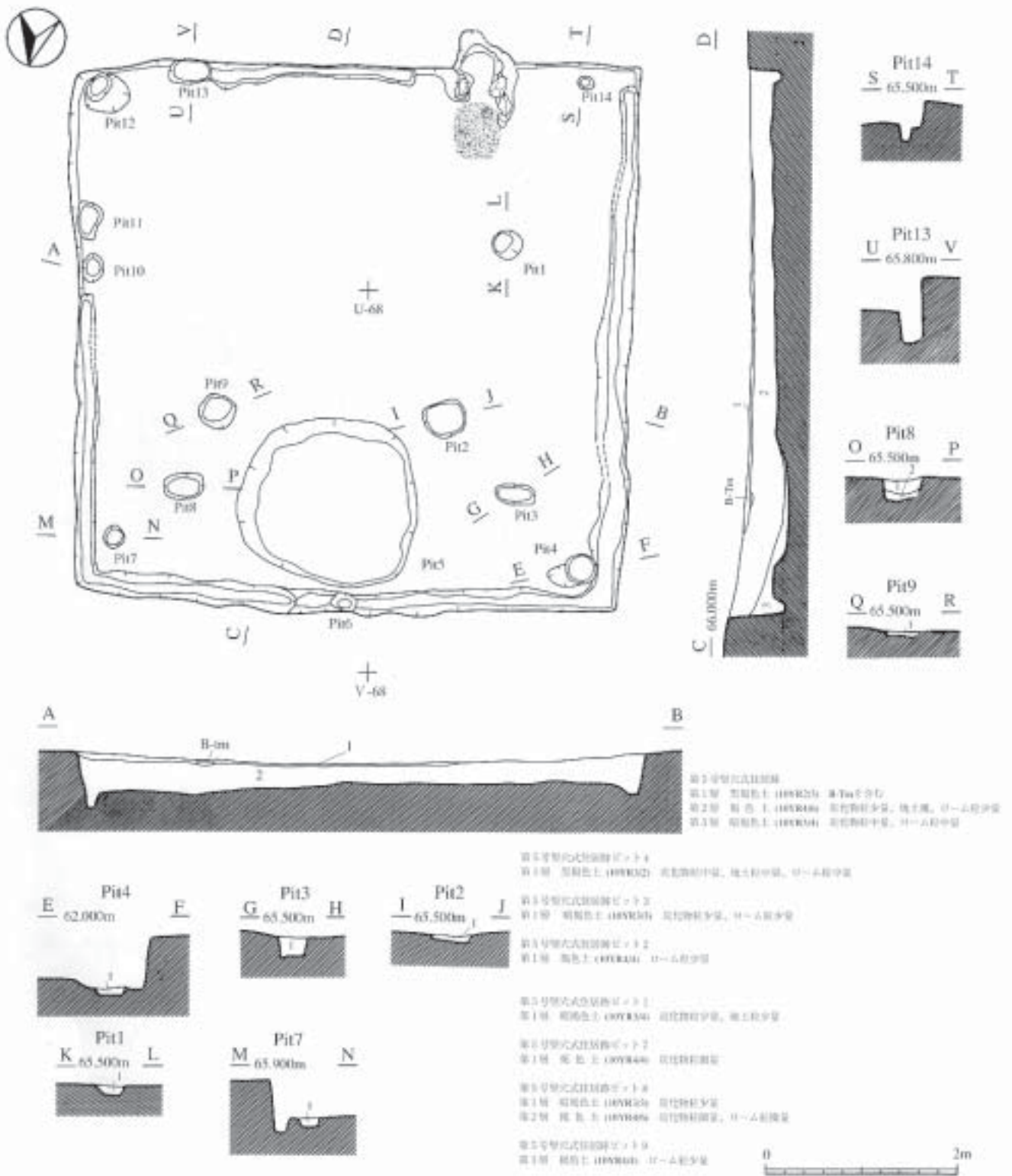
番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			部位	文様	分類	備考
				口径	器高	底径				
16-6	縄文	深鉢	覆土	(12.8)	-	-	口縁部	L R斜縄文	- 4	
16-7	弥生	鉢	覆土	-	-	-	胴部	重菱形文 刺突	- 2	
16-8	弥生	鉢	覆土	(22.0)	-	-	口縁部	波状口縁 波状工字文 刺突 R L縦走縄文	- 1	
16-9	弥生	鉢	覆土	-	-	(7.0)	胴部～底部	平底 R L縦走縄文	- 1	

番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
16-10	覆土	(36)	14	7	3.2	珪質頁岩	石 鏝	
16-11	覆土	85	42	33	119.6	石英安山岩	砥 石	スリ・擦痕

第4表 第3号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第5号竪穴式住居跡 (第17～20図)

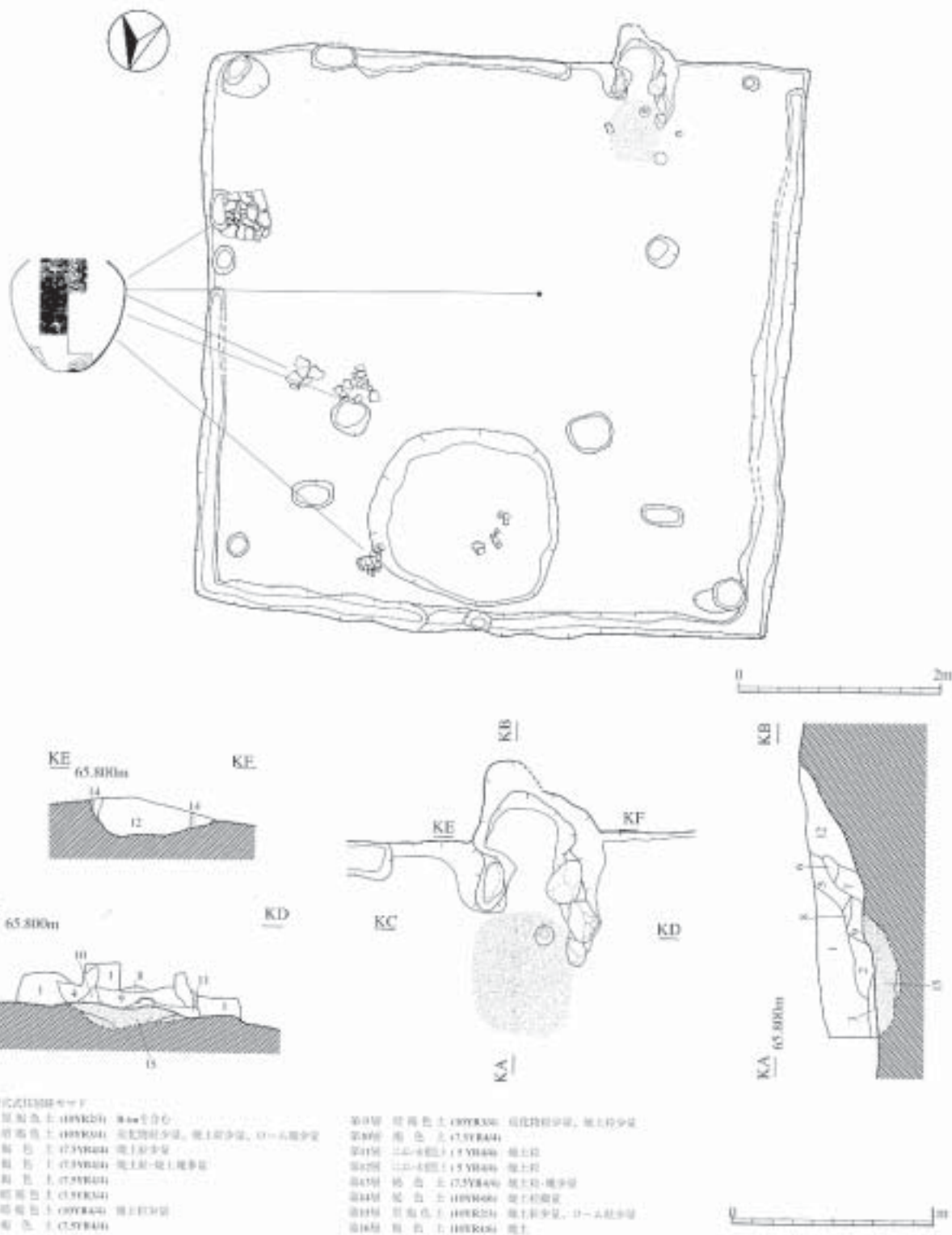
- [位置] T・U - 67・68グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺 576cm、東壁辺 554cm、南壁辺 598cm、西壁辺 572cm、下端部で北壁辺 516cm、東壁辺 516cm、南壁辺 578cm、西壁辺 540cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 46cm を計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] ほぼ一巡する。規模は、上端部で幅 8cm～38cm、下端部で幅 5cm～24cm、深さ 5cm～14cm を計る。
- [ピット] ト床面から 12基、壁溝から 2基検出した。ピット1は 31cm×30cm×11cm、ピット2は 45cm×40cm×9cm、ピット3は 42cm×20cm×21cm、ピット4は 52cm×32cm×14cm、ピット5は 198cm×179cm×11cm、ピット6は 28cm×20cm×20cm、ピット7は 25cm×22cm×8cm、ピット8は 42cm×28cm×17cm、ピット9は 39cm×36cm×7cm、ピット10は 30cm×22cm×8cm、ピット11は 41cm×26cm×8cm、ピット12は 43cm×43cm×18cm、ピット13は 44cm×24cm×31cm、ピット14は 17cm×14cm×15cm を計る。主柱穴は配列と深さからピット3・8・13と思われる。
- [カマド] 南壁の中央より西寄りに 1基構築されている。煙道部は半地下式で住居跡外に 40cm程



第17図 第5号竪穴式住居跡(1)

のびる。煙道部底面は煙出しに向かい上昇する。袖部は礫を芯材とし、その上を粘土で覆い構築されている。火床面は62cm × 52cmの隅丸方形を呈する。焚口から支脚と思われる環が出土した。主軸方位はN - 13° - Wである。

[堆積土] 土β層に分層した。炭化物粒・ローム粒を含む褐色土を主体として堆積する。第1層と

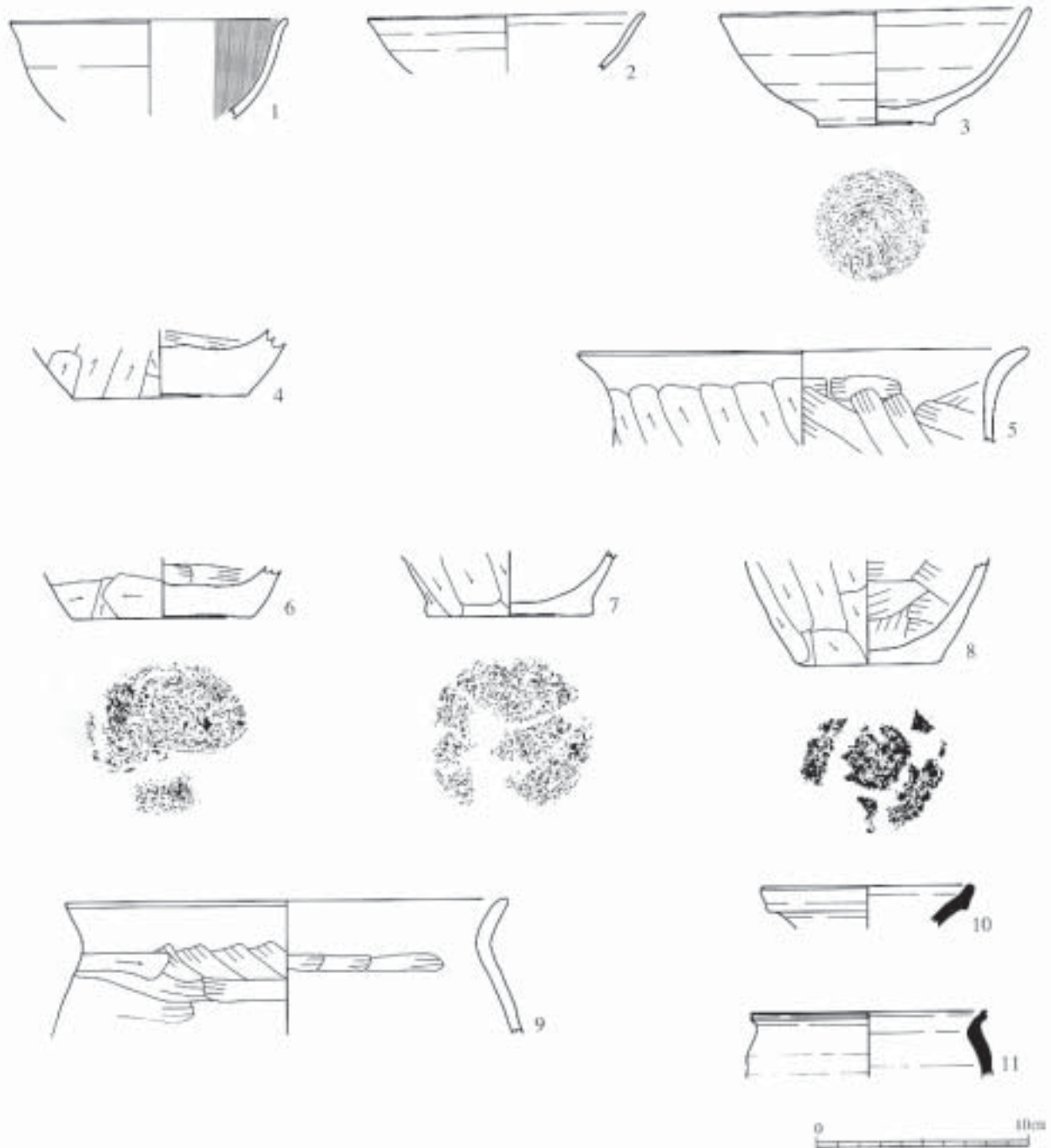


第18図 第5号竖穴式住居跡(2)・カマド

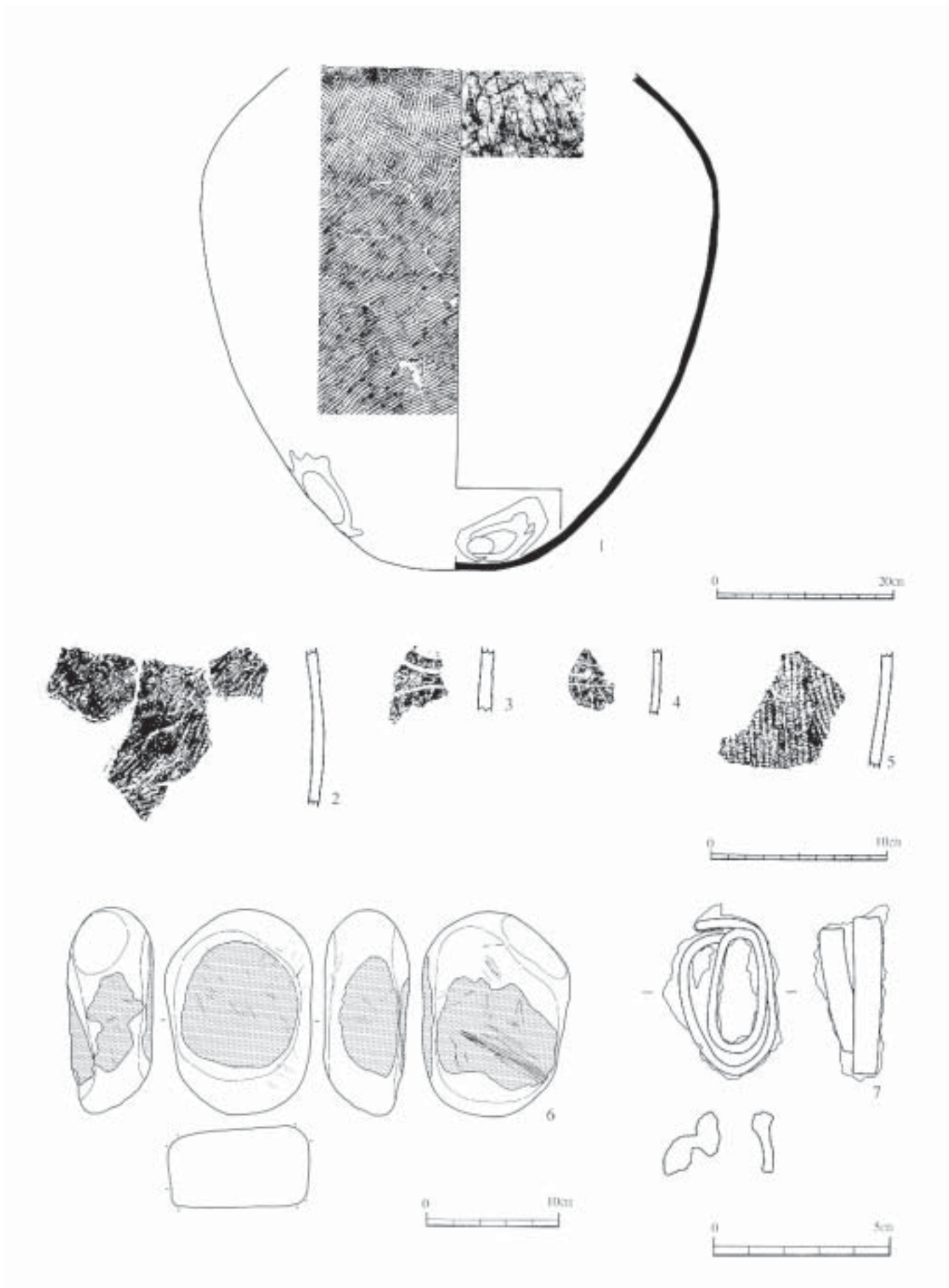
第2層間にはB - Tmと思われる火山灰を含む。遺物の出土状況等から第2層は人為堆積、第1層・第3層は自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、床面、カマドから土師器(坏・甕)、覆土第2層中から須恵器甕が住居跡東側にまとまって出土した。また、覆土第2層及び床面直上付近から円礫が出土した。10 ~ 32cm × 6 ~ 26cm × 5 ~ 17cmを計る。その他覆土及び床面から第 群4類、第 群1類土器、砥石が出土した。

[時期] 出土遺物と堆積土中の火山灰から10世紀初頭~前半に帰属すると考えられる。



第19図 第5号竪穴式住居跡出土遺物(1)



第20图 第5号竖穴式住居跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
19-1	土師器	坏	覆土	(13.2)	-	-	摩滅	無	-	20%	3	砂粒少量・内黒
19-2	土師器	坏	覆土	(13.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	11%	4	砂粒微量
19-3	土師器	坏	床直	(14.8)	5.4	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	67%	3	器高指数36
19-4	土師器	甕	覆土	-	-	(8.4)	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	75%		砂粒少量
19-5	土師器	甕	床直	(21.4)	-	-	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	20%	B a	小礫少量
19-6	土師器	甕	カマド	-	-	(8.6)	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	50%		砂粒多量・砂底
19-7	土師器	甕	カマド	-	-	8.0	ヘラケズリ	ナデ	-	-		小礫微量・砂底
19-8	土師器	甕	カマド	-	-	7.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-		砂粒少量・砂底
19-9	土師器	甕	カマド	(21.0)	-	-	ヘラナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラナデ	-	16%	B 2a	砂粒少量
19-10	須恵器	壺	床直	(10.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	33%		砂粒微量
19-11	須恵器	鉢	Pit5	11.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	12%		小礫多量
20-1	須恵器	甕	床直	-	-	-	タタキ目	アテ具痕	-	25%		小礫微量

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			部位	文様	分類	備考
				口径	器高	底径				
20-2	縄文	深鉢	覆土	-	-	-	胴部	L R 縄文	- 3	
20-3	縄文	深鉢	覆土	-	-	-	胴部	無文地に沈線	- 3	
20-4	縄文	深鉢	覆土	-	-	-	胴部	無文地に沈線	- 3	
20-5	弥生	鉢	覆土	-	-	-	胴部	R L 縦走縄文	- 1	内面炭化物付着

番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
20-6	覆土	155	115	64	1,500	石英安山岩	砥石	スリ・擦痕

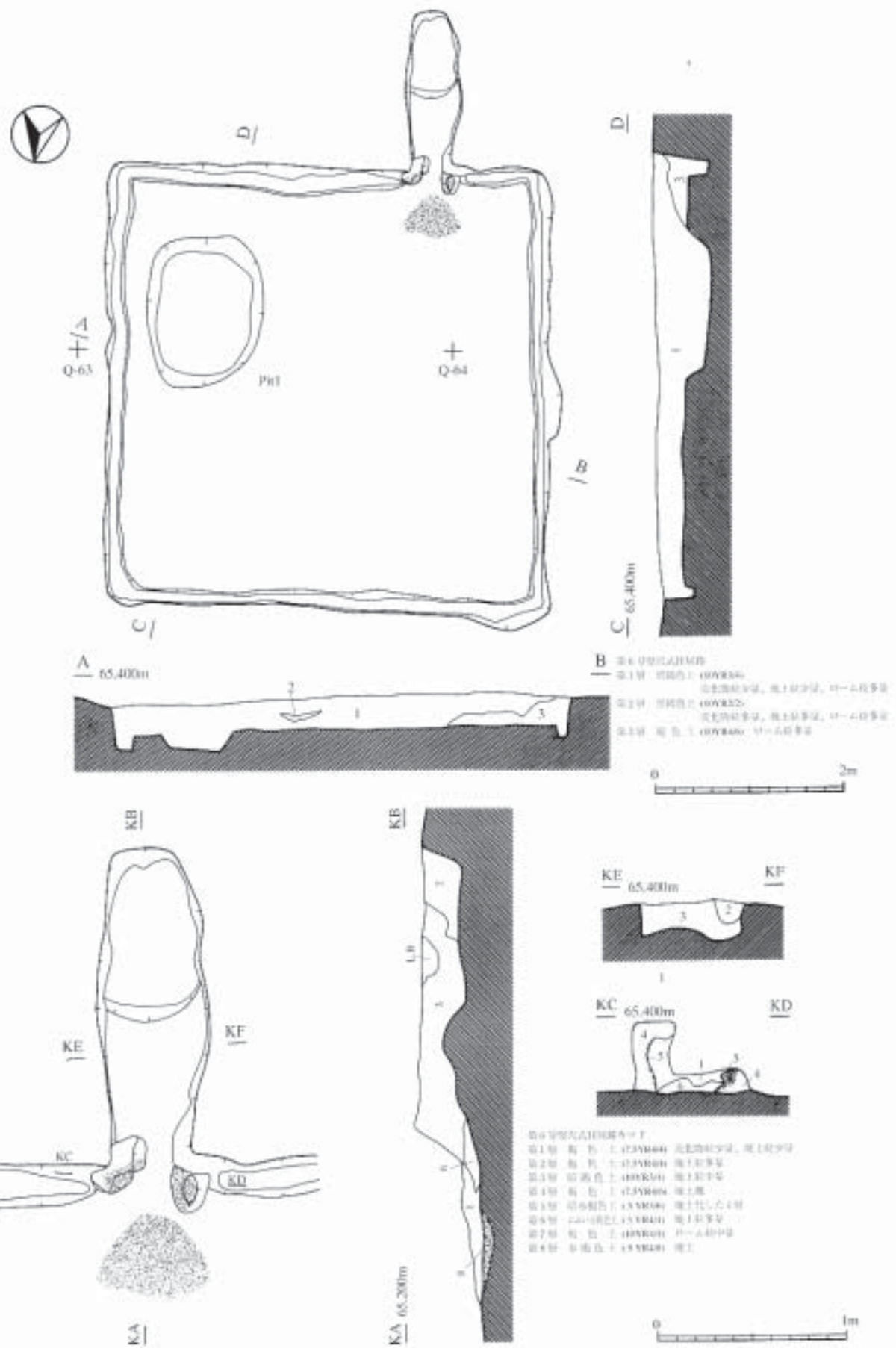
番号	層位	最大計測値				分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)		
20-7	覆土	50	33	21	(15.8)	鉄製品	刀装具?

第5表 第5号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第6号竪穴式住居跡 (第21～22図)

- [位置] P・Q - 63・64グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺 470cm、東壁辺 468cm、南壁辺 457cm、西壁辺 474cm、下端部で北壁辺 426cm、東壁辺 422cm、南壁辺 433cm、西壁辺 442cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 37cm を計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、北壁と南壁はほぼ垂直に、東壁と西壁は外側に向かい立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] 一巡する。規模は、上端部で幅 10cm～32cm、下端部で幅 6cm～22cm、深さ 8cm～35cm を計る。
- [ピット] 床面から 1 基検出した。規模は、174cm × 124cm × 18cm を計る。
- [カマド] 南壁の中央より西寄りから 1 基検出した。煙道部は半地下式で住居跡外に 170cm 程のびる。袖部は粘土で作られており、東側の住居跡内側の袖部は残存していないが、煙道部の住居跡側は一部粘土で覆われている。火床面は 62cm × 45cm の三角形を呈する。主軸方位は N - 15° - W である。
- [堆積土] 層に分層した。ローム粒・ローム塊を多量に含む暗褐色土を主体として堆積する。

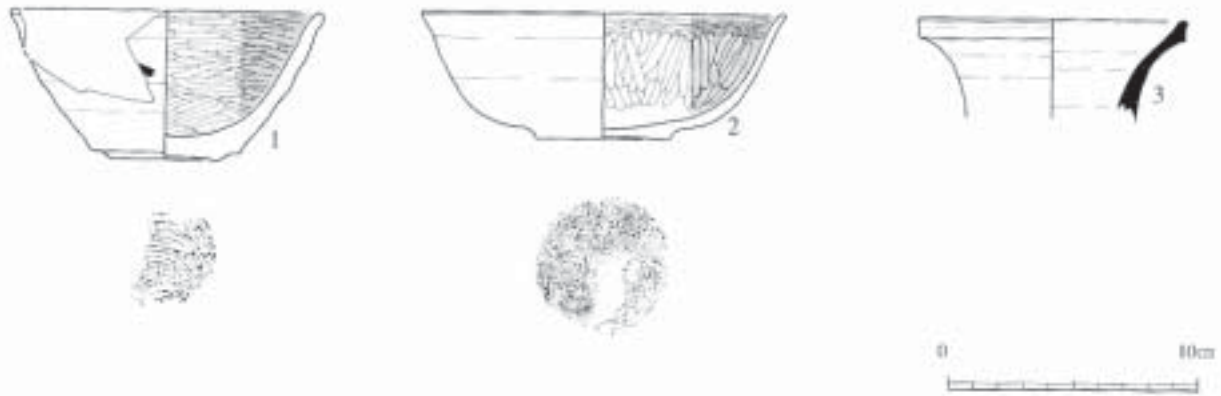




第21図 第6号竖穴式住居跡・カマド

[出土遺物] 覆土から土師器（坏・甕須恵器長頸壺が出土した。遺物出土量は少量である。

[時期] 出土遺物から10世紀初頭～前半に帰属すると考えられる。



第22図 第6号竪穴式住居跡出土遺物

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	保存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
22-1	土師器	坏	覆土	(12.6)	6.0	4.4	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切	50%	1	墨書?・内黒・器高指数48
22-2	土師器	坏	床面	(14.6)	5.1	5.4	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切・ヘラナデ	50%	2	内黒・器高指数34
22-3	須恵器	壺	覆土	10.8	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	10%		砂粒少量

第6表 第6号竪穴式住居跡出土遺物観察表

### 第7号竪穴式住居跡（第23～24図）

[位置] P・Q 61・62グリッドで検出した。基本層序第層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] 第30号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] ほぼ方形を呈する。東壁の一部が風倒木により壊されている。規模は、壁の上端部で北壁辺332cm、東壁は推定で360cm、南壁辺340cm、西壁辺298cm、下端部で北壁辺314cm、東壁辺324cm、南壁辺302cm、西壁辺280cmを計る。確認面から床面までの深さは最深部で66cmを計る。

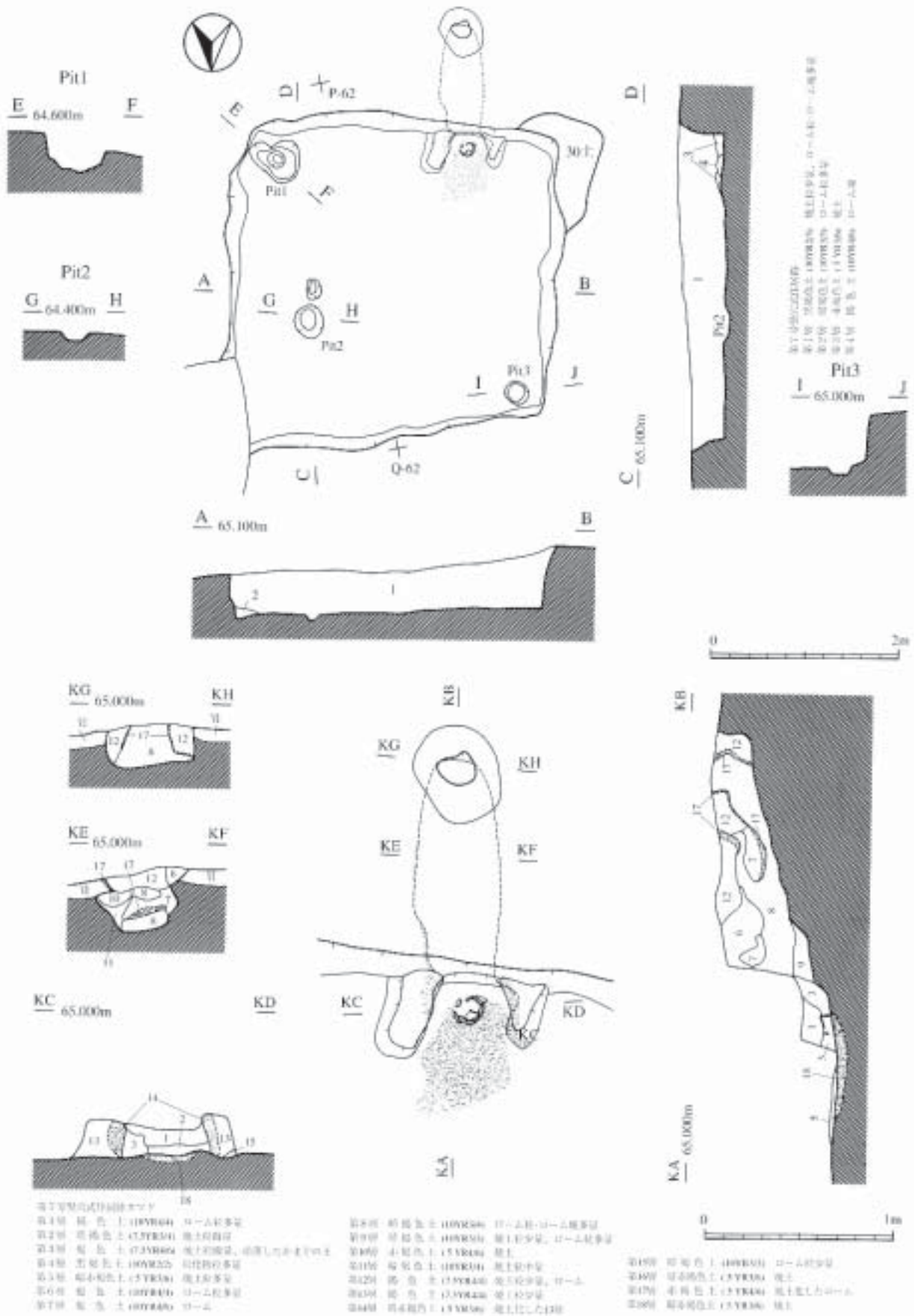
[壁] 基本層序第層を壁面としており、やや外側に向かい立ち上がる。

[床] 基本層序第層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。

[壁溝] 検出しなかった。

[ピット] 床面から5基検出した。ピット1は56cm × 44cm × 37cm、ピット2は36cm × 31cm × 7cm、ピット3は25cm × 23cm × 7cm、ピット4は22cm × 21cm × 8cmを計る。主柱穴は不明である。

[カマド] 南壁の中央より西寄りに1基構築されている。煙道部は半地下式で110cm程のびる。煙道部底面は煙出しに向かい緩やかに上昇し煙出しでほぼ垂直に立ち上がる。煙道部上面と煙出しは粘土で覆われている。焼土化した煙道部側面にさらに粘土が貼り付けられている。袖部は粘土で作られている。火床面は73cm × 50cmの不整形を呈する。焚口から支脚と思われる小型の甕が出土した。主軸方位はN - 6° - Wである。



第23図 第7号竪穴式住居跡・カマド

[堆積土] 層に分層した。ローム粒・ローム塊を多量に含む黒褐色土を主体として堆積する。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土とカマドから土師器（坏・甕）が出土した。

[時期] 出土遺物から10世紀初頭～前半に帰属すると考えられる。



第24図 第7号竪穴式住居跡出土遺物

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
24-1	土師器	坏	カマド	14.4	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	16%	4	砂礫少量
24-2	土師器	甕	覆土	11.0	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	-	20%	B 1c	砂粒微量
24-3	土師器	甕	カマド	(10.8)	9.2	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	75%	A 1	砂粒多量
24-4	土師器	甕	カマド	12.4	12.5	6.6	指ナデ・ヘラナデ	指ナデ	-	83%	B 2c	砂粒多量・砂底
24-5	土師器	甕	カマド	-	-	7.0	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	-		小礫少量
24-6	土師器	甕	カマド	(11.4)	-	-	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラナデ	-	25%	B c	砂粒多量

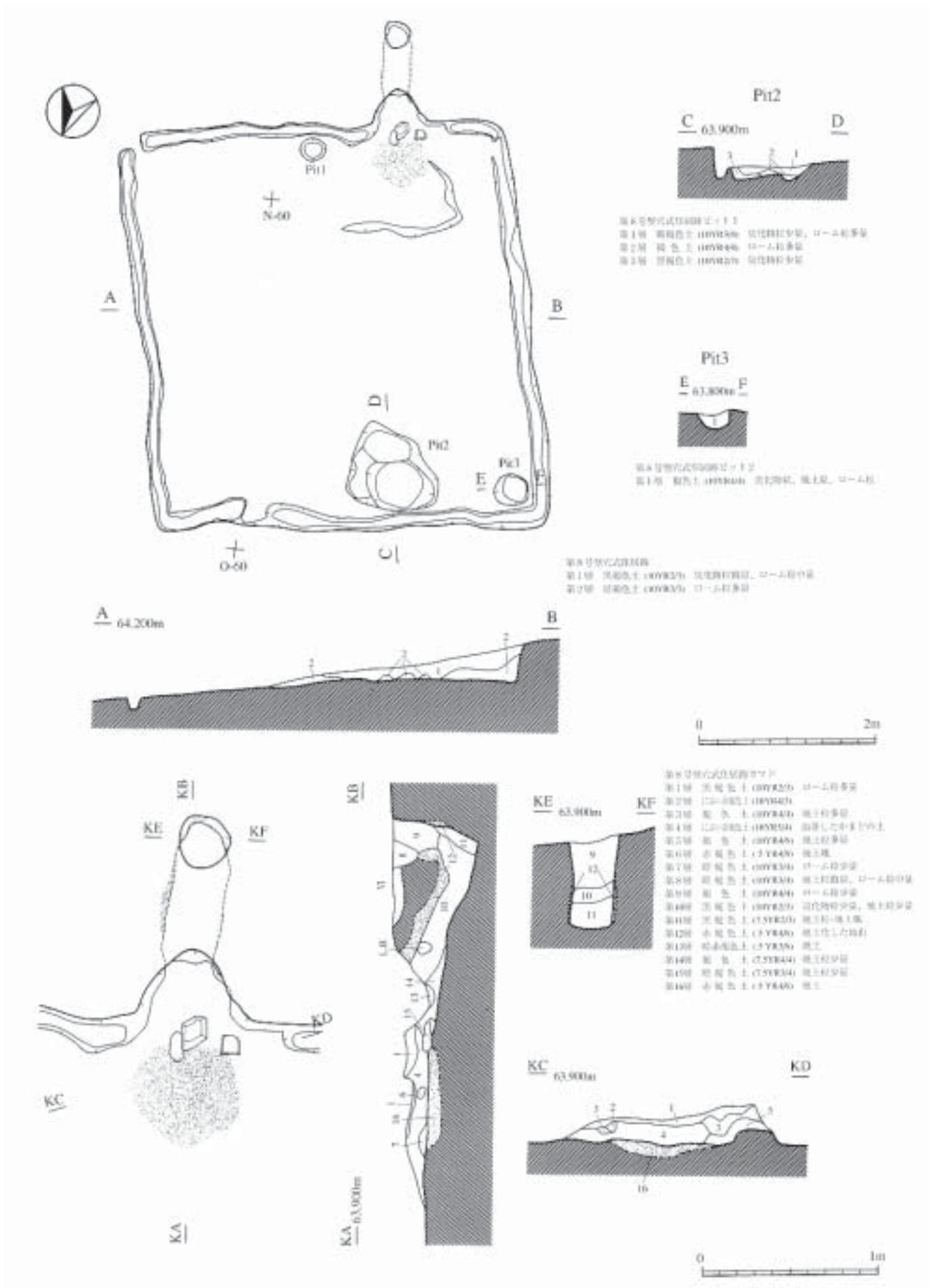
第7表 第7号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第8号竪穴式住居跡（第25～26図）

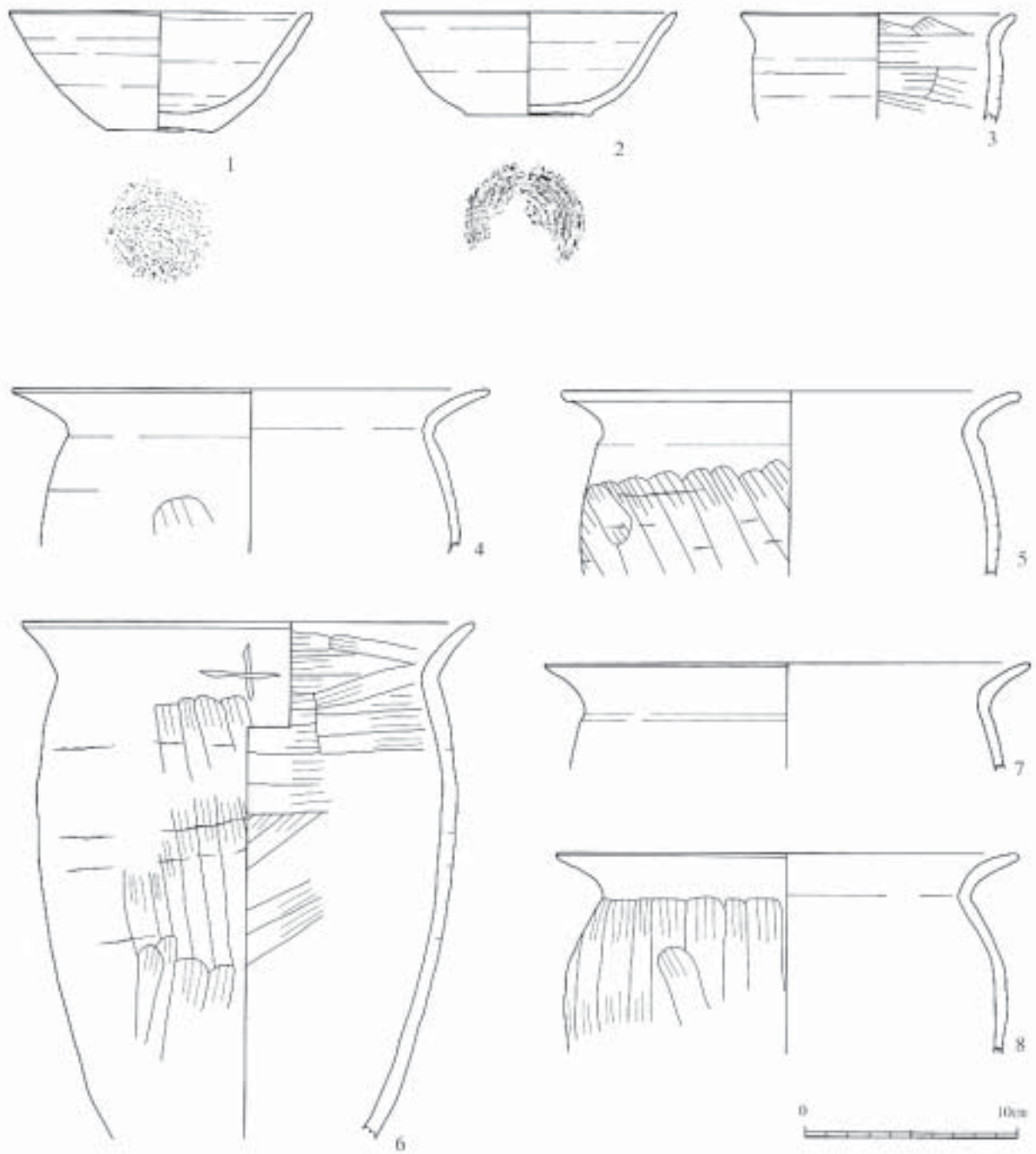
- [位置] M・N - 59・60グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] やや歪んだ方形を呈する。北東壁と南東壁の一部が攪乱により壊されている。規模は、壁の上端部で北西壁辺456cm、北東壁溝上端で434cm、南東壁辺444cm、南西壁辺462cm、下端部で北西壁辺416cm、北東壁辺406cm、南東壁辺406cm、北西壁辺424cmを計る。確認面から床面までの深さは40cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、床面は所々凹凸がみられる。カマド前面には3～5cm程の掘り込みがある。
- [壁溝] 一巡する。規模は、上端部で幅10cm～32cm、下端部で幅6cm～22cm、深さ5cm～22cmを計る。
- [ピット] 床面から3基検出した。ピット1は31cm×22cm×15cm、ピット2は106cm×89cm×35cm、ピット3は39cm×36cm×20cmを計る。主柱穴は不明である。
- [カマド] 南東壁の中央より南西寄りから1基検出した。煙道部は地下式で住居跡外に130cm程のびる。残存状態は悪く粘土が潰れた状態で検出した。粘土中から土師器甕と礫が出土した。芯材・支脚として使われたと思われるが判断し得ない。火床面は62cm×53cmの不整形を呈する。主軸方位はN - 28° - Wである。
- [堆積] 土 層に分層した。ローム粒を含む黒褐色土を主体として堆積する。
- [出土遺物] 覆土とカマドから土師器（坏・甕）が出土した。
- [時期] 出土遺物から9世紀後半～10世紀前半に帰属すると考えられる。

第9号竪穴式住居跡（第27～29図）

- [位置] F・G - 40・41グリッドで検出した。基本層序第 層で黒色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺478cm、東壁辺498cm、南壁辺494cm、西壁辺502cm、下端部で北壁辺464cm、東壁辺478cm、南壁辺484cm、西壁辺444cmを計る。確認面から床面までの深さは最深部で38cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、北壁は外側に向かい立ち上がる。東・南・西壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、一部貼床が施される。ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] 東壁と南壁の一部から検出した。規模は、上端部で幅14cm～18cm、下端部で幅10cm～16cm、深さ4cm～10cmを計る。
- [ピット] 床面から11基、壁溝から1基、貼り床下から5基、住居外から5基検出した。  
ピット1は19cm×19cm×154cm、ピット2は61cm×46cm×37cm、ピット3は39cm×27cm×24cm、ピット4は41cm×36cm×26cm、ピット5は28cm×20cm×56cm、ピット6は23



第25図 第8号竪穴式住居跡・カマド



第 26 图 第 8 号竖穴式住居跡出土遺物

番号種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考	
			口径	器高	底径							
26-1	土師器	坏	カマド	14.4	5.7	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	87%	1	器高指数40
26-2	土師器	坏	カマド	(14.0)	4.9	5.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	33%	3	器高指数35
26-3	土師器	甕	カマド	(13.0)	-	-	ナデ	ヘラナデ	-	33%	B 1c	砂粒少量
26-4	土師器	甕	カマド	(22.6)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	25%	B 1a	砂粒少量
26-5	土師器	甕	カマド	(21.8)	-	-	指ナデ・ヘラナデ	指ナデ	-	20%	B 1a	砂粒多量
26-6	土師器	甕	カマド	(22.0)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	50%	B 1a	ヘラ記号
26-7	土師器	甕	カマド	(23.0)	-	-	ナデ	ナデ	-	11%	B 1a	砂粒多量
26-8	土師器	甕	カマド	(22.0)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	11%	B 1a	小礫少量

第8表 第8号竪穴式住居跡出土遺物観察表

cm × 12cm × 15cm、ピット7は79cm × 61cm × 27cm、ピット8は72cm × 57cm × 30cm、ピット9は25cm × 17cm × 22cm、ピット10は31cm × 21cm × 23cm、ピット11は59cm × 48cm × 20cm、ピット12は25cm × 24cm × 22cm、ピット13は48cm × 44cm × 27cm、ピット14は24cm × 17cm × 36cm、ピット15は141cm × 94cm × 17cm、ピット16は69cm × 50cm × 26cm、ピット17は81cm × 69cm × 32cm、ピット18は92cm × 78cm × 36cm、ピット19は31cm × 14cm × 38cm、ピット20は29cm × 25cm × 25cm、ピット21は73cm × 48cm × 19cm、ピット22は53cm × 52cm × 9cmを計る。ピット7・8・11・13・14・17・18・19・20・21・22が床面から、ピット9・10・12・15・16が貼り床下からの検出である。主柱穴は配列と深さから7・13・16・21、あるいは6・9・14・17・19・20と思われる。

[カマド] 南壁の中央より西寄りから1基検出した。煙道部は半地下式で住居跡外に40cm程のびる。煙道部底面は凹凸を伴いながら上昇する。袖部は粘土で作られおり芯材は使われていない。火床面は49cm × 45cmの円形を呈する。主軸方位はN - 10° - Wである。

[堆積土] 3層に分層した。第5層にはB - Tmと思われる火山灰を含む。

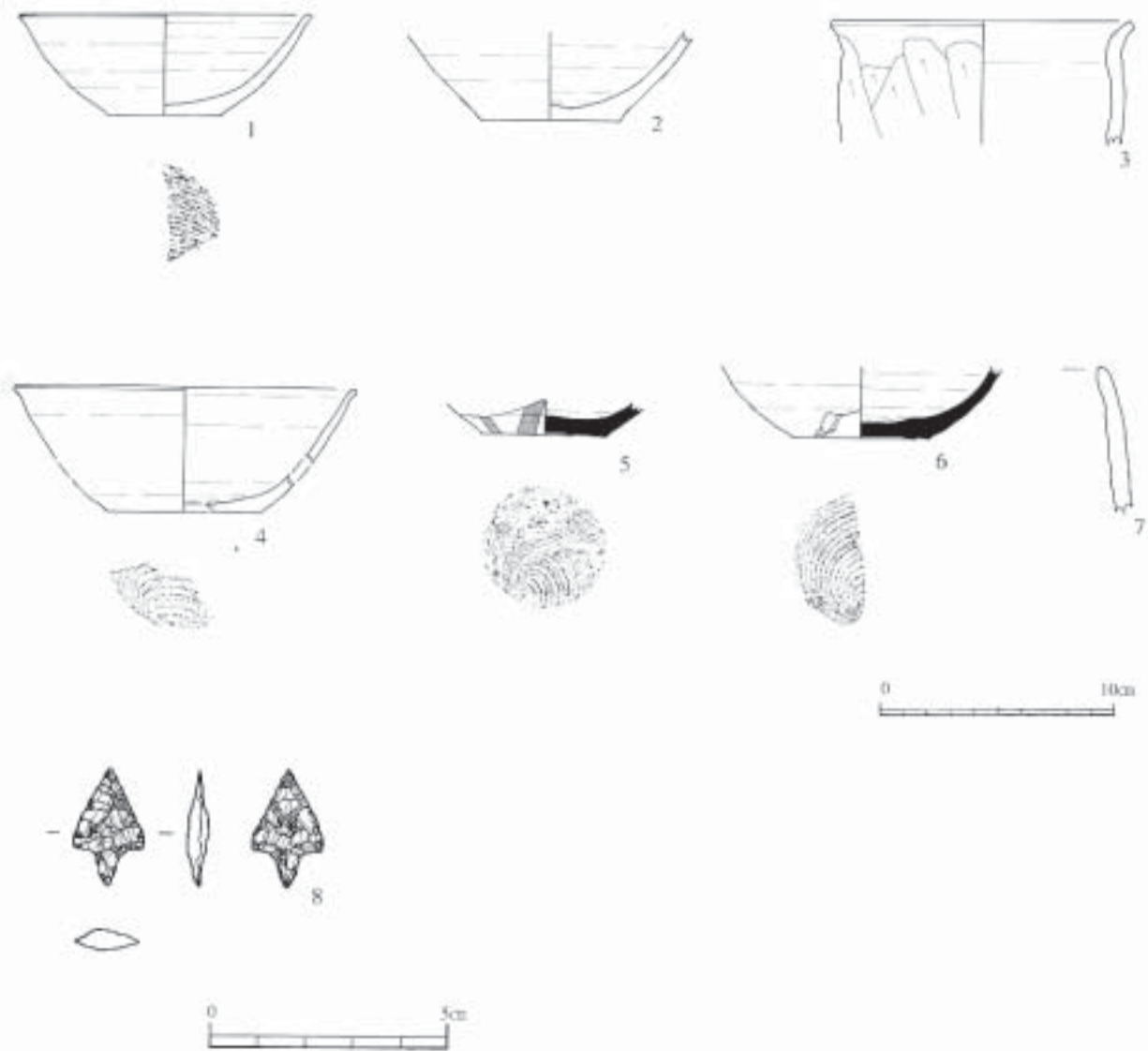
[出土遺物] 覆土、床面、カマドから土師器(坏・甕)が出土した。須恵器は覆土中から坏の底部が出土した。遺物は覆土第5層より下層からの出土が多い。また、覆土中から鉄滓、羽口が多量に出土した。

[時期] 出土遺物から9世紀後半～10世紀前半に帰属すると考えられる。









第29図 第9号竪穴式住居跡出土遺物(2)

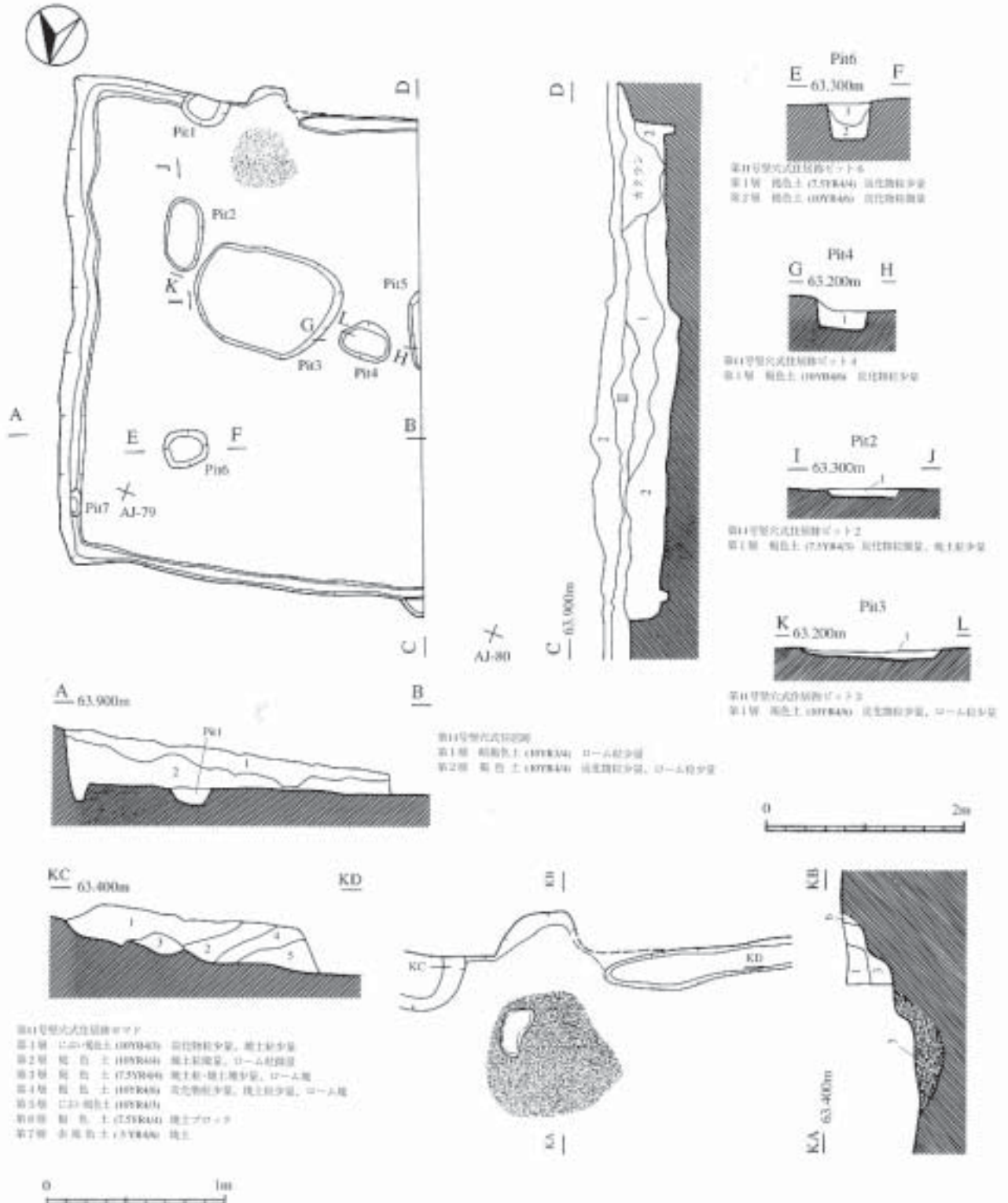
番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	保存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
28-1	土師器	坏	床面	(13.6)	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	-	16%	4	内面褐色
28-2	土師器	坏	覆土	(12.2)	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	-	14%	4	内黒
28-3	土師器	坏	覆土	(12.8)	4.8	(5.0)	ロクロナデ	ヘラミガキ	静止系切・ヘラケズリ	11%	4	内黒・器高指数38
28-4	土師器	坏		13.3	5.2	5.8	ロクロナデ	ヘラミガキ	静止系切	75%	4	内黒・器高指数39
28-5	土師器	坏	Pit22	13.2	4.5	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	静止系切	60%	4	器高指数34
29-1	土師器	坏	Pit11	(12.6)	4.4	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	静止系切	20%	4	器高指数35
29-2	土師器	坏	床直	-	-	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	静止系切	50%		砂粒微量
29-3	土師器	甕	床面	(13.0)	-	-	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	-	33%	B 1c	小礫微量
29-4	土師器	坏	カマド	(14.8)	(5.4)	(6.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	静止系切	14%	3	器高指数36
29-5	須恵器	坏	覆土	-	-	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切火ダスキ			
29-6	須恵器	坏	床面	-	-	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切	50%		ヘラ記号
29-7	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ			B	

番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
29-8	覆土下	25	15	5	8.0	珪質頁岩	石 鏝	

第9表 第9号竪穴式住居跡出土遺物観察表

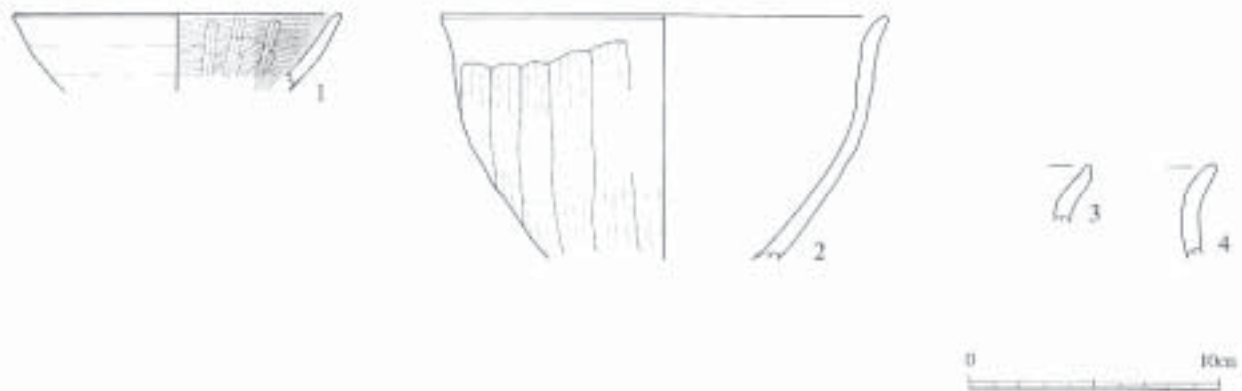
第11号竪穴式住居跡（第30～31図）

- [位置] AI・AJ - 79・80グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。基本層序第 層上面から掘り込まれる。
- [重複] 西側が調査区外に続いたため不明である。



第30図 第11号竪穴式住居跡・カマド

- [平面形・規模] 西側が調査区外に続くため全体は把握できないが、ほぼ方形を呈するものと思われる。規模は、壁の上端部で北西壁辺 378cm、北東壁辺 490cm、南東壁辺 356cm、下端部で北西壁辺 354cm、北東壁辺 472cm、南東壁辺 334cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 55cm を計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、上端が外側に向かいながら立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、南西側が下がる床面を呈している。
- [壁溝] 北壁～東壁～南壁にかけて一巡する。規模は、上端部で幅 7cm～20cm、下端部で幅 4cm～16cm、深さ 2cm～14cm を計る。
- [ピット] 床面から 4 基、壁溝から 2 基、貼り床下から 1 基検出した。ピット 1 は 44cm × 28cm × 25cm、ピット 2 は 74cm × 38cm × 8cm、ピット 3 は 149cm × 107cm × 9cm、ピット 4 は 52cm × 39cm × 28cm、ピット 5 は 82cm × 11cm × 24cm、ピット 6 は 44cm × 38cm × 41cm、ピット 7 は 28cm × 12cm × 16cm、を計る。主柱穴は配列と深さからピット 1・6 と思われる。
- [カマド] 南壁の中央より東寄りから 1 基検出した。煙道部と火床面のみが残存する。煙道部は半地下式で住居跡外に 18cm 程のびる。火床面は 70cm × 65cm の不整円形を呈する。火床面から土師器甕と礫が出土した。主軸方位は N - 30° - W である。
- [堆積] 土 層に分層した。炭化物粒・ローム粒を含む。
- [出土遺物] 覆土から土師器甕、羽口が出土した。出土量は少量である。
- [時期] 出土遺物から 10 世紀初頭～前半に帰属すると考えられる。



第 31 図 第 11 号竪穴式住居跡出土遺物

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	比率	分類	備考
				口径	器高	底径						
31-1	土師器	坏	覆土	(13.2)	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	-	16%	4	内黒
31-2	土師器	鉢	覆土	(18.0)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	14%		小礫少量
31-3	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	
31-4	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	

第 10 表 第 11 号竪穴式住居跡出土遺物観察表



下端部 890cm を計る。掘り込み面から床面までの深さは最深部で 64cm を計る。

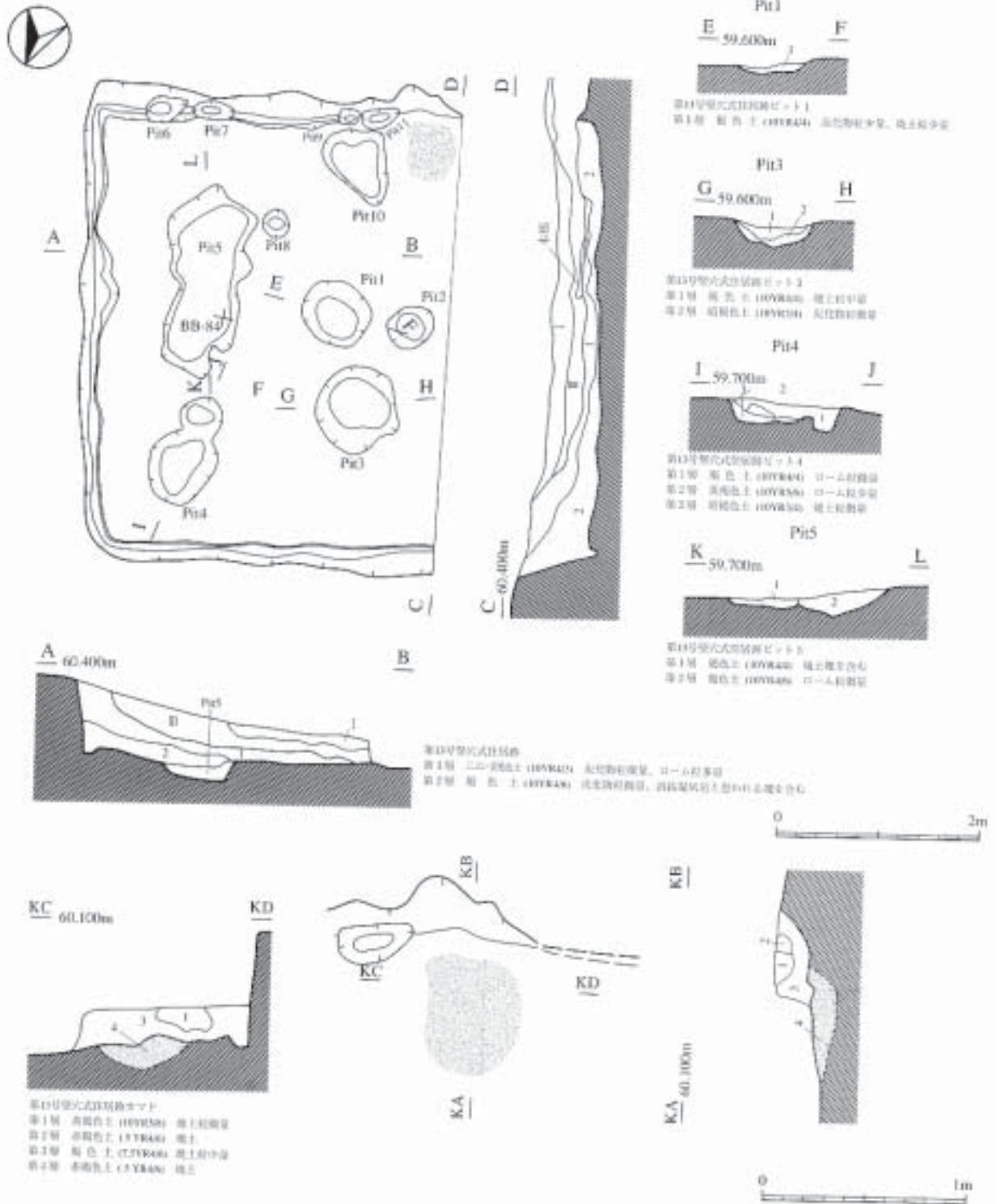
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、北壁はほぼ垂直に、南壁は上端が外側に向かい立ち上がる。
- [ 床 ] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [ 壁 溝 ] 検出しなかった。
- [ ピ ッ ト ] 床面から 9 基検出した。ピット 1 は 72cm × 52cm × 6cm、ピット 2 は 26cm × 13cm × 18cm、ピット 3 は 22cm × 19cm × 28cm、ピット 4 は 42cm × 18cm × 48cm、ピット 5 は 31cm × 30cm × 53cm、ピット 6 は 38cm × 7cm × 28cm、ピット 7 は 31cm × 27cm × 16cm、ピット 8 は 32cm × 27cm × 47cm、ピット 9 は 27cm × 20cm × 45cm、を計る。主柱穴は不明である。
- [ カ マ ド ] 検出しなかった。
- [ 堆 積 土 ] 12 層に分層した。炭化物粒・焼土粒を含む暗褐色土を主体として堆積する。第 6 層以下はピットの覆土である。
- [ 出 土 遺 物 ] 覆土から土師器（坏・甕）、須恵器坏の破片が出土した。
- [ 時 期 ] 出土遺物から 10 世紀初頭～中頃に帰属すると考えられる。

番 号	種 別	器 種	層 位	法 量 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 部 調 整	遺 存 率	分 類	備 考
				口 径	器 高	底 径						
32-1	土師器	坏	覆 土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-			
32-2	土師器	坏	覆 土	-	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転系切			内黒
32-3	土師器	坏	覆 土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	静止系切			
32-4	土師器	甕		-	-	-	ナデ	ナデ	-		B	
32-5	土師器	甕	覆 土	-	-	-	ナデ	ナデ	-		B	
32-6	土師器	甕	覆 土	-	-	-	ヘラケズリ	回転系切			A	

第 11 表 第 12 号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第 13 号竪穴式住居跡（第 33 ～ 36 図）

- [ 位 置 ] BA・BB - 83・84 グリッドで検出した。基本層序第 層で褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 西側が調査区外に続くため全体の把握はできないが、ほぼ方形を呈するものと思われる。規模は、壁の上端部で北西壁辺 338cm、北東壁辺 472cm、南東壁辺 370cm、下端部で北西壁辺 322cm、北東壁辺 420cm、南東壁辺 360cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 72cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、外側に向かい立ち上がる。
- [ 床 ] 基本層序第 層を床面としており、凹凸のある床面を呈している。溶結凝灰岩層の風化層が床面となっている。
- [ 壁 溝 ] 北西壁～北東壁～南東壁にかけて一巡する。カマド部分からは検出しなかった。規模は、上端部で幅 6cm ～ 36cm、下端部で幅 5cm ～ 14cm、深さ 3cm ～ 13cm を計る。
- [ ピ ッ ト ] 床面から 8 基、壁溝から 3 基検出した。ピット 1 は 69cm × 63cm × 10cm、ピット 2 は 48cm × 39cm × 5cm、ピット 3 は 87cm × 84cm × 20cm、ピット 4 は 122cm × 64cm × 36cm、ピット 5 は 192cm × 85cm × 14cm、ピット 6 は 42cm × 27cm × 17cm、ピット 7 は 42cm × 17cm ×

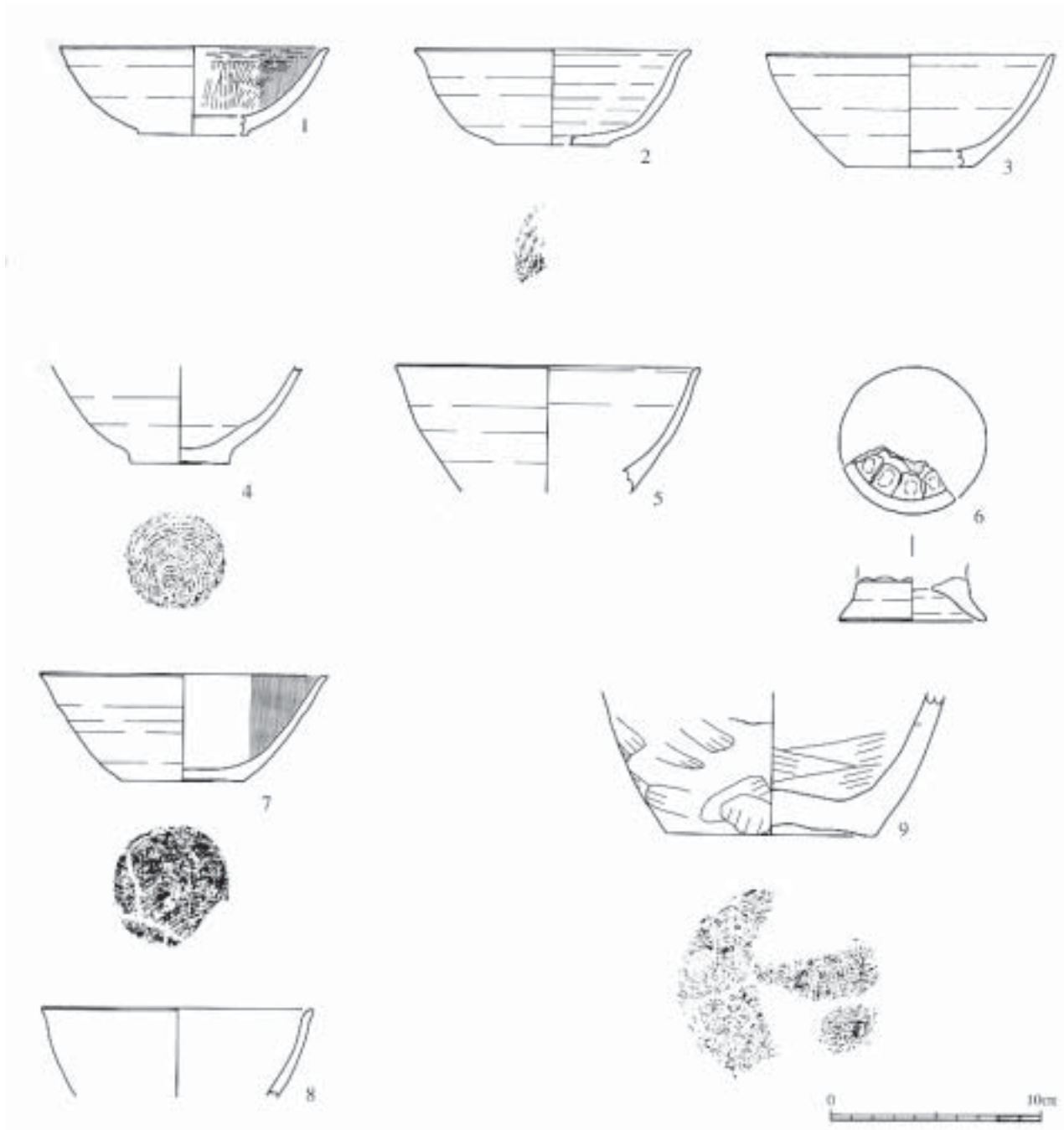


第33図 第13号竪穴式住居跡・カマド

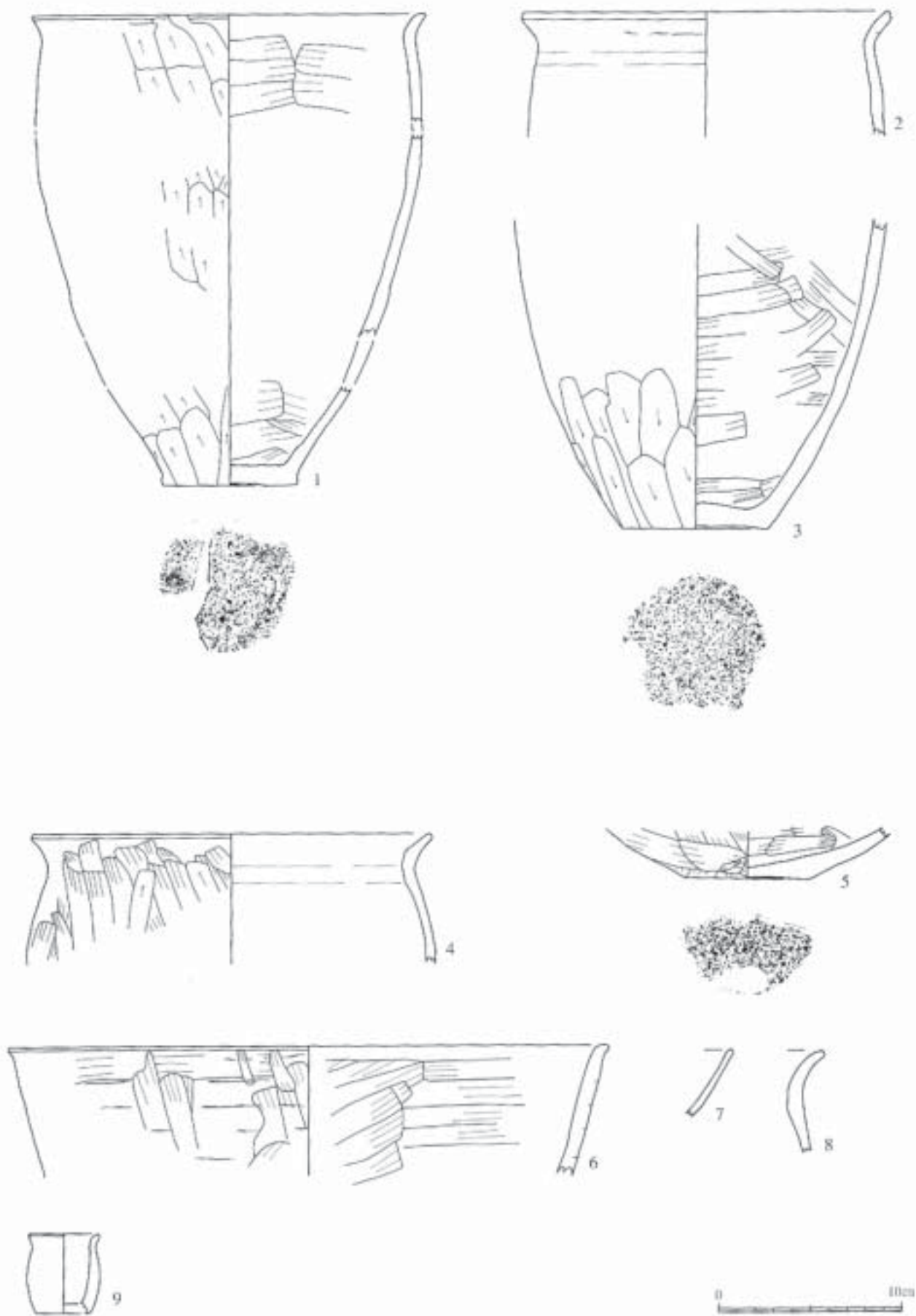
29cm、ピット8は27cm × 25cm × 7cm、ピット9は21cm × 15cm × 21cm、ピット10は81cm × 62cm × 15cm、ピット11は38cm × 19cm × 14cm、を計る。主柱穴は配列と深さからピット4・7と思われる。



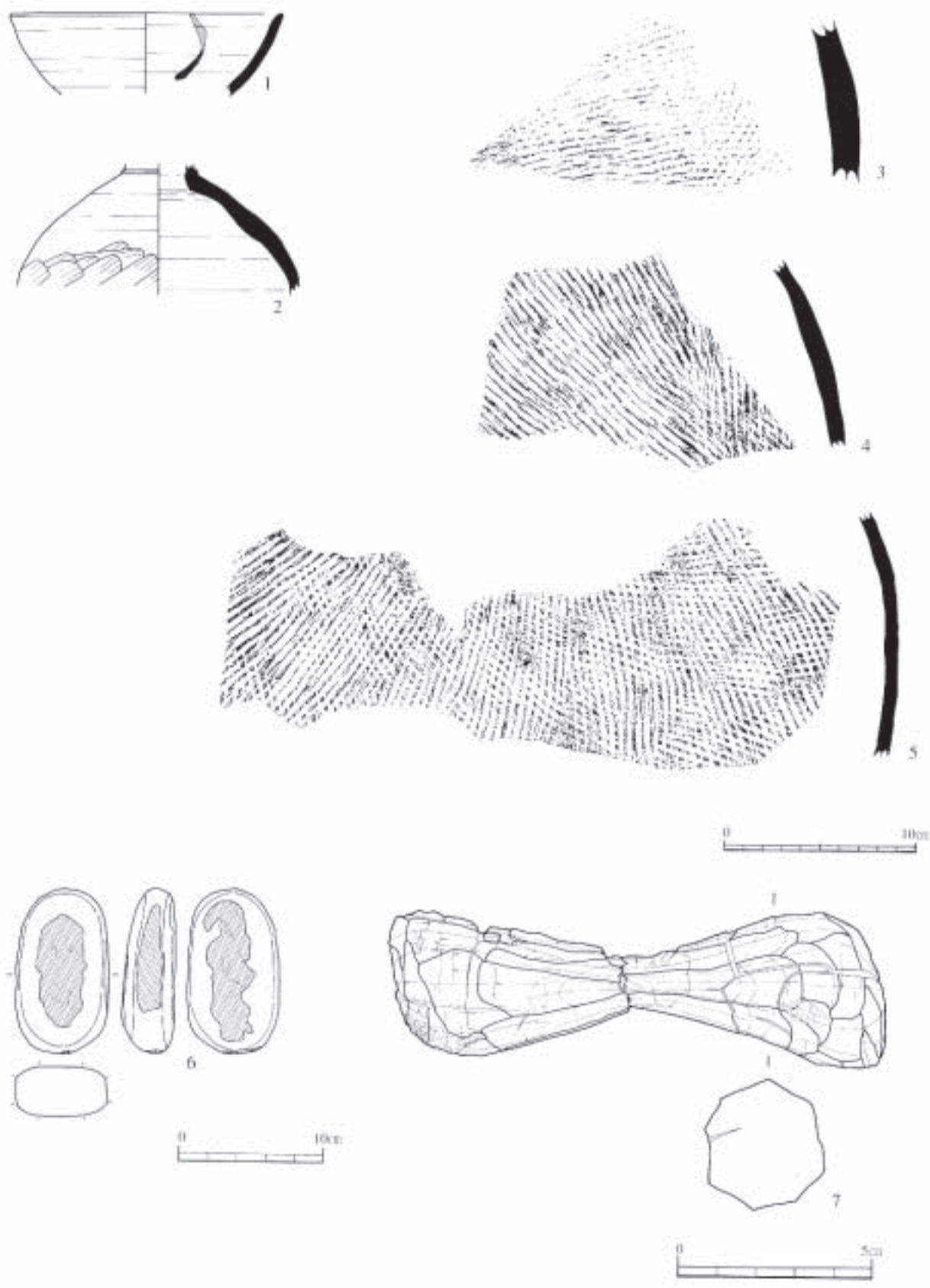
- [カマド] 南東壁の中央より西寄りから1基検出した。煙道部と火床面のみ検出した。煙道部は半地下式で住居跡外に17cm程のびる。火床面は64cm × 54cmの楕円形を呈する。主軸方位はN - 30° - Wである。
- [堆積土] 層に分層した。第2層には溶結凝灰岩の風化層と思われるブロックを含む。
- [出土遺物] 覆土と床面とカマドから土師器(坏・甕)が多量に出土した。土師器埴を少量含む。須恵器は覆土から甕の破片が出土した。その他の遺物は覆土中から敲磨器類、砥石が、ピット2から菰槌が出土した。
- [時期] 出土遺物から10世紀初頭～前半に帰属すると考えられる。



第34図 第13号竪穴式住居跡出土遺物(1)



第 35 图 第 13 号竖穴式住居跡出土遺物 (2)



第 36 图 第 13 号竖穴式住居跡出土遺物 (3)

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
34-1	土師器	坏	覆土	(12.8)	4.2	(5.4)	ロクロナデ	ヘラミガキ	不明	33%	3	内黒・器高指数32
34-2	土師器	坏	覆土	(13.2)	4.6	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	25%	2	器高指数35
34-3	土師器	坏	覆土	(13.8)	5.4	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	16%	4	器高指数39
34-4	土師器	坏	覆土	-	-	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切	33%	4	砂粒少量
34-5	土師器	坏		(14.6)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	14%	4	砂粒微量
34-6	土師器	高台?	覆土	-	-	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	25%		砂粒少量
34-7	土師器	坏	Pit 1	(13.8)	5.1	6.0	ロクロナデ	-	回転系切・ヘラケズリ	50%	1	内黒・器高指数37
34-8	土師器	坏	Pit 1	13.0	-	-	摩滅	摩滅	-	10%	4	砂粒少量
34-9	土師器	甕	覆土	-	-	10.0	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-		砂粒多量・砂底
35-1	土師器	甕	覆土	-	-	7.4	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	B 2a	砂粒多量・砂底
35-2	土師器	甕		(20.2)	-	-	ナデ	ナデ	-	14%	B 2a	小礫少量
35-3	土師器	甕	覆土	-	-	(8.0)	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-		砂粒少量・砂底
35-4	土師器	甕	カマド	(22.0)	-	-	ヘラナデ・ヘラケズリ	ナデ	-	33%	B 2a	小礫少量
35-5	土師器	埴		-	-	6.8	ヘラナデ	ヘラナデ	-	50%		砂粒少量・砂底
35-6	土師器	埴	覆土	(33.0)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	9%		砂粒少量
35-7	土師器	坏	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-		
35-8	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	
35-9	土師器	ミチア土器		(3.9)	4.3	(3.0)	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	25%		砂粒微量
36-1	須恵器	坏	覆土	(14.4)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	9%		火ダスキ
36-2	須恵器	壺	覆土	-	-	-	ロクロナデ・ヘラナデ	ロクロナデ	-	-		砂粒微量
36-3	須恵器	甕	Pit 2	-	-	-	タタキ目	-	-	-		
36-4	須恵器	甕	Pit 3	-	-	-	タタキ目	-	-	-		
36-5	須恵器	甕	覆土	-	-	-	タタキ目	-	-	-		

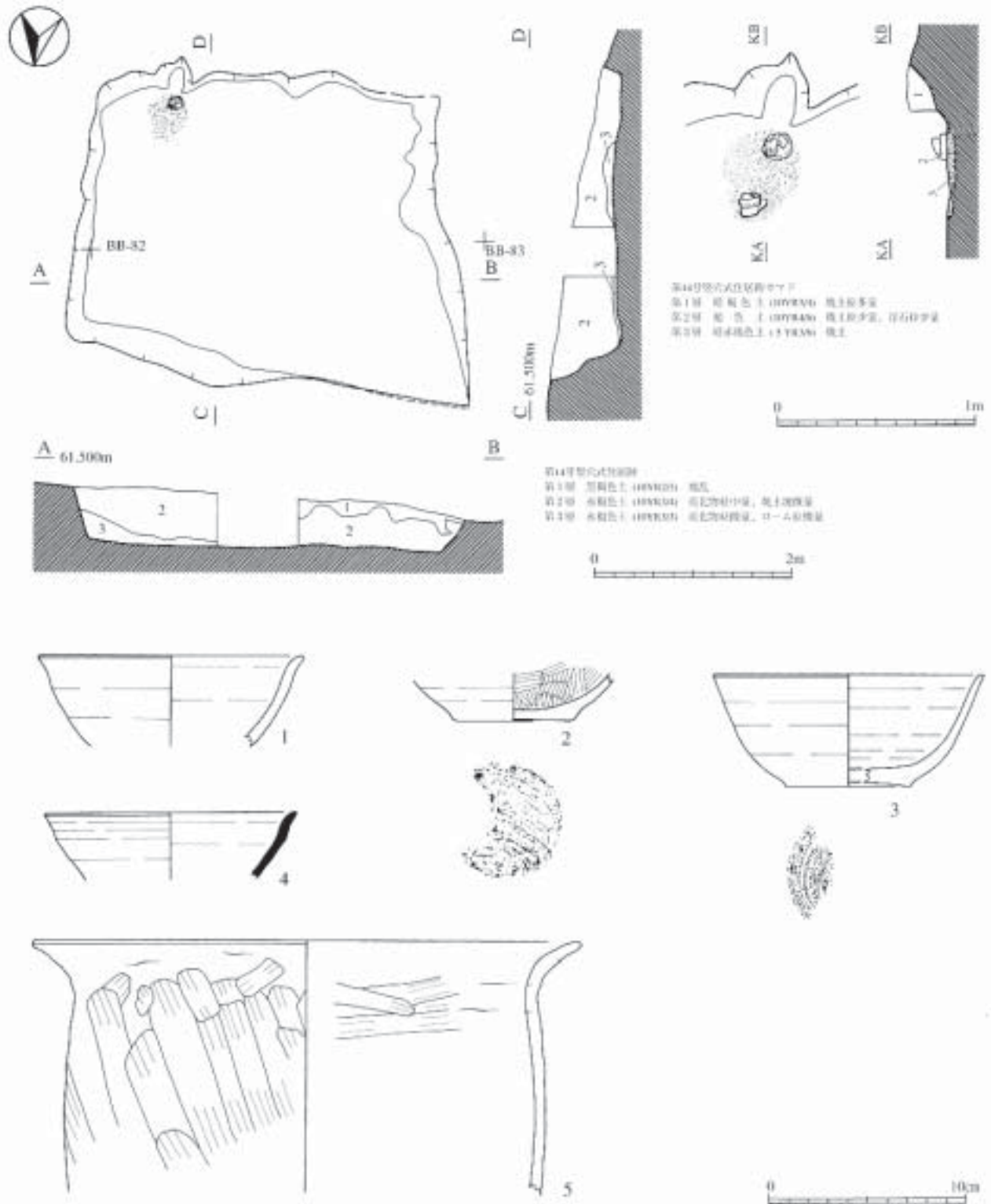
番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
36-6	覆土	114	63	37	344.2	石英安山岩	敲磨器類	スリ・擦痕・タタキ

番号	層位	最大計測値				分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)		
36-7	Pit2	129	39	30	32.5	敲磨器類	炭化

第12表 第13号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第14号竪穴式住居跡 (第37図)

- [位置] BA・BB - 82グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 北東隅が歪んだ不整な長方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺 416cm、東壁辺 272cm、南壁辺 350cm、西壁辺 316cm、下端部で北壁辺 398cm、東壁辺 240cm、南壁辺 316cm、西壁辺 314cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 73cm を計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、外側に向かい立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] 検出しなかった。
- [ピット] 検出しなかった。
- [カマド] 南壁の中央より東寄りから 1 基検出した。煙道部と火床面のみ検出した。煙道部は半地下式で住居跡外に 25cm 程のびる。火床面は 49cm × 41cm の楕円形を呈する。主軸方位は N - 2° - E である。
- [堆積] 土 3 層に分層した。第 1 層は現代によるものと思われる盛り土である。
- [出土遺物] 覆土とカマドから土師器 (坏・甕) が少量出土した。須恵器は覆土中から坏が破片で出土した。
- [時期] 出土遺物から 10 世紀初頭～前半に帰属すると考えられる。



第37図 第14号竖穴式住居跡・カマド・出土遺物

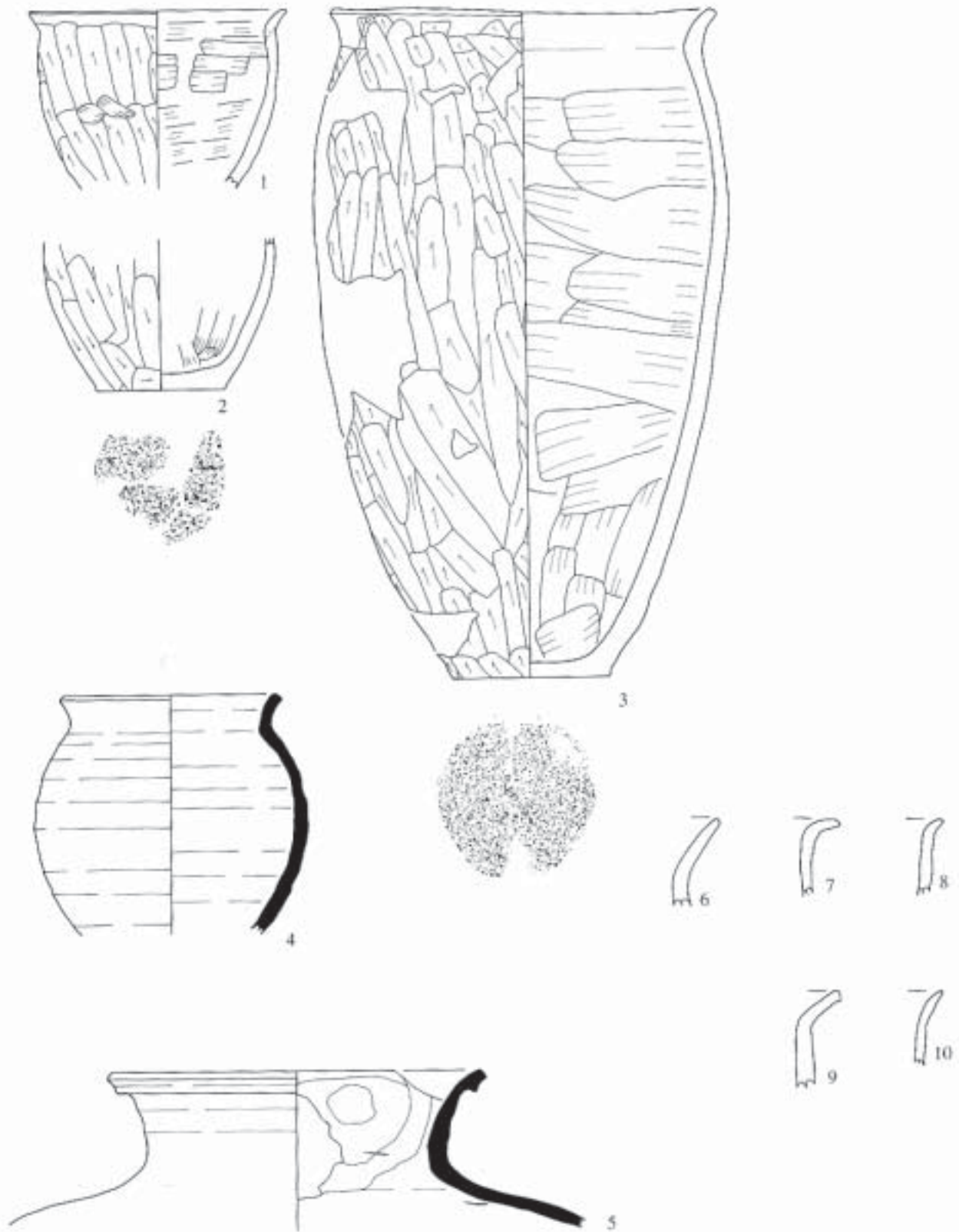
番 号 種 別	器 種	層 位	法 量 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 部 調 整	遺 存 率	分 類	備 考	
			口 径	器 高	底 径							
37-1	土師器	坏	覆 土	(13.6)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	14%	4	砂粒少量
37-2	土師器	坏	カマド	-	-	6.0	ロクロナデ	ヘラミガキ	静止糸切	-		砂粒微量
37-3	土師器	坏	カマド	(13.8)	5.7	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	20%	3	器高指数41
37-4	須恵器	坏	覆 土	(12.8)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ		16%		砂粒微量
37-5	土師器	甕	カマド	(28.0)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	25%	B a	砂粒多量

第 13 表 第 14 号 竪穴式住居跡出土遺物観察表

第 15 号 竪穴式住居跡 (第 38 ~ 40 図)

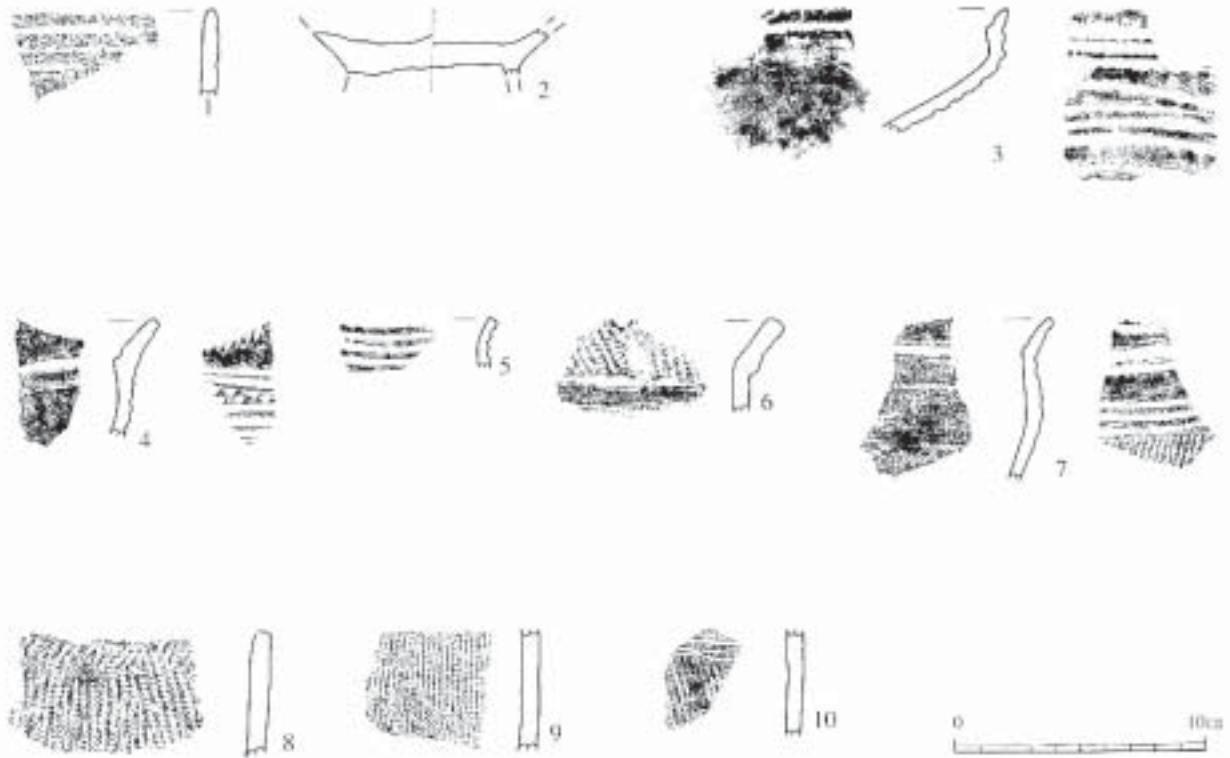
- [ 位 置 ] BJ・BK - 85・86グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 南東壁が一部張り出すが、ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北西壁辺 415cm、北東壁辺 469cm、南東壁辺 425cm、南西壁辺 446cm、下端部で北西壁辺 395cm、北東壁辺 408cm、南東壁辺 373cm、南西壁辺 426cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 84cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、外側に向かいながら立ち上がる。
- [ 床 ] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [ 壁 溝 ] 検出しなかった。
- [ ピ ッ ト ] 床面から 8 基検出した。ピット 1 は 61cm × 51cm × 18cm、ピット 2 は 48cm × 38cm × 10cm、ピット 3 は 19cm × 15cm × 11cm、ピット 4 は 64cm × 50cm × 33cm、ピット 5 は 49cm × 40cm × 14cm、ピット 6 は 37cm × 27cm × 13cm、ピット 7 は 37cm × 32cm × 10cm、ピット 8 は 31cm × 20cm × 21cm を計る。主柱穴は不明である。
- [ カ マ ド ] 検出しなかった。
- [ 堆 積 ] 土 3 層に分層した。第 1 層には B - Tm とと思われる火山灰を粒状に含む。第 3 層は混土炭化物層である。人為堆積の様相を呈する。
- [ 出 土 遺 物 ] 覆土から土師器 (坏・甕) が多量に出土した。須恵器は覆土上面から壺・甕が出土した。その他の遺物は、覆土から第 群 3・4 類、第 群 1・2 類土器、鋤先の一部、砥石が出土した。
- [ 時 期 ] 出土遺物と堆積土中の火山灰から 10 世紀前半 ~ 中頃に帰属すると考えられる。





第 39 图 第 15 号竖穴式住居跡出土遺物 (1)





第40図 第15号竪穴式住居跡出土遺物(2)

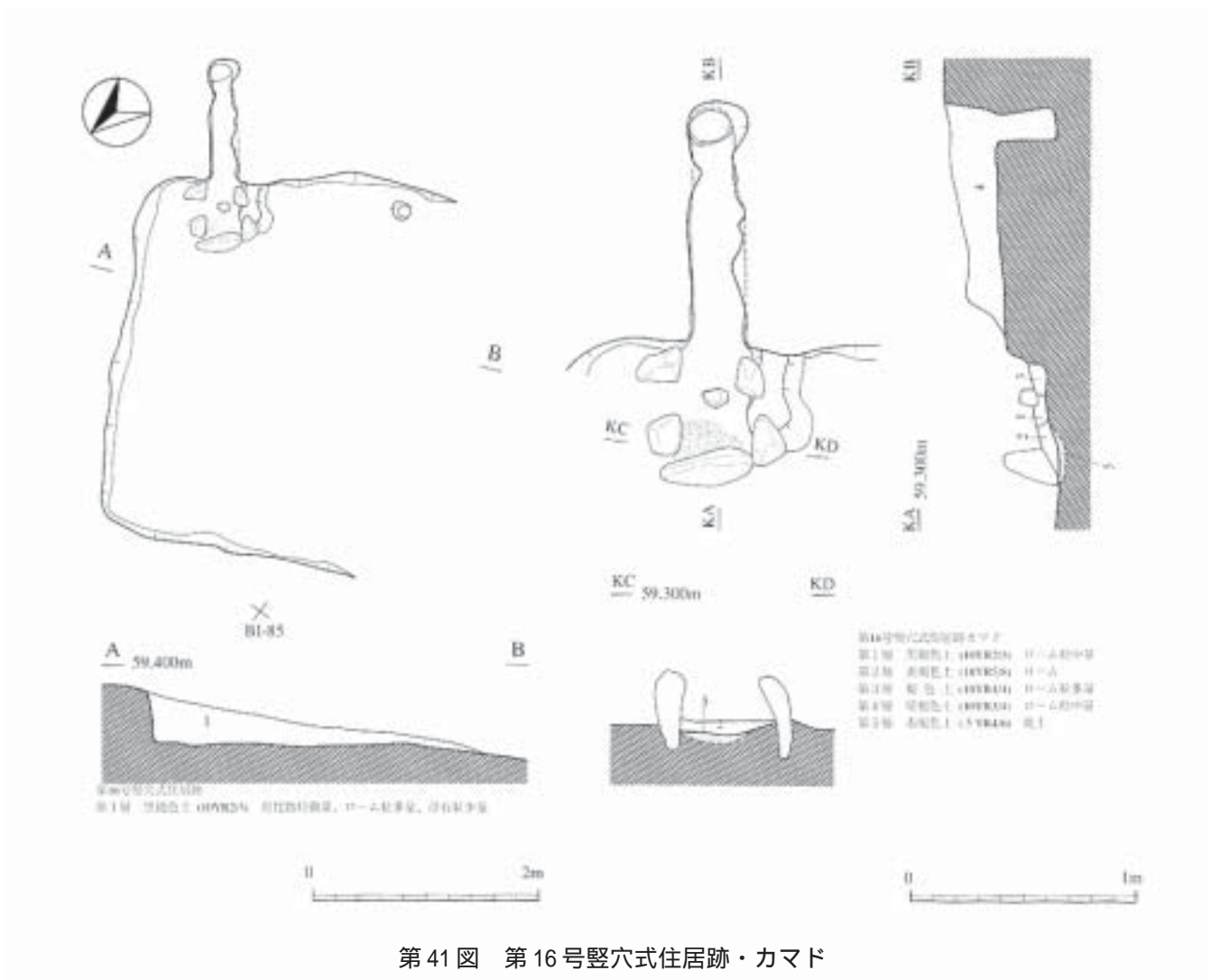
番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
39-1	土師器	甕	覆土	(13.4)	-	-	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	75%	B 2c	小礫少量
39-2	土師器	甕	覆土	-	-	6.8	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	75%		砂粒多量・砂底
39-3	土師器	甕	覆土	20.1	34.9	8.1	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	67%	B 2a	小礫少量・砂底
39-4	須恵器	鉢	覆土	(11.6)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-		砂粒微量
39-5	須恵器	甕	覆土	(19.6)	-	-	ナデ・タタキ	ナデ	-	12%		砂粒少量
39-6	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	
39-7	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	
39-8	土師器	甕	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ナデ	-	-	B	
39-9	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	
39-10	土師器	甕	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ナデ	-	-	B	

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			部位	文様	分類	備考
				口径	器高	底径				
40-1	縄文	深鉢	覆土	(19.2)	-	-	口縁部	3条の横位沈線 外面に縦・斜位条痕文	- 4	
40-2	縄文	台付鉢	覆土	-	-	-	台部	無文	- 3	外・内面に朱
40-3	弥生	台付鉢	覆土	(20.8)	-	-	口縁部	平縁 変形工字文 内面沈線	- 1	
40-4	弥生	鉢	覆土	(12.8)	-	-	口縁部	山形口縁 横位沈線 口唇部刻目 刺突 内面沈線	- 1	
40-5	弥生	鉢	覆土	(6.4)	-	-	口縁部	横位沈線	- 1	
40-6	弥生	鉢	覆土	(7.8)	-	-	口縁部	山形口縁 頂部に挟り R L縄文	- 1	
40-7	弥生	鉢	覆土	(9.0)	-	-	口縁部	波状口縁 横位沈線 L R縦走縄文 内面沈線	- 1	
40-8	弥生	深鉢	覆土	(22.6)	-	-	口縁部	波状口縁 R L R縦走縄文	- 1	
40-9	弥生	深鉢	覆土	-	-	-	胴部	L R縄文	- 1	内面炭化物付着
40-10	弥生	鉢	覆土	-	-	-	胴部	R L斜縄文 波状沈線	- 2	

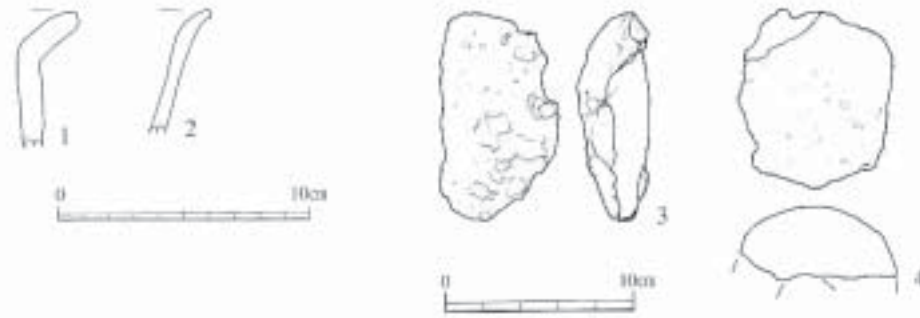
第14表 第15号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第16号竪穴式住居跡（第41～42図）

- [位置] BI - 84グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 南西壁は検出しなかったが、方形を呈すると思われる。規模は、壁の上端部で北西壁辺 256cm、北東壁辺 304cm、南東壁辺 280cm、下端部で北西壁辺 222cm、北東壁辺 292cm、南東壁辺 262cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 46cm を計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] 検出しなかった。
- [ピット] 床面から 1 基検出した。18cm × 16cm × 19cm を計る。
- [カマド] 南東壁の中央より東寄りから 1 基検出した。煙道部は半地下式で住居跡外に 115cm 程のびる。袖部は芯材の礫のみが出土した。火床面は 32cm × 28cm の楕円形を呈する。主軸方位は N - 58° - W である。
- [堆積土] 層である。ローム粒を多量に含む。
- [出土遺物] 覆土とカマド煙道部から土師器甕が出土した。遺物出土量は少量である。
- [時期] 出土遺物から 9 世紀末～10 世紀前半に帰属すると考えられる。



第41図 第16号竪穴式住居跡・カマド



第 42 図 第 16 号竪穴式住居跡出土遺物

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
42-1	土師器	甕	覆土	-	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	-	B	
42-2	土師器	甕		-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B	

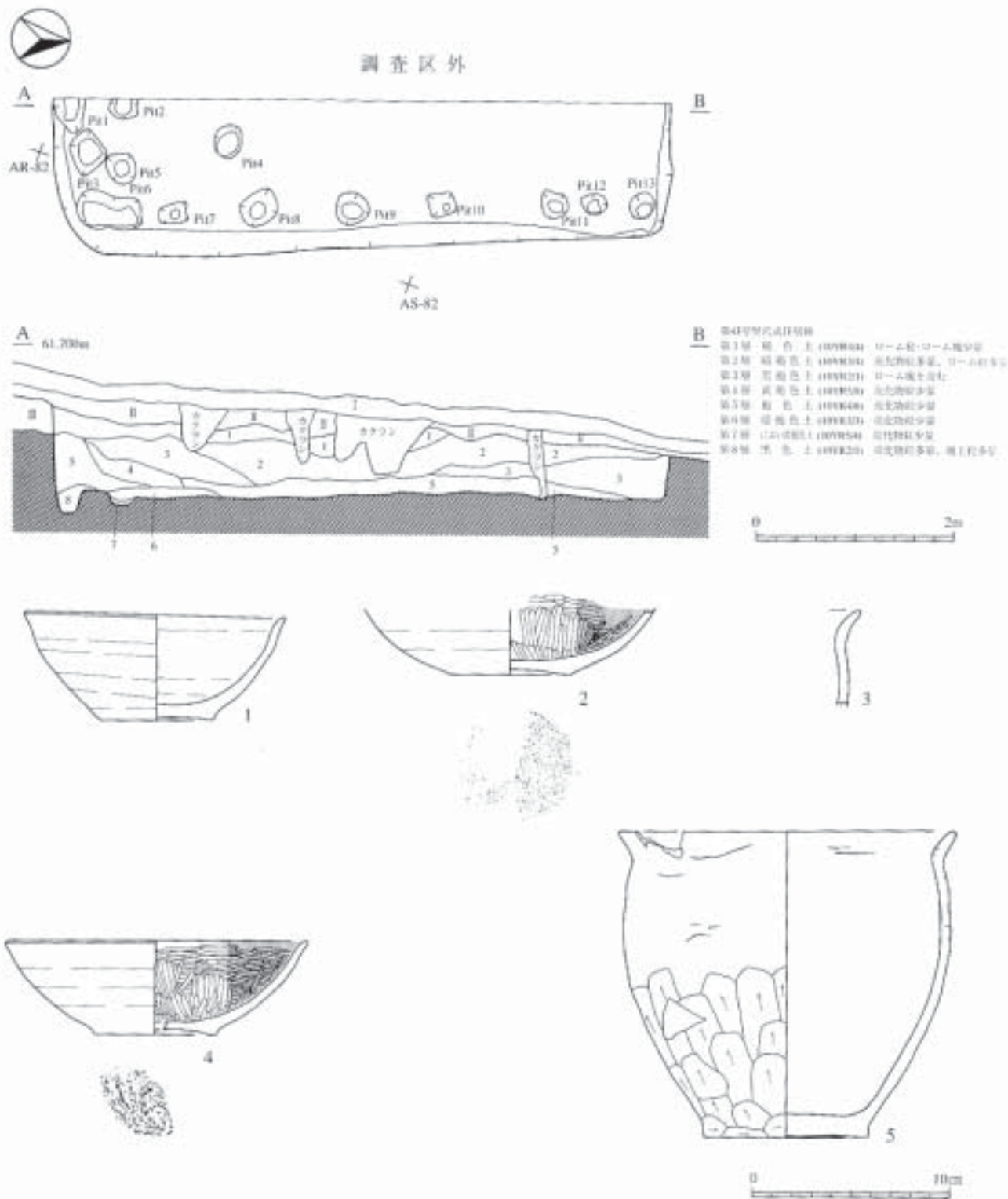
番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
42-3	覆土	10	64	37	260.3	安山岩	礫	鉄溶着

番号	層位	最大計測値				分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)		
42-4	覆土	(96)	(82)	(39)	187.9	羽口	表面鉄溶着

第 15 表 第 16 号竪穴式住居跡出土遺物観察表

第 17 号竪穴式住居跡 (第 43 ~ 44 図)

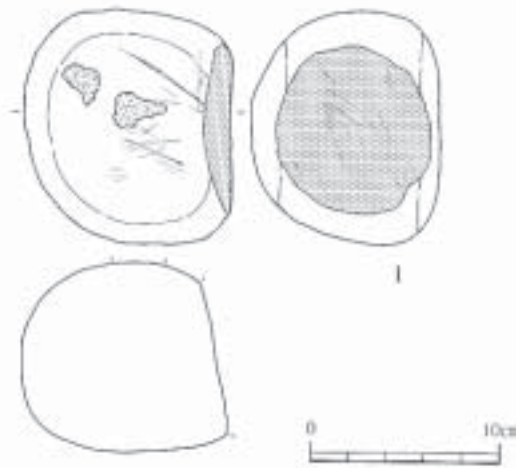
- [ 位置 ] AR81・82 - AS82グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重複 ] 西側が調査区外にのびるため不明である。
- [ 平面形・規模 ] ほぼ方形を呈すると思われる。規模は、壁の上端部で北壁辺 132cm、東壁辺 606cm、南壁辺 150cm、下端部で北壁辺 124cm、東壁辺 590cm、南壁辺 132cm を計る。確認面から床面までの深さは最深部で 85cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [ 床 ] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [ 壁溝 ] 検出しなかった。
- [ ピット ] 床面から 12 基検出した。ピット 1 は短軸 31cm 深さ 21cm、ピット 2 は短軸 29cm 深さ 8cm、ピット 3 は 33cm × 26cm × 10cm、ピット 4 は 48cm × 36cm × 5cm、ピット 5 は 36cm × 32cm × 8cm、ピット 6 は 64cm × 38cm × 25cm、ピット 7 は 28cm × 22cm × 26cm、ピット 8 は 42cm × 34cm × 29cm、ピット 9 は 34cm × 34cm × 31cm、ピット 10 は 32cm × 28cm × 15cm、ピット 11 は 31cm × 26cm × 35cm、ピット 12 は 26cm × 22cm × 21cm、ピット 13 は 27cm × 24cm × 18cm を計る。主柱穴はピット 1・6・7・8・9・11・12・13 と思われる。
- [ カマド ] 検出しなかった。
- [ 堆積土 ] 層に分層した。全体的に炭化物粒・ローム粒を含む。
- [ 出土遺物 ] 覆土から土師器 ( 坏・甕 )、砥石が出土した。
- [ 時期 ] 出土遺物から 10 世紀前半に帰属すると考えられる。



第43図 第17号竖穴式住居跡・出土遺物(1)

番 号	種 別	器 種	層 位	法 量 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 部 調 整	遺 存 率	分 類	備 考
				口 径	器 高	底 径						
43-1	土師器	坏	覆 土	13.4	5.6	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切	100%	4	器高指数42
43-2	土師器	坏	床 直	-	-	6.0	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転系切・ヘラケズリ		3	内黒
43-3	土師器	甕	覆 土	-	-	-	ナデ	ナデ	-		B	
43-4	土師器	坏	床 直	(15.4)	4.8	6.2	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転系切	25%	4	内黒・器高指数31
43-5	土師器	甕	床 直	(17.2)	15.6	8.4	指ナデ・ヘラケズリ	指ナデ	ヘラナデ	67%	B	2b スス付着

第16表 第17号竖穴式住居跡出土遺物観察表



第44図 第17号竪穴式住居跡出土遺物(2)

番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
44-1	覆土	124	110	100	2,000	石英安山岩	砥石	スリ・擦痕・タタキ

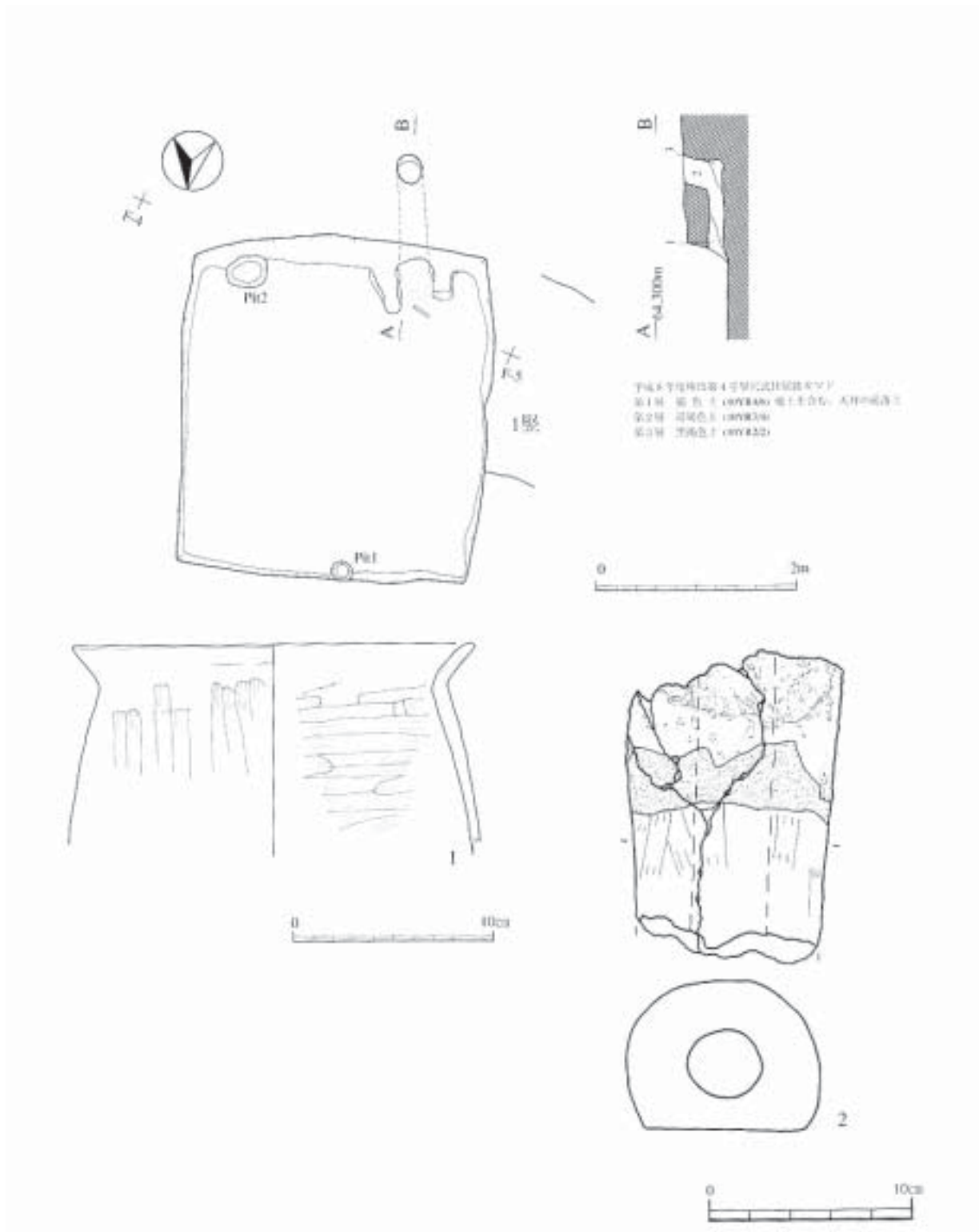
第17表 第17号竪穴式住居跡出土遺物観察表(2)

平成8年度検出第4号竪穴式住居跡(第45図)

本住居跡は、平成8年度の調査時に北壁と西壁の一部を検出していた。前回の調査時では遺構東側が調査区域外の現道に続いていたので精査が不可能であったため、平成10年度に精査を行うこととしたものである。

- [位置] E・F - 4・5グリッドで検出した。基本層序第 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] 第1号竪穴遺構と重複し、本住居跡が古い。
- [平面形・規模] ほぼ方形を呈する。規模は、壁の上端部で北壁辺288cm、東壁辺307cm、南壁辺280cm、西壁辺326cm、下端部で北壁辺282cm、東壁辺284cm、南壁辺268cm西壁辺300cmを計る。確認面から床面までの深さは49cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、下端はほぼ垂直に、上端が外側に向かいながら立ち上がる。
- [床] 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦な床面を呈している。
- [壁溝] 検出しなかった。
- [ピット] 床面から2基検出した。ピット1は33cm × 26cm × 10cm、ピット2は41cm × 32cm × 8cmを計る。主柱穴は不明である。
- [カマド] 南壁の中央より西寄りから1基検出した。煙道部は地下式で住居跡外に90cm程のびる。煙道底面は平坦である。袖部は粘土で作られており、火床面は42cm × 31cmの不整形を呈する。主軸方位はN - 14° - Wである。
- [堆積] 土 層に分層した。全体的にローム塊・粘土塊を多量に含む黄褐色土を主体として堆積しており、人為堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] カマドから、土師器甕・羽口が少量出土した。
- [時期] 出土遺物から9世紀後半～10世紀前半に帰属すると考えられる。

(沼宮内 陽一郎)



第 45 図 平成 8 年度第 4 号竪穴式住居跡・カマド・出土遺物

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
45-1	土師器	甕	カマド	(20.2)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	14%	B 2	小礫微量

番号	層位	最大計測値				分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)		
45-2	カマド	(154)	(106)	73	(1,000)	羽口	表面鉄溶着・黒色変化

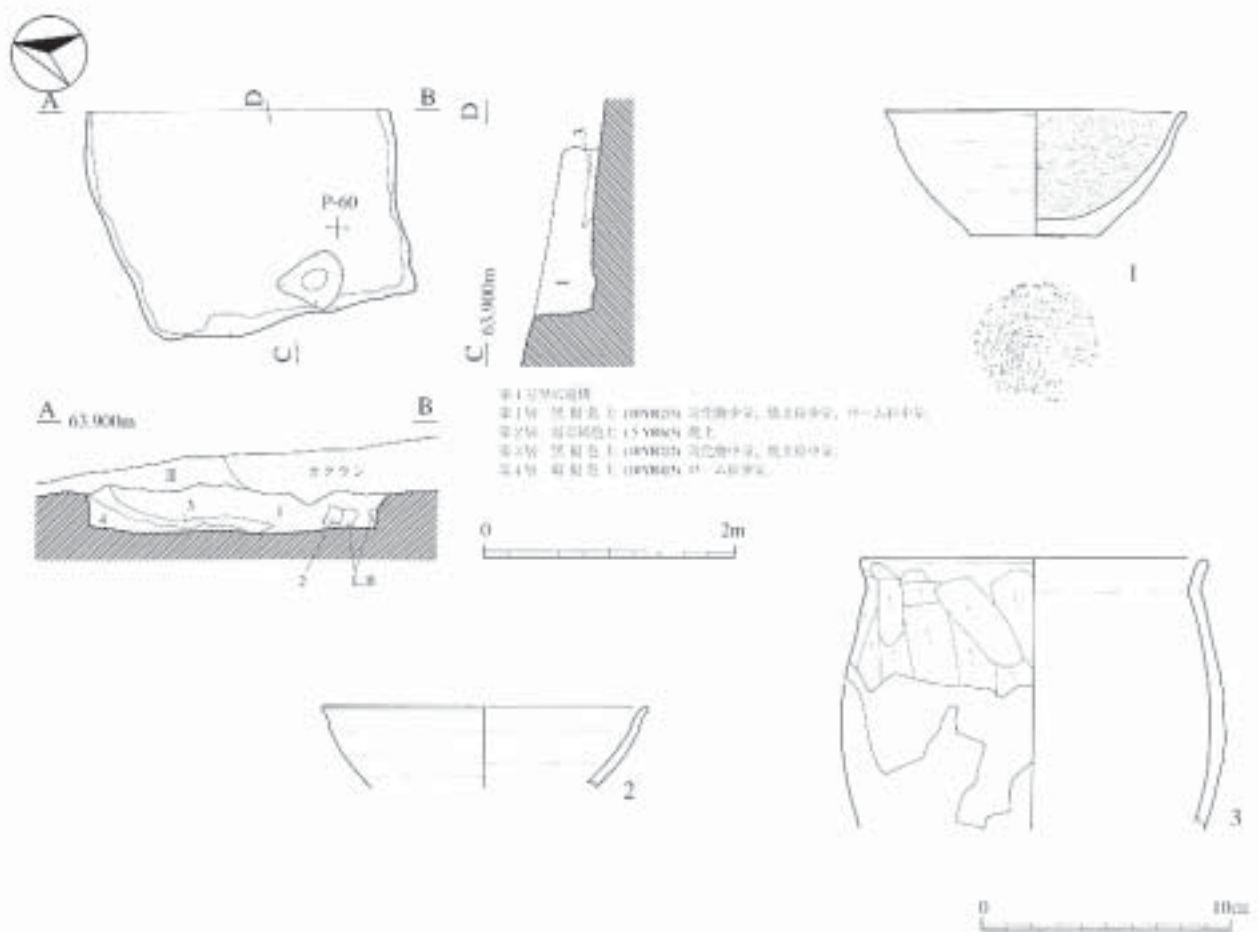
第 18 表 平成 8 年度第 4 号竪穴式住居跡出土遺物観察表

## 2. 竪穴遺構

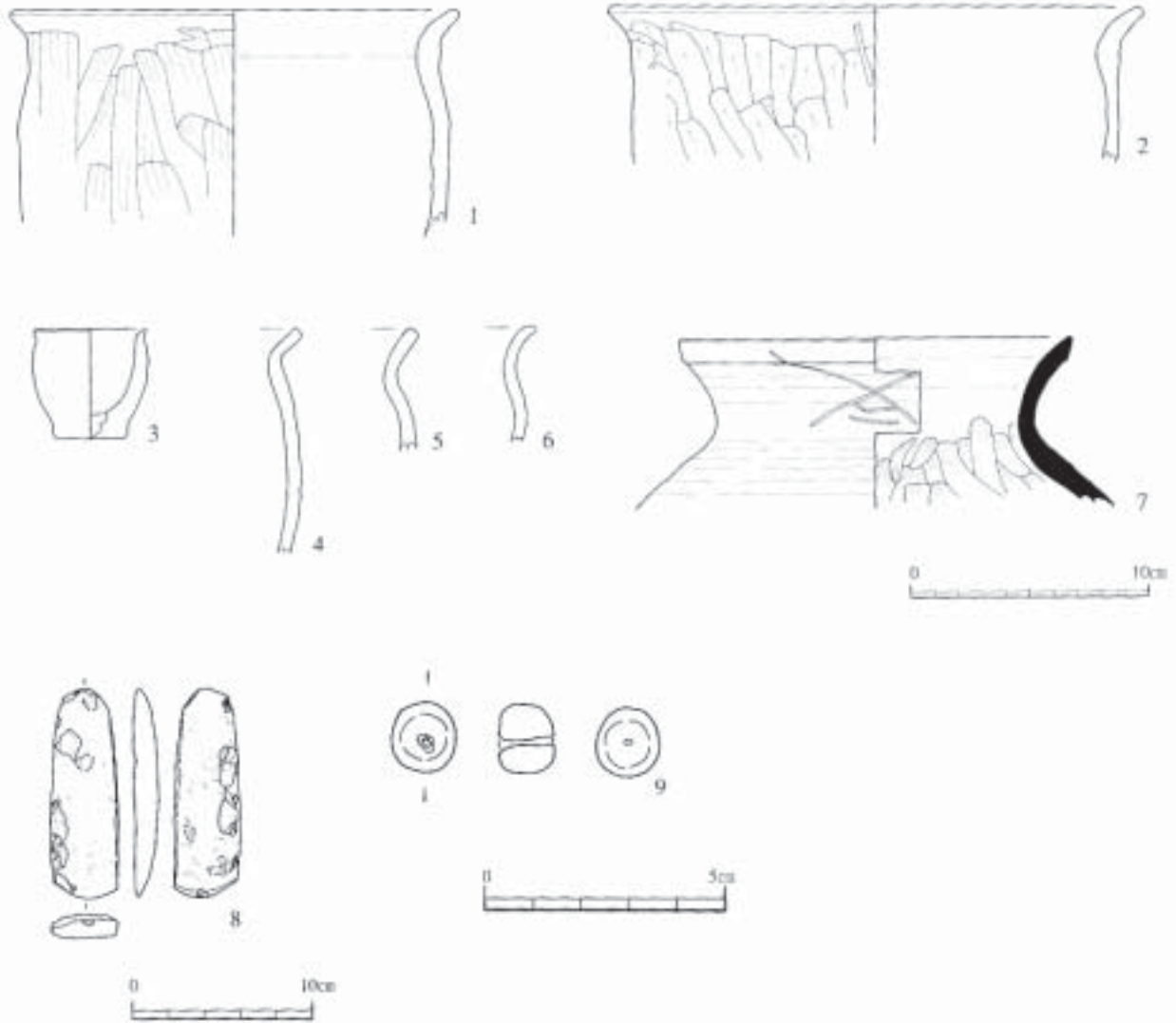
### 第1号竪穴式住居跡（第46～47図）

- [位置] 0・P - 59・60グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 東側が生活道路下部に続くため全体は把握できないが、ほぼ方形を呈するものと思われる。規模は、壁の上端部で北壁辺198cm、南壁辺148cm、西壁辺212cm、下端部で北壁辺182cm、南壁辺142cm、西壁辺200cm、を計る。掘り込み面から床面までの深さは最深部で46cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、やや外側に向かいながら立ち上がる。
- [底面] 基本層序第 層を床面としており、北東側が下がる床面を呈している。
- [ピット] 床面から1基確認した。計測値は54cm × 43cm × 12cmである。
- [堆積土] 層に分層した。黒褐色土を主体として堆積する。
- [出土遺物] 覆土から土師器甕が多量に出土した。出土遺物は接合関係はあるが、個体となるものは無く廃棄された様相を呈する。また第 群2・4類・第 群1類土器が出土した。
- [時期] 出土遺物から10世紀初頭～前半に帰属すると思われる。

（沼宮内陽一郎）



第46図 第1号竪穴遺構・出土遺物(1)



第 47 図 第 1 号竪穴遺構出土遺物 (2)

番号	種別	器種	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	遺存率	分類	備考
				口径	器高	底径						
46-1	土師器	坏	攪乱	(12.1)	5.1	5.2	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切	33%	4	器高指数42
46-2	土師器	坏	覆土	(13.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	8%	4	砂粒微量
46-3	土師器	甗	覆土	14.0	-	-	ヘラケズリ・火はじけ	ナデ	-	75%	B 2b	小礫少量
47-1	土師器	甗	覆土	(19.0)	-	-	ヘラナデ	ナデ	-	20%	B 2a	小礫少量
47-2	土師器	甗	覆土	(22.8)	-	-	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	-	14%	B a	小礫微量・ヘラ記号
47-3	土師器	ミナブ土器	覆土	(4.8)	4.7	(3.0)	ナデ	ナデ	ヘラナデ	33%		小礫微量
47-4	土師器	甗	覆土	-	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ	-	-	B 2	
47-5	土師器	甗	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B 2	
47-6	土師器	甗	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	B 2	
47-7	須恵器	壺	覆土	(16.6)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラナデ	-	12%		ヘラ記号

番号	層位	最大計測値				石質	分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
47-8	盛土	116	37	14	97.9	輝緑凝灰岩	磨製石斧	

番号	層位	最大計測値				分類	備考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)		
47-9	覆土	14	13	12	2.3	土玉	

第 19 表 第 1 号竪穴遺構出土遺物観察表



### 3. 土 坑

#### 第1号土坑(第48図)

- [ 位 置 ] AH - 75 グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 開口部は径 124cm の不整な円形、底面では 94cm × 80cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 34cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ゆるやかに外反して立ち上がる。
- [ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [ 堆 積 ] 土 Ⅱ 層に分層した。全体にローム粒を含む褐色土～暗褐色土を主体として堆積する。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土しなかった。
- [ 時 期 ] 不明である。

#### 第2号土坑(第48図)

- [ 位 置 ] X - 68・69 グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 開口部は 100cm × 80cm、底面では 92cm × 82cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 30cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。北側の一部が袋状となるが、全体にゆるやかに立ち上がる。
- [ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [ 堆 積 ] 土 Ⅲ 層に分層した。ローム粒を多量に含む暗褐色土を主体として堆積する。
- [ 出 土 遺 物 ] 群土器が出土した。
- [ 時 期 ] 出土遺物から縄文時代と考えられる。

#### 第3号土坑(第48図)

- [ 位 置 ] X - 68 グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] 第27号土坑と重複する。第27号土坑が新しい。
- [ 平面形・規模 ] 開口部は 92cm × 80cm、底面では 84cm × 66cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 15cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。
- [ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [ 堆 積 ] 土 Ⅳ 層に分層した。ローム粒・ローム塊を多量に含む暗褐色土を主体として堆積する。人為堆積の様相を呈する。
- [ 出 土 遺 物 ] 群3類土器(第54図2)と土師器が出土した。
- [ 時 期 ] 不明である。

#### 第4号土坑(第48図)

- [ 位 置 ] X・Y - 68 グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認

した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は110cm × 92cm、底面では96cm × 80cmの長方形を呈し、確認面からの深さは20cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆 積] 土Ⅱ層に分層した。にぶい黄褐色土を主体として堆積する。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時 期] 不明である。

#### 第5号土坑(第48図)

[位 置] Y - 71グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 土坑南側が攪乱により壊されている。残存部は開口部で132cm、底面で170cm、確認面からの深さは66cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がるが、北側の一部が袋状となる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆 積] 土Ⅱ層に分層した。第1・6・7層にローム粒・ローム塊を多量に含む。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 群3類土器(第54図3・4)、土師器、鉄滓が出土した。

[時 期] 不明である。

#### 第6号土坑(第48図)

[位 置] Y - 72グリッドで検出した。基本層序第 層で焼土を含むにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は径152cm、底面では径146cmの円形を呈し、確認面からの深さは50cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がるが、東側の一部が袋状となる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆 積] 土Ⅱ層に分層した。第1層は焼土層で遺存状況から廃棄されたと考えられる。第2層中にローム塊を含む。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 群4類・群3類土器(第54図5～10)が出土した。第54図7～10は第5号土坑出土の第54図3と同一個体である。

[時 期] 不明である。

第7号土坑(第49図)

- [位置] Z - 69グリッドで検出した。炭化物を含む黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 開口部は164cm × 120cm、底面では148cm × 106cmの長方形を呈し、確認面からの深さは28cmを計る。
- [壁] 基本層序第層を壁面としており、堅緻で一部焼土化した部分が認められる。ほぼ垂直に立ち上がる。
- [底] 基本層序第層を底面としており、堅緻である。平坦で一部焼土化した部分が認められる。
- [堆積] 土<sub>2</sub>層に分層した。第2層は混土炭化物層である。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 混土炭化物層及び壁面・底面の状況から平安時代の焼成遺構と考えられる。

第10号土坑(第49図)

- [位置] X - 68グリッドで検出した。基本層序第層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 土坑北側が攪乱により壊されている。残存部から、開口部は124cm × 86cm、底面では118cm × 76cmの楕円形を呈していたと思われる。確認面からの深さは12cmを計る。
- [壁] 基本層序第層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。
- [底] 基本層序第層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積] 土<sub>1</sub>層である。ローム粒を多量に含む。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 不明である。

第11号土坑(第49図)

- [位置] X - 69グリッドで検出した。基本層序第層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 開口部は166cm × 86cm、底面では142cm × 46cmの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは32cmを計る。
- [壁] 基本層序第層を壁面としており、堅緻である。やや外反して立ち上がる。
- [底] 基本層序第層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積] 土<sub>2</sub>層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 群3類土器が出土した。
- [時期] 出土遺物から縄文時代後期に帰属すると考えられる。

第13号土坑(第49図)

- [位置] W - 68グリッドで検出した。基本層序第層で褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。

- [平面形・規模] 開口部は径110cm、底面では径88cmの円形を呈し、確認面からの深さは26cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅰ層である。ローム塊を多量に含む。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 不明である。

第14号土坑(第49図)

- [位置] Q - 64グリッドで検出した。基本層序第 層で炭化物を含む黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 開口部は128cm × 92cm、底面では128cm × 83cmの不整な長方形を呈し、確認面からの深さは8cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ゆるやかに外反して立ち上がる。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅰ層である。炭化物と多量の炭化物粒を含む。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 不明である。

第15号土坑(第49図)

- [位置] J・K - 56グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 開口部は径134cm、底面では径104cmの円形を呈し、確認面からの深さは48cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅱ層に分層した。第1層中に炭化物が認められる。人為堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 土師器甕(第54図23)が出土した。
- [時期] 不明である。

第16号土坑(第50図)

- [位置] K - 55・56グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 開口部は径169cm、底面では径174cmの円形を呈し、確認面からの深さは38cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。内傾して立ち上がり袋状の断面形を呈する。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅲ層に分層した。黒色土と黒褐色土を主体として堆積する。第2層中にローム粒を多量に含む。

[出土遺物] 土師器甕(第54図15)が出土した。

[時期] 出土遺物から10世紀前半か、それ以降に帰属すると考えられる。

#### 第19号土坑(第50図)

[位置] H-55グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 掘り過ぎのため全体の形状は不明であるが長方形を呈すると思われる。残存部は、開口部で118cm×40cm、底面では10cm×36cm、掘り込み面からの深さは58cmを計る。

[壁] 基本層序第 層で掘り込み面を確認した。基本層序第 . . . 層を壁面とする。ほぼ垂直に立ち上がり、脆弱である。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆積土] 層である。ローム粒を多量に含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 掘り込み面を基本層序第 層上面で確認したことから、平安時代に帰属すると考えられる。

#### 第20号土坑(第50図)

[位置] G-44・45グリッドで検出した。基本層序第 層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部は88cm×76cm、底面では80cm×76cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは50cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。東側の一部が袋状となるほかはほぼ垂直に立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆積土] 層に分層した。黒色土と黒褐色土を主体として堆積する。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明である。

#### 第21号土坑(第50図)

[位置] G-44グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部は74cm×54cmの不整な楕円形、底面では64cm×42cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは64cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。東側の一部が袋状となるほかはほぼ垂直に立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面とし、平坦で堅緻である。

[堆積土] 層に分層した。全体にローム粒を含む暗褐色土を主体として堆積する。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明である。

#### 第22号土坑(第50図)

[位置] G - 42グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部は54cm × 44cm、底面では56cm × 52cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは66cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。袋状の断面形を呈する。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆積土] 層である。ローム粒を少量含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明である。

#### 第23号土坑(第50図)

[位置] F - 41グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部は201cm × 44cmの溝状、底面では78cm × 16cmの不整形と32cm × 14cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは24cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ゆるやかに外反して立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、堅緻である。西に向かって傾斜し、南西壁寄りで一段落ち込む。

[堆積土] 層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明である。

#### 第24号土坑(第51図)

[位置] F - 40グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部は110cm × 70cmの楕円形、底面では径28cmの円形を呈し、確認面からの深さは22cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ゆるやかに外反して立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆積土] 層である。ローム粒を中量含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明である。

第26号土坑(第51図)

- [位置] Z - 69グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 土坑西側が攪乱により壊されている。残存部は、開口部で100cm × 128cm、底面では94cm × 120cmを計り、不整な長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは12cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅱ層のみである。ローム粒・ローム塊を多量に含む。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 不明である。

第27号土坑(第48図)

- [位置] X - 68グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] 第3号土坑・第1号ピットと重複する。第3号土坑よりも古く、第1号ピットよりも新しい。
- [平面形・規模] 開口部は82cm × 90cm、底面では72cm × 64cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ゆるやかに立ち上がる。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅳ層に分層した。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 不明である。

第28号土坑(第51図)

- [位置] S - 64グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 開口部は120cm × 92cm、底面では110cm × 83cmの長方形を呈し、確認面からの深さは28cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。垂直に立ち上がる。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] Ⅱ層に分層した。第2層に多量の炭化物粒を含む。
- [出土遺物] 出土しなかった。
- [時期] 不明である。

第29号土坑(第51図)

- [位置] AQ - 79・80グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。

- [平面形・規模] 開口部は径188cm、底面では径200cmの円形を呈し、確認面からの深さは148cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。底面直上から内傾し、頸部がやや幅広  
な袋状の断面形を呈する。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] 13層に分層した。下層に壁崩落土と思われるローム塊を含む。
- [出土遺物] 覆土上層から土師器が、覆土下層から 群3類土器(第54図18)が出土した。
- [時期] 出土遺物から縄文時代後期に帰属すると考えられる。

#### 第30号土坑(第51図)

- [位置] P-62グリッドで検出した。第7号竪穴式住居跡精査時に西壁際で黒褐色土と暗褐色土  
の掘り込みを確認した。
- [重複] 第7号竪穴式住居跡と重複する。新旧関係は不明である。
- [平面形・規模] 重複により平面形は不明である。残存部から、開口部は径130cmの不整形円形、底面  
は36cm×3cmの不整形楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは84cmを計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がり、円筒形の断面  
である。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] 下層に分層した。全体にローム粒・ローム塊を含む。人為堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 土師器が出土した。
- [時期] 不明である。

#### 第32号土坑(第51図)

- [位置] AM-76グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 調査区外に続くため全体形は不明であるが円形を呈すると思われる。検出部分から開口  
部は径123cm、底面は径71cmの円形を呈すると思われる。掘り込み面からの深さは79cmを  
計る。
- [壁] 基本層序第 層を壁面としており、上部は脆弱である。
- [底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [堆積土] 4層に分層した。第1・2層に炭化物粒・ローム粒を多量に含む。人為堆積の様相を示す。
- [出土遺物] 覆土上層から 群4類土器が出土した。
- [時期] 不明である。

#### 第33号土坑(第52図)

- [位置] AQ-76・77グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。



[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は168cm × 126cmの不整楕円形、底面では182cm × 174cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは138cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。底面直上から内傾し、頸部がやや幅広の袋状の断面形を呈する。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆 積] 土 10層に分層した。全体に炭化物粒・ローム粒・ローム塊を含む。人為堆積の様相を呈する。

[出 土 遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 第29号土坑と規模・断面形が類似することから縄文時代に帰属すると考えられる。

#### 第38号土坑(第52図)

[位 置] AK - 75グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 調査区外に続くため全体形は不明であるが、検出部分から開口部は径148cm、底面は径70cmの不整な円形を呈すると思われる。確認面からの深さは52cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。南及び北壁は段をもって立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、堅緻である。

[堆 積] 土 4層に分層した。全体にローム粒を含む。

[出 土 遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 不明である。

#### 第39号土坑(第52図)

[位 置] AH - 78グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] 第2号ピットと重複する。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 開口部は180cm × 136cm、底面では170cm × 122cmの長方形を呈し、確認面からの深さは29cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。ほぼ垂直に立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、堅緻である。西に向かってゆるやかに傾斜する。

[堆 積] 土 3層に分層した。褐色土と暗褐色土を主体として堆積する。

[出 土 遺 物] 土師器鉢(第54図20)が出土した。

[時 期] 出土遺物から10世紀初頭から前半に帰属すると考えられる。

#### 第40号土坑(第52図)

[位 置] AK - 78でグリッドで検出した。基本層序第 層で炭化物を含む暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は110cm × 78cm、底面では104cm × 70cmの長方形を呈し、確認面からの深さは5cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。垂直に立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、堅緻で平坦である。

[堆 積 土] Ⅰ層である。炭化物と焼土塊を少量含む。

[出 土 遺 物] 土師器坏(第54図22)が出土した。

[時 期] 出土遺物から10世紀初頭から前半に帰属すると考えられる。

#### 第41号土坑(第52図)

[位 置] AR・AS - 75グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は212cm × 180cm、底面では200cm × 156cmの不整な長方形を呈し、確認面からの深さは27cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。垂直に立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、堅緻である。西に向かってやや傾斜する。

[堆 積 土] Ⅲ層に分層した。全体に炭化物粒とローム粒を含む。

[出 土 遺 物] 土師器甕が出土した。

[時 期] 出土遺物から平安時代に帰属すると考えられる。

#### 第44号土坑(第52図)

[位 置] AK - 75グリッドで検出した。基本層序第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は126cm × 100cm、底面では98cm × 70cmの不整な長方形を呈し、確認面からの深さは40cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。やや外反して立ち上がる。

[底] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[堆 積 土] Ⅳ層に分層した。第2・3層にローム塊を含む。

[出 土 遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 不明である。

#### 第45号土坑(第53図)

[位 置] AP - 77グリッドで検出した。基本層序第 層で褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 開口部は104cm × 94cmの不整な楕円形、底面では106cm × 92cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは75cmを計る。

[壁] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。底面直上から内傾し頸部が幅広な袋

状の断面形を呈する。

- [ 底 置 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [ 堆 積 ] 土 9 層に分層した。第 1・6 層に多量の炭化物粒を含む。人為堆積の様相を呈する。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土しなかった。
- [ 時 期 ] 第 29 号土坑と規模・断面形が類似することから縄文時代に帰属すると考えられる。

#### 第 46 号土坑 ( 第 53 図 )

- [ 位 置 ] AP - 80 グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 開口部は攪乱により一部壊されている。底面は径 120cm の円形を呈し、確認面からの深さは 75cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。底面直上から内傾し頸部がせばまる袋状の断面形を呈する。
- [ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [ 堆 積 ] 土 7 層に分層した。全体にローム粒を多量含む。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土しなかった。
- [ 時 期 ] 第 29 号土坑と規模・断面形が類似することから縄文時代に帰属すると考えられる。

#### 第 47 号土坑 ( 第 53 図 )

- [ 位 置 ] AQ - 81 グリッドで検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 開口部は径 142cm、底面では径 180cm の円形を呈し、確認面からの深さは 107cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。底面直上から内傾し袋状の断面形を呈する。
- [ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。
- [ 堆 積 ] 土 11 層に分層した。褐色～暗褐色土を主体として堆積する。下層にローム粒・ローム積の様相を呈する。
- [ 出 土 遺 物 ] 群土器と土師器が出土した。
- [ 時 期 ] 出土遺物から縄文時代に帰属すると考えられる。

#### 第 48 号土坑 ( 第 53 図 )

- [ 位 置 ] AQ - 80・81 グリッドで検出した。基本層序第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] なし。
- [ 平面形・規模 ] 開口部は径 148cm、底面では径 144cm の円形を呈し、確認面からの深さは 50cm を計る。
- [ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。南側の一部が袋状を呈するが、ほぼ垂直に立ち上がる。

[ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、平坦で堅緻である。

[ 堆 積 土 ] 層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[ 出 土 遺 物 ] 群土器と土師器が出土した。

[ 時 期 ] 出土遺物から縄文時代に帰属すると考えられる。

#### 4. ピット

##### 第1号ピット(第53図)

[ 位 置 ] X - 60 で検出した。基本層序第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[ 重 複 ] 第27号土坑と重複する。第27号土坑が新しい。

[ 平面形・規模 ] 開口部は54cm × 20cm、底面では40cm × 18cmの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは24cmを計る。

[ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。垂直に立ち上がる。

[ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、堅緻である。

[ 堆 積 土 ] 層である。ローム粒を中量含む。

[ 出 土 遺 物 ] 出土しなかった。

[ 時 期 ] 不明である。

##### 第2号ピット(第53図)

[ 位 置 ] AH - 78 で検出した。第39号土坑を精査中に確認した。

[ 重 複 ] 第39号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

[ 平面形・規模 ] 開口部は径24cm、底面では径22cmの円形を呈し、確認面からの深さは12cmを計る。

[ 壁 ] 基本層序第 層を壁面としており、堅緻である。垂直に立ち上がる。

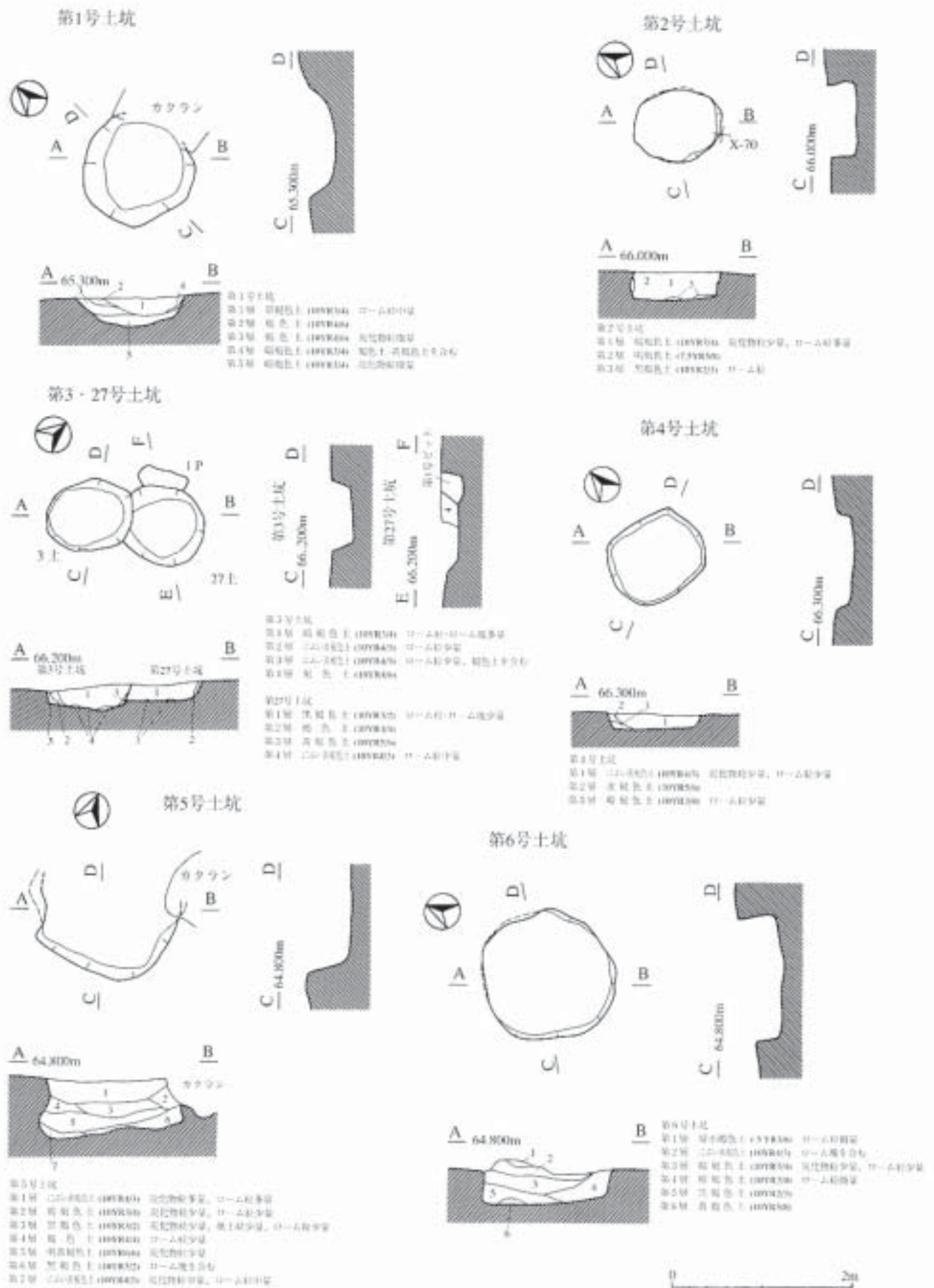
[ 底 ] 基本層序第 層を底面としており、堅緻である。

[ 堆 積 土 ] 完掘した状況で確認したため、堆積状況については不明である。

[ 出 土 遺 物 ] 出土しなかった。

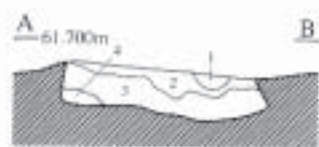
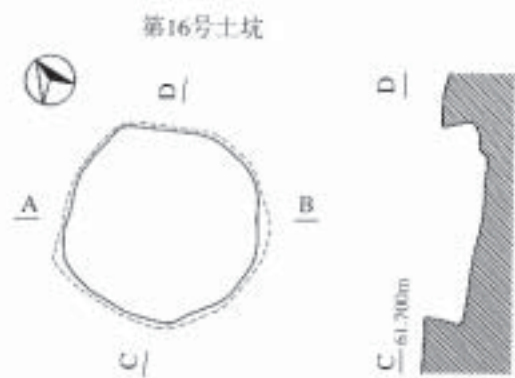
[ 時 期 ] 不明である。

( 蝦 名 純 )

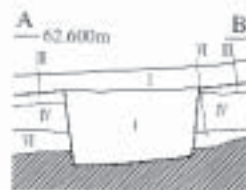


第48図 第1・2・3・4・5・6・27号土坑

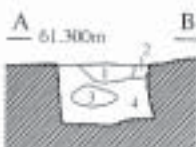
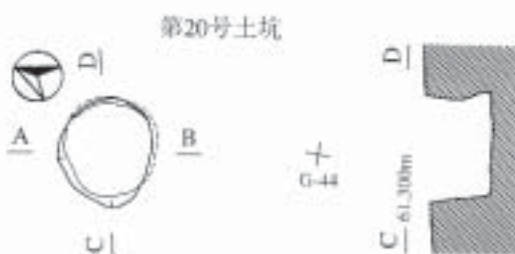




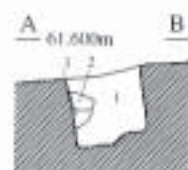
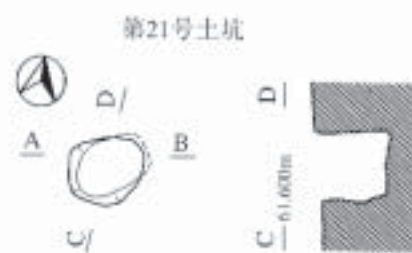
第16号土坑  
第1层 灰 色 土 (HYK156) 灰化物较多, 碎—小卵石  
第2层 灰褐色土 (HYK20) 碎—小卵石  
第3层 灰 色 土 (HYK20) 碎—小卵石  
第4层 灰褐色土 (HYK20) 碎—小卵石



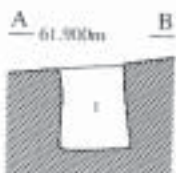
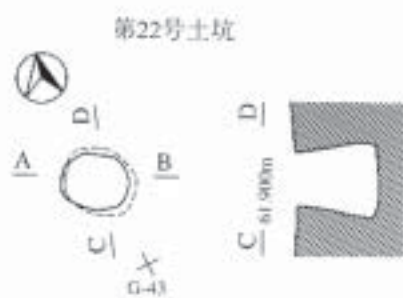
第19号土坑  
第1层 灰褐色土 (HYK20) 灰化物较多, 壁上印痕迹, 碎—小卵石



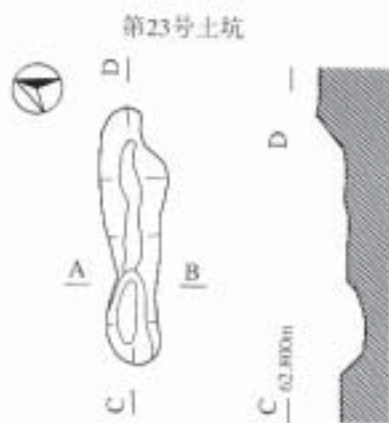
第20号土坑  
第1层 灰 色 土 (HYK21) 碎—小卵石  
第2层 灰褐色土 (HYK20) 碎—小卵石  
第3层 灰褐色土 (HYK21) 灰化物较少, 碎—小卵石  
第4层 灰褐色土 (HYK24) 灰化物较少, 碎—小卵石



第21号土坑  
第1层 灰褐色土 (HYK40) 灰化物较多, 碎—小卵石  
第2层 灰 色 土 (HYK20) 碎—小卵石  
第3层 灰褐色土 (HYK20) 碎—小卵石



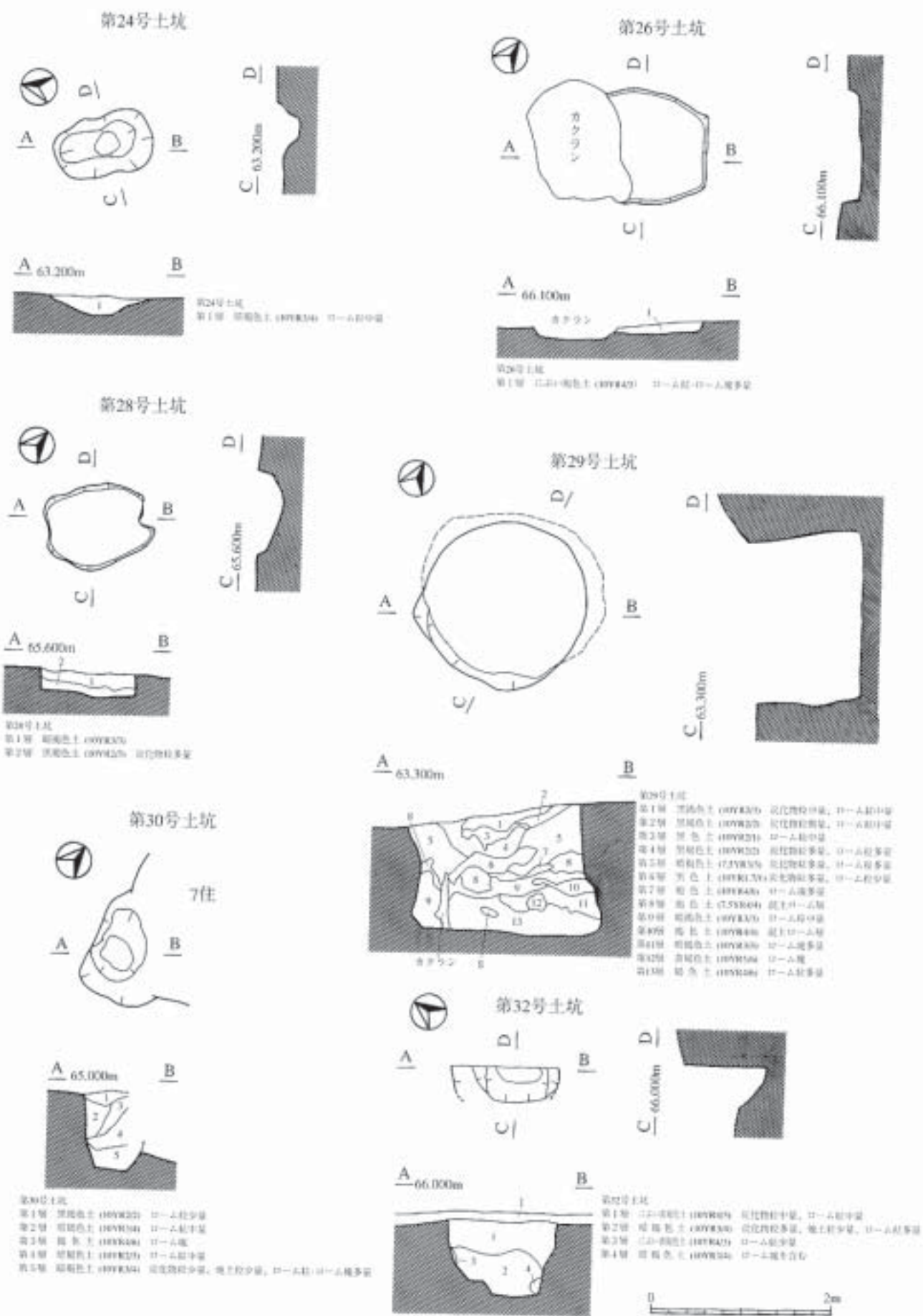
第22号土坑  
第1层 灰褐色土 (HYK40) 碎—小卵石



第23号土坑  
第1层 灰褐色土 (HYK14) 碎—小卵石

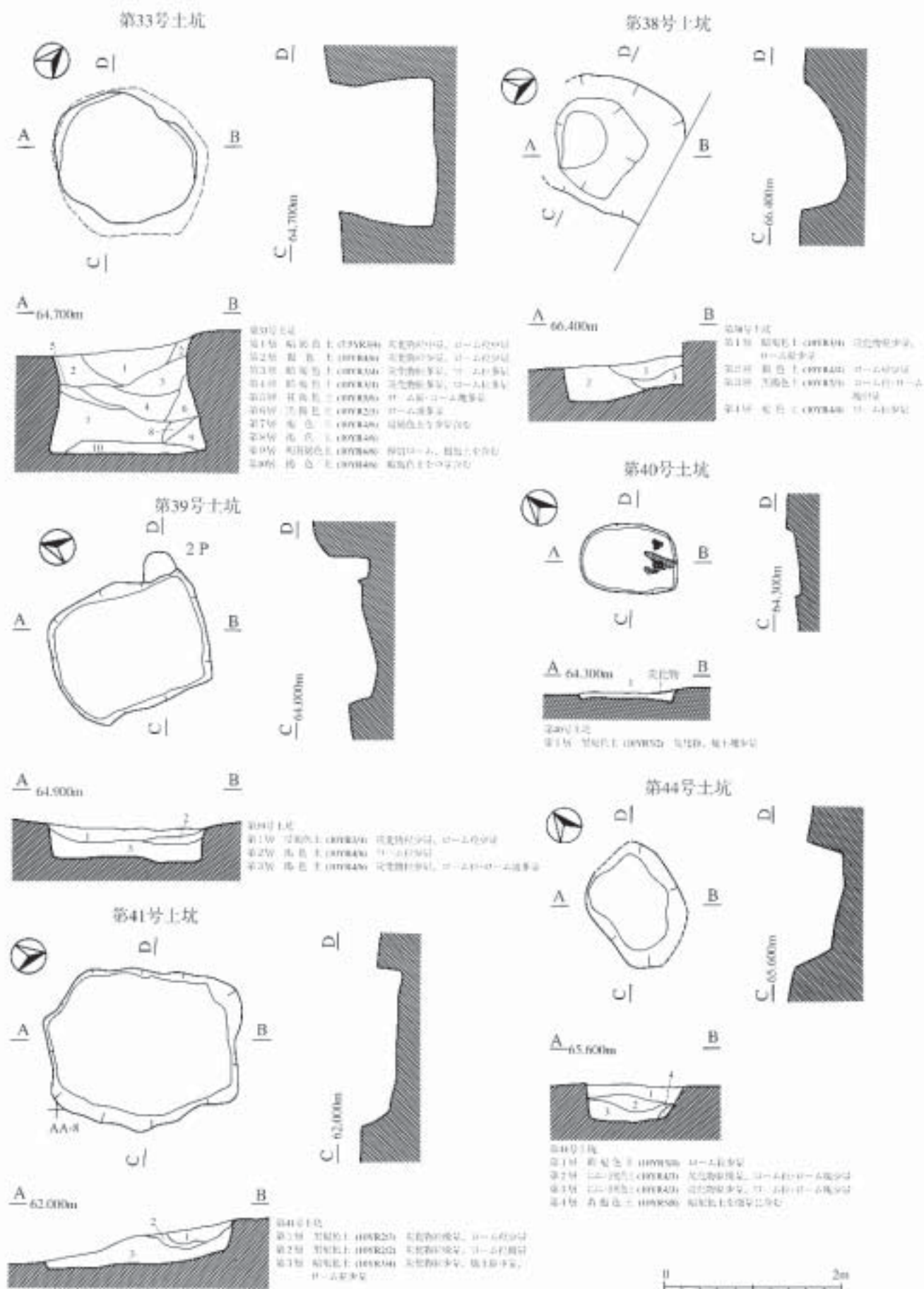


第50图 第16·19·20·21·22·23号土坑

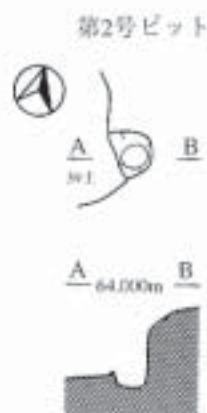
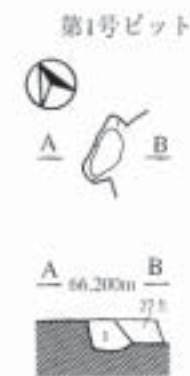
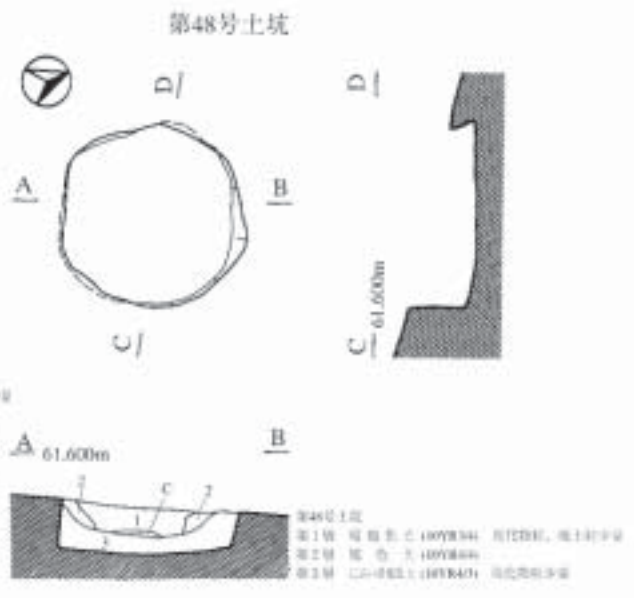
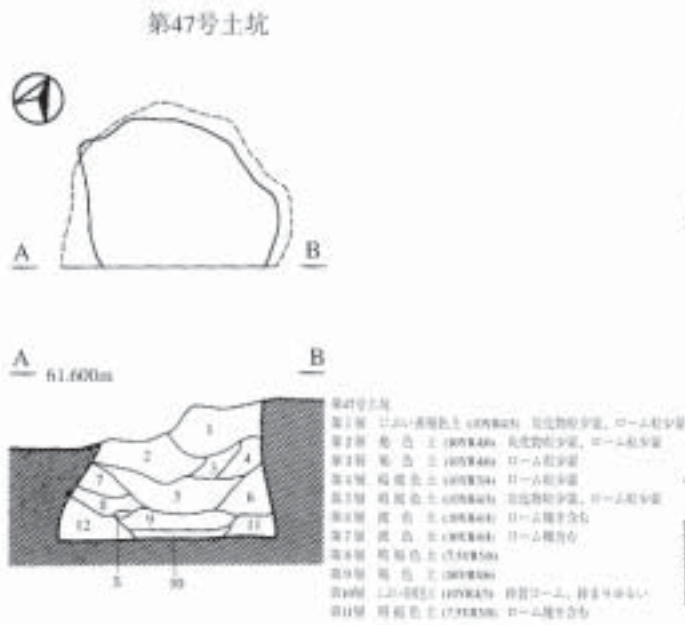
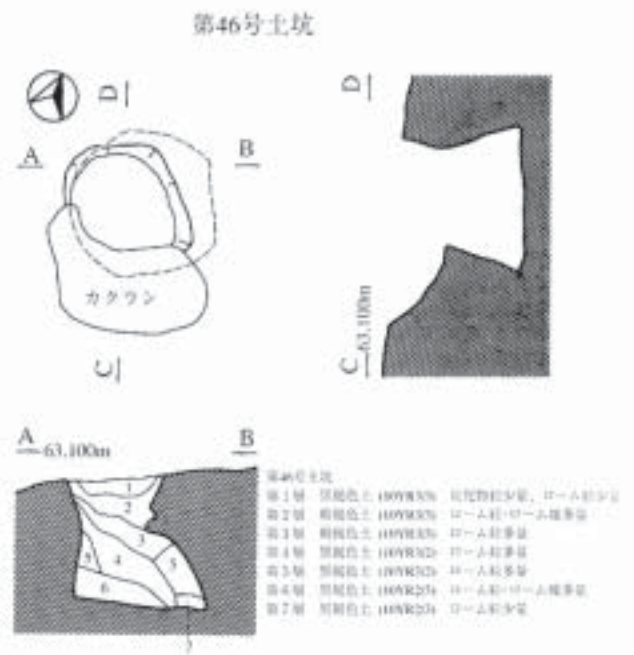
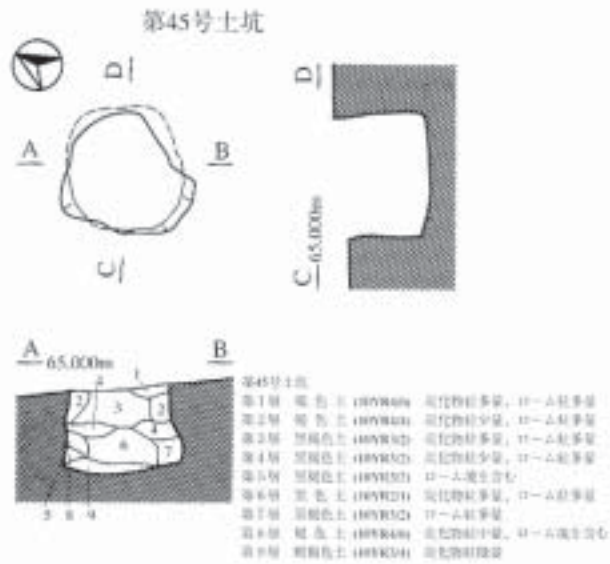


第51图 第24・26・28・29・30・32号土坑

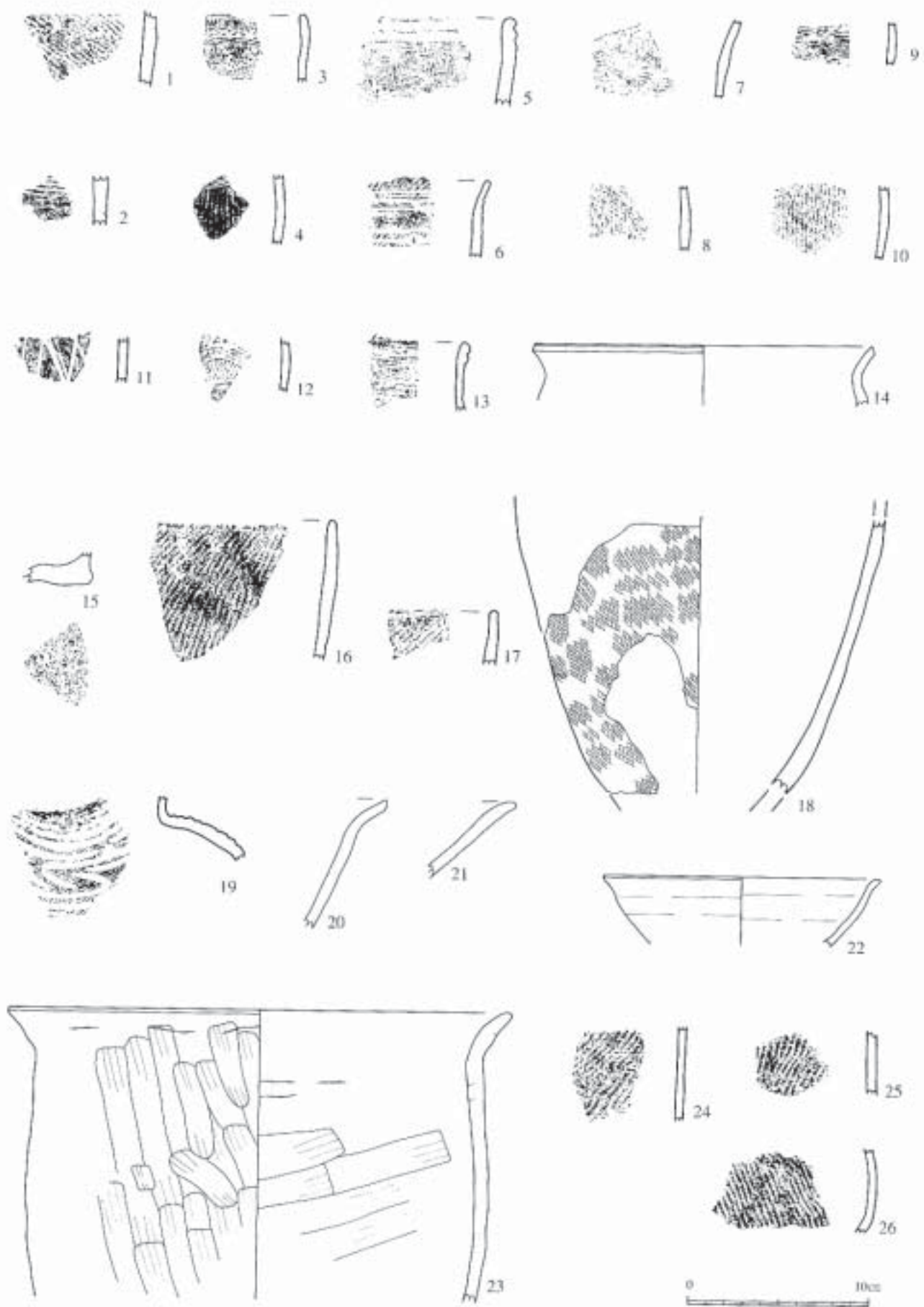




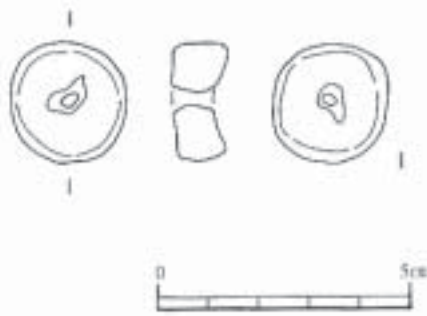
第52图 第33·38·39·40·41·44号土坑



第53図 第45・46・47・48号土坑・第1・2号ピット



第54图 土坑出土遺物(土器)



第55図 土坑出土遺物（土製品）

番号	出土地点	層位	種別	器種	法 量 (cm)			部 位	文 様	分 類	備 考
					口径	器高	底径				
54-1	2土	覆土	縄文	深鉢	-	-	-	胴部	R L 斜縄文		
54-2	3土	覆土	弥生	鉢	-	-	-	胴部	微隆起線文 帯縄文 刺突	- 3	
54-3	5土	覆土	弥生	鉢	(10.8)	-	-	口縁部	横位単軸絡条体回転文	- 3	7~10と同一個体
54-4	5土	覆土	弥生	鉢	-	-	-	胴部	横位・縦位単軸絡条体回転文	- 3	
54-5	6土	覆土	縄文	深鉢	(13.6)	-	-	口縁部	横位沈線 外面に条痕文	- 4	
54-6	6土	覆土	弥生	鉢	(12.0)	-	-	口縁部	変形工字文 L R 縄文	- 1	
54-7	6土	覆土	弥生	鉢	-	-	-	口縁部	横位単軸絡条体回転文	- 3	8~10と同一個体
54-8	6土	覆土	弥生	鉢	-	-	-	胴部	縦位単軸絡条体回転文	- 3	
54-9	6土	覆土	弥生	鉢	-	-	-	口縁部	横位単軸絡条体回転文	- 3	
54-10	6土	覆土	弥生	鉢	-	-	-	胴部	縦位単軸絡条体回転文	- 3	
54-11	11土	覆土	縄文	深鉢	-	-	-	胴部	格子状沈線文	- 3	
54-12	11土	覆土	縄文	鉢				胴部	磨消縄文 渦巻き文	- 3	
54-13	11土	覆土	縄文	深鉢	(13.4)	-	-	口縁部	波状口縁 磨消縄文	- 3	
54-16	29土	覆土	縄文	深鉢	(28.4)	-	-	口縁部	平縁 L R 斜縄文		
54-17	29土	覆土	縄文	深鉢	(20.2)	-	-	口縁部	平縁 L R 斜縄文		
54-18	29土	覆土	縄文	深鉢	-	-	-	胴部	R L 斜縄文	- 3	
54-19	32土	覆土	縄文	壺	-	-	-	肩部	連繫入組文	- 4	
54-24	47土	覆土	縄文	深鉢	-	-	-	胴部	L R 斜縄文		
54-25	47土	覆土	縄文	深鉢	-	-	-	胴部	L R 斜縄文		
54-26	48土	覆土	縄文	深鉢	-	-	-	胴部	R L 斜縄文		

番号	出土地点	層位	種別	器種	法 量 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底部調整	遺存率	分 類	備 考
					口径	器高	底径						
54-14	15土	覆土	土師器	甕	(18.8)	-	-	ナデ	ナデ	-	20%	B 2b	砂粒少量
54-15	16土	覆土	土師器	甕	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラナデ	砂底	20%	B	砂粒少量
54-20	39土	覆土	土師器	甕	-	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ			B	
54-22	40土	覆土	土師器	坏	(15.4)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	20%	4	砂粒微量
54-23	41土	覆土	土師器	甕	(28.0)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ		16%	B a	砂粒多量
54-21	41土	覆土	土師器	甕	-	-	-	ナデ・ヘラナデ	ナデ			B	

番号	層 位	最 大 計 測 値				分 類	備 考
		長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)		
55-1	覆 土	23	23	11	5.5	土製品	穿孔

第20表 土坑出土遺物観察表

## 第2節 出土遺物

今年度の調査において出土した遺物総量はダンボール箱換算で23箱で、内訳は縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器・石器・羽口・鉄製品・鉄滓・木製品である。

土器の出土量は、土師器が最も多く須恵器・縄文式土器・弥生式土器が少量出土している。以下、各種別ごとに記述する。

### 1. 縄文式土器（第56・57図 他）

縄文式土器は主に試掘坑・遺構覆土中から少量出土した。出土地点と時期に大きな偏りは認められなかったが、標高62m前後と標高65m前後の平坦地に中期末から後期初頭の時期に若干のまとまりは認められる。時期により四つに分類した。破片資料が大半であるため、器形の類別は推定である。時期は前期末から晩期末におよぶ。

#### 群1類 縄文時代前期に属する土器（第56図1～3）

深鉢形が主体と思われる。出土量は少ない。胎土に多量の繊維を含む特徴をもつ。口縁部に横位擦糸圧痕が施されるもの（1）、胴部に結束羽状縄文が施されるもの（2・3）が認められる。これらの土器は前期末の円筒下層d式期前後の時期に帰属する。

#### 群2類 縄文時代中期に属する土器（第56図7～12）

深鉢形が主体と思われる。遺構外からの出土が多く、初頭から末までの時期が認められる。初頭から中葉にかけての土器は、円筒上層a式（4・5）、円筒上層b式（6）、円筒上層d式（7・8）にそれぞれ比定できる。

9～12は深鉢形土器のやや外反する口縁部資料である。平面形が長方形となる刺突が施され、胴部にはRL斜縄文が施される。中期中葉に帰属すると思われる。12は唯一全体の器形を復元できた深鉢形土器でE-39グリッドから出土した。胴部がややはりだし底部付近ですぼまる。やや外反する口縁で2～4cmの幅で無文となり胴部にはLR・RL縄文が施される。中期末の大木10式に比定できるとと思われる。

#### 群3類 縄文時代後期の土器（第57図1～13 他）

破片の出土が主で全体の器形・文様構成を明確にできるものは少ない。深鉢形が主体かと思われ、そのほかに壺・小型の鉢形が認められる。後期初頭の時期が主体となり、少量だが中葉の時期も認められる。粘土紐を貼り付けて口縁部と胴部の文様を区画する深鉢（第57図2）や、口唇部が折り返しやつまみあげで肥大し、充填縄文・磨消縄文と沈線によって文様を区画する小型鉢（1～6）などは十腰内式以前の牛ヶ沢（3）式・沖附（2）式期に帰属すると考えられる（青森県教育委員会 1986）。

無文地に沈線で直線や曲線を描くもの（6～11）や網目状擦糸文が施される深鉢（12・13）は十腰内式に比定できる。

文様特徴に乏しいが、無文で内・外面に朱が塗られている台付鉢（第40図8）RL斜縄文が施される深鉢（第54図18）などは後期中葉に帰属すると思われる。

#### 群4類 縄文時代晩期の土器（第57図14 他）

ごく少量の出土で中葉から末にかけての時期のものが認められる。遺構覆土から、大洞C2～A式の壺形土器肩部片（第54図19）と大洞A～A式の鉢形土器片（第40図1）が、遺構外から晩期末の台付鉢の台部（第57図14）が出土した。

#### 2. 弥生式土器（第57図 他）

弥生式土器は縄文時代の土器とほぼ同様な検出状況であった。標高65m前後の平坦地と標高59mから65mの南向きの斜面上に位置する遺構からの出土が若干多い傾向は認められる。時期により三つに分類した。破片資料が大半であるため器形の類別は推定である。

#### 群1類 弥生時代前期の土器（第57図14～19 他）

深鉢・鉢・甕・台付鉢が認められる。住居跡覆土からの出土が多くみられ、群土器では最も出土量が多い。変形工字文・波状工字文・内面沈線・縦走縄文などを特徴とする。第15号住居跡出土の変形工字文が施される台付浅鉢（第40図2）や波状工字文と刺突が施される鉢形土器（第16図8）、口頸部が無文となる甕形土器（第57図15）などは砂沢～二枚橋式に比定できる。

#### 群2類 弥生時代中期の土器（第57図20～23 他）

数点の出土である。重菱形文が施されるもの（第16図7）、地文が横走縄文で横位沈線が施されるもの（第57図20・21）、沈線間に刺突が充填される甕形土器片（第57図22・23）が認められる。宇鉄式～田舎館式期に帰属すると考えられる。

#### 群3類 弥生時代後期の土器（第57図24～26 他）

少量出土した。小破片で全体の文様構成が不明なものが多い。縄文地に横位・波状沈線が施されるもの（第40図10）は念仏間式に、特異な単軸絡条体が回転施文されるもの（第48図3・7～10、第57図24・25）は天王山式に比定できると考えられる。

以上の土器以外に続縄文時代の土器片が2点認められた。第48図2と第57図26は帯縄文・微隆起線文・三角形の刺突が施される。後北C1式に比定できると考える。

（蝦名 純）

#### 3. 土師器

本遺跡において最も多量に出土した遺物であり、遺構内からの出土量が最も多い。多くが破片での出土であり、復元できたものは殆どが竪穴式住居跡内からの出土である。器種は、坏・甕・埴・壺・鉢・ミニチュア土器であり、図化した点数は坏48点、甕60点、埴3点、壺2点、鉢2点、ミニチュア土器2点である。土師器については本遺跡の主体を占める遺物であることから、器種により分類した後、出土点数の多い坏・甕についてさらに細分をおこなうこととする。

器種により分類した後の坏・甕相互間での分類手法として、成形の違いによりA群：口ク口成形・B群：非口ク口成形に分類した後、器形あるいは口縁部の形状等の器形・調整方法等により細分すること

とした。但し、坏については出土したいずれのものも口クロ成形によるものであるため、A群・B群としての分類はおこなわない。また、黒色処理を施すものと黒色処理を施さないものの2類型がみられるため、器形による分類に移行する前に坏については、 類：内面に黒色処理を施すもの 類：内面に黒色処理を施さないものに分類する段階を設けた。

甕については器高が明らかなものを概観すると、大型・中型・小型の3類型に分類が可能である。器高が明らかではないものについても、前述の3類型に類すると推察でき得る資料が存在するが、同時に推察の域を脱しない資料も存在する。このため、甕の分類にあたっては、明確に分類し得る器形を上位として分類した後、下位段階での分類として、器高が明らかなものを参考として口径からa：大型、b：中型、c：小型とした。

## 坏

底部を有するものについてはすべて平底であり、底部切り離しは回転糸切のもの24点、静止糸切のもの10点、このうち回転糸切後に底面に再調整を施すもの3点、静止糸切後に再調整を施すもの1点であり、このうち底部直上にヘラケズリの再調整を施すものは1点である。これらはすべて 類である。また、 類でも底部切り離し後にヘラケズリを施すものが1点ある。口縁部の器形により細分する。これらの中には同類型に分類した坏であっても、比較的器高の高いものと低いものが見られる。

類：15点である。器高計測値が明らかなもの8点のうち7点が器高指数40以下の数値を示す。器高指数が最も低いものは第43図2の31、最も高いものが第22図1の48である。底部が残存するものの中で回転糸切のもの6点、静止糸切のもの2点である。口唇部の形状は外反するもの6点、直線的に立ち上がるもの7点、先細りのもの6点、丸みを帯びるもの7点である。

1類：底部から直線的に立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの

2点である。口唇部が丸みを帯び直線的に立ち上がるものと、先細りで直線的に立ち上がるものである。第22図1は器高指数は48と最も高い数値を示す。底部切り離しは回転糸切によるもので、切り離し後にヘラナデを施し、内面調整は横方向のヘラミガキを施す。外面に墨痕と思われる黒色を有する。第34図7は、ヘラミガキを施さない口クロナデである。

2類：底部付近から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの

第6号竪穴式住居跡出土の1点である。器高指数は34、口唇部は先細りでややつまみだすように外反し、内面調整は底部から上半部にかけて縦方向、口縁部には横方向のヘラミガキを施す。底部切り離しは回転糸切によるものである。

3類：胴部下半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの

3点である。器高計測値が明らかなものうち器高指数はいずれも40以下である。口唇部が丸みを帯び直線的に立ち上がるものと、先細りで直線的に立ち上がるものがある。内面調整は2点とも主に縦方向のヘラミガキを施すが、上半部に横方向のヘラミガキを施すものと無調整のものがある。

4類：胴部上半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの8点である。口縁部が残存するもののうち口唇部が外反するもの、直線的に立ち上がるものがそれぞれ4点ずつである。口唇部の形状は先細りのもの、丸みを帯びるもののそれぞれ2形態がある。直線的に立ち上がるものと外反するもので、それぞれ先細りのもの2点、丸みを帯びるもの2点である。内面調整は、主に横方向のヘラミガキを施すもの3点、主に縦方向のヘラミガキを施すもの5点である。

類：30点である。器高計測値が明らかなもの14点のうち器高指数が40以下の数値を示すもの9点、41以上の数値を示すもの5点であり、最も低い数値が35、最も高い数値が42である。底部が残存するものの中で回転系切のもの12点、静止系切のもの8点である。口唇部の形状は外反するもの17点、直線的に立ち上がるもの9点、また先細りのもの18点、丸みを帯びるもの7点である。内面の調整は第46図1・第37図2の2点についてはヘラミガキを施すが、それら以外のものはロクロナデである。

1類：底部から直線的に立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの  
第8号竪穴式住居跡出土の1点である。器高指数は40、口唇部は先細りで外反する。

2類：底部付近から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの  
第13号竪穴式住居跡出土の1点である。器高指数は35を示す。口唇部は先細りで外反する。底部切り離し後に底面にヘラケズリを施す。

3類：胴部下半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの  
10点である。器高指数が40以下を示すものが5点、41以上を示すものが1点である。口縁部が残存するもののうち口唇部が外反するもの6点、直線的に立ち上がるもの4点である。底部から体部下半にかけてくびれるように立ち上がるもの(第19図3・第26図2・第34図4・第37図3)も見受けられ、このような類型は比較的本類に多く見受けられる。

4類：胴部上半から緩やかに外反しながら立ち上がる、またはそれに類すると推察されるもの  
16点である。器高指数が40以下のものと41以上のものは4点ずつと同数である。口縁部が残存するもののうち、口唇部が先細りで外反するものが6点と最も多く、残りのものは口唇部が先細りで直線的に立ち上がるものと口唇部が丸みを帯び直線的に立ち上がるものが2点ずつ、丸みを帯び外反するもの3点である。

## 甕

A群2点、B群65点である。図上復元も含め、器高の計測値をだせるものは5点と少ない。器面調整は主にヘラナデ・ヘラケズリ・ナデによるものであり、内面に黒色処理を施すものは出土していない。外反する口縁部が短いものが多い。A群は調整により、出土量の多いB群については主に口縁部の形状により細分する。

A群 類：調整がロクロナデのもの

第7号竪穴式住居跡出土の1点である。器高9.2cmの小型甕の範疇に入るものである。



A群 類：調整がヘラケズリのもの

第12号竪穴式住居跡出土の底部破片1点である。

B群

底部から頸部にかけての調整は、ヘラナデ・ヘラケズリを施し、口縁部の調整はナデのものが多い。図化したもののうち、底部にナデ等の再調整を施すもの5点、木葉痕のもの1点、砂底のもの13点である。口縁部の形状により以下の7類型に分類する。

B群 類：頸部にくびれを持ち口縁部幅が広く、長く外反するもの

第3号竪穴式住居跡出土の1点である。

B群 1類：頸部にくびれを持ち口縁部が「く」の字状に外反するもの

9点（a：6点、c：3点）である。次に掲げる 2類との明確な差異は、口唇部が胴部最大径よりも大きく外側にある点である。第13図1は胴部最大径を中程～上半にかけて有し、頸部に稜を有する。調整は内外面ともヘラナデを施す。第7号竪穴式住居跡を壊す風倒木から出土のものと同接合関係がある。第26図6は肩部に「+」のヘラ記号を施す。

B群 2類：頸部にくびれを持ち「く」の字状に外反する口縁部が 1類より短いもの

14点である。a：9点、b：7点、c：2点と大・中型の甕が多く見受けられる。中型～小型の甕で胴部最大径を中程～上半にかけて有するものが3点（第16図1・第24図4・第43図5）、中程に有するものが1点（第16図2）である。第16図1・第43図5は底部にヘラ状の工具で再調整を施し、第24図4の底部は砂底である。大型の甕では最大径を胴部上半に有すると思われるものが多い。本類の大型甕の口縁部は、他類型の大型甕の口縁部と比較し短く、胴部最大径とほぼ同数値の径であるか内側となる。

B群 類：頸部にくびれを持ち口縁部が鋭く外反するもの

1点である。いずれも大型の甕である。胴部最大径を体部上半に有する。口縁部は鋭く外反するが、2点とも胴部最大径とほぼ同数値の径である。第8図10は、肩部が張る器形となり平縁に近くなる。

B群 類：頸部にくびれを持たず口縁部が外反するもの

6点である。いずれも大型の甕である。全体形を伺えるものは少ない。口唇部の形状を垂直に面取りするもの（第8図7）、垂直に立ち上がる口縁部が外反するもの（第19図5・第37図5・第47図2）、口縁部に縦に刻線を有するもの（第47図2）がある。

B群 類：頸部にくびれを持たず口縁部が緩やかに外反するもの

4点（a：1点、b：2点、c：1点）である。器面に施す調整は、外面ヘラケズリが3点、ヘラナデが1点、内面はいずれもヘラナデである。胴部下半から口縁部まで外傾しながら立ち上がり外反するものがある（第24図6）。

B群 類：頸部にくびれを持たず口縁部が内傾するもの

2点である。第13図3は、口縁部が内傾し、口唇部がやや直立ぎみとなる。中型の甕と思われる。

埴

口縁部破片3点、底部破片1点の3点である。第1号竪穴式住居跡・第13号竪穴式住居跡覆土・第41号土坑覆土からの出土である。破片のみの出土であり、復元され個体となったものはない。内外面の調整はいずれもヘラナデである。底部破片のものは砂底である。

壺

2点である。第1号竪穴式住居跡床面・第3号竪穴式住居跡カマドから出土している。胴部下半から中程にかけて胴部最大径を有し、口縁部は短く外反する。内外面の調整はヘラナデである。

鉢

3点である。第1号竪穴式住居跡床面・第11号竪穴式住居跡覆土・第39号土坑覆土から出土している。内外面の調整は3点とも口縁部がナデ、胴部が縦方向のヘラナデであるが、口縁部の外反と口唇部形状に差異が見受けられる。

ミニチュア土器

第13号竪穴式住居跡と第1号竪穴遺構覆土から出土した。2点とも手捏ねで作られている。内外面の調整はいずれもナデであり、底部はヘラケズリ・ヘラナデを施す。

#### 4. 須恵器

殆どが遺構内からの出土である。器種ごとに図化した点数は、坏5点、甕6点、壺7点、鉢2点である。出土量は土師器と比較し少量であり、器形全体の形状を伺えるものは少ない。

坏

口縁部破片3点、底部破片2点である。いずれもロクロ成形によるものである。第13・14号竪穴式住居跡出土の2点は胴部上半から緩やかに外反しながら立ち上がり、口唇部は外反しない。底部破片のものは2点とも回転糸切による切り離しで、それぞれ火襷・ヘラ記号を有する。

甕

床面・カマドからの出土は無く、いずれも覆土・床直・住居跡ピット内からの出土である。図化した7点のうち、ある程度の器形を伺えるものは第5号竪穴式住居跡覆土出土の第20図1である。それ以外は口縁部破片1点、胴部破片3点である。第13号竪穴式住居跡出土の3点はいずれも外面にタタキ目を有し、裏面にはアテ具痕は見られない。焼き台痕とみられる痕跡を有するものは、第5号竪穴式住居跡覆土出土の第20図1と第15号竪穴式住居跡出土の第39図5は口縁部破片である。第20図1は底部外面に、第39図5は口縁部内面に有する。

## 壺

長頸壺3点、広口短頸壺2点、底部破片1点である。BK - 85出土の底部破片は菊花文を有する。

## 鉢

3点とも破片であり、器形の全体形を伺い知ることができない。内外面の調整は3点とも口クロナデである。第16図5は口唇部上部が平滑な調整で、第19図11は上部が薄い口唇部である。

## 5. 石器

遺構内・遺構外から出土した。図化したものは剥片石器7点、石核1点、磨製石斧2点、敲磨類12点、砥石3点の25点である。第3・9号竪穴式住居跡の覆土から石鏃が1点ずつ、遺構外から石匙・石篋・スクレイパー等が出土した。砥石はいずれも遺構内からの出土で第3・5・17号竪穴式住居跡の覆土から出土している。いずれも非常に滑らかな機能面を呈している。

## 6. 羽口

第1・3・6・7・9・11・13・16・平成8年度第4号竪穴式住居跡から出土した。表面に鉄が溶着するものもある。ほとんどが破片での出土である。

## 7. 鉄製品・鉄滓

第1・2・5・8・9・11・14・15号竪穴式住居跡から刀子の柄が出土した。殆どが小破片であり完形となるものは無い。第5号竪穴式住居跡から出土した鉄製品については明確な用途は不明であるが、刀装具の一部と思われる。

遺跡内より出土した鉄滓は総重量約16.5kgである。遺構内では第2・3・9・11・13・14号竪穴式住居跡、第5・30号土坑から出土した。第3号竪穴式住居跡からは約950g、第9号竪穴式住居跡から約1,600g出土したが、他の遺構からは数点の小破片が出土した程度である。

遺構外からは総重量約12.5kg出土した。そのうちの約12kgがX - 72 ~ Y - 73グリッドの基本層序第層中からの出土である。

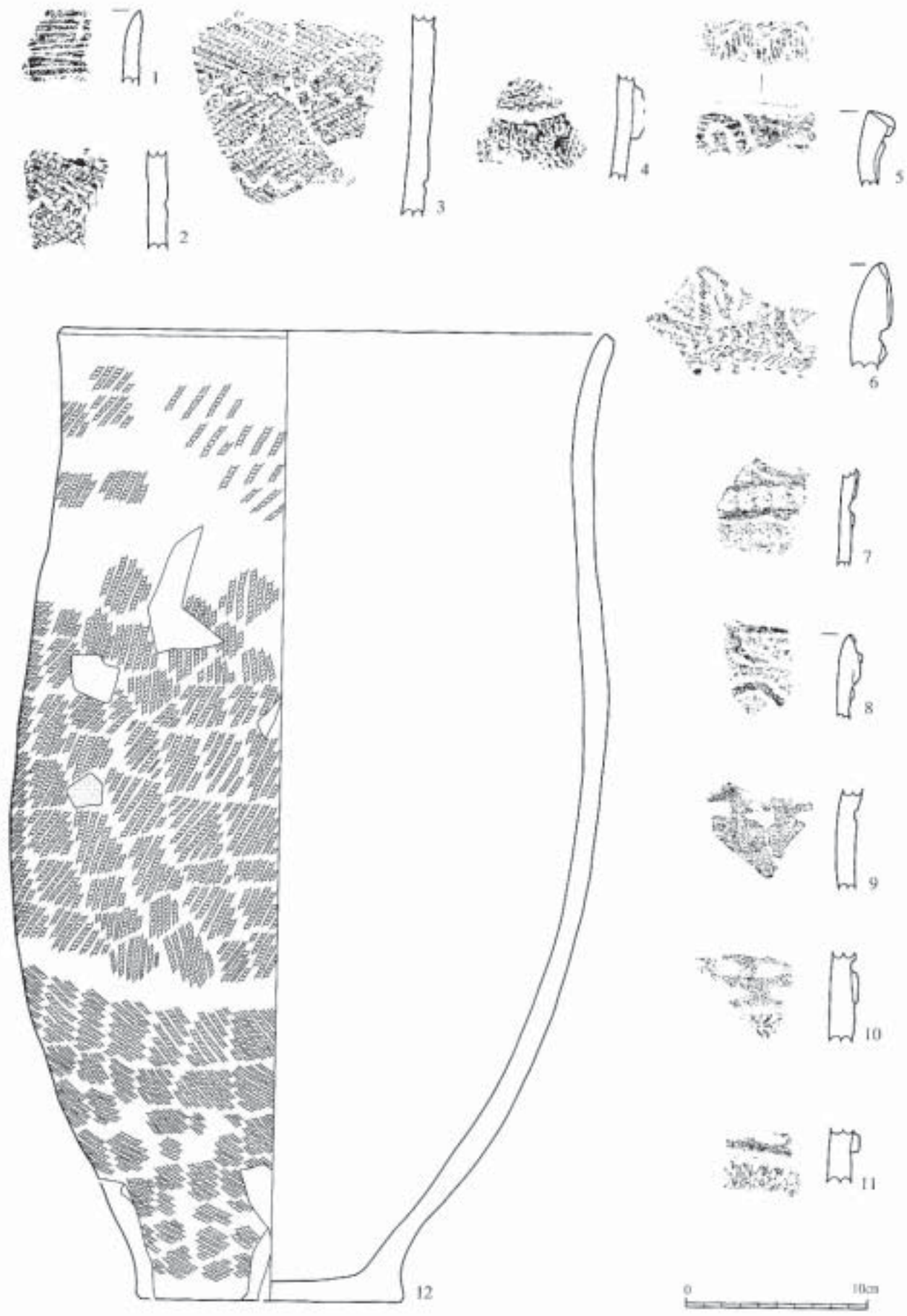
## 8. 木製品

第13号竪穴式住居跡内ピットから菰槌が1点出土した。中央の割り込みが深く、両端は面取りされる様に縁辺が丸みを帯びる。

## 9. 土製品

第10号竪穴遺構、第41号土坑から出土している。第10号土坑出土のものは土玉、第41号土坑出土のものについては、用途不明である。

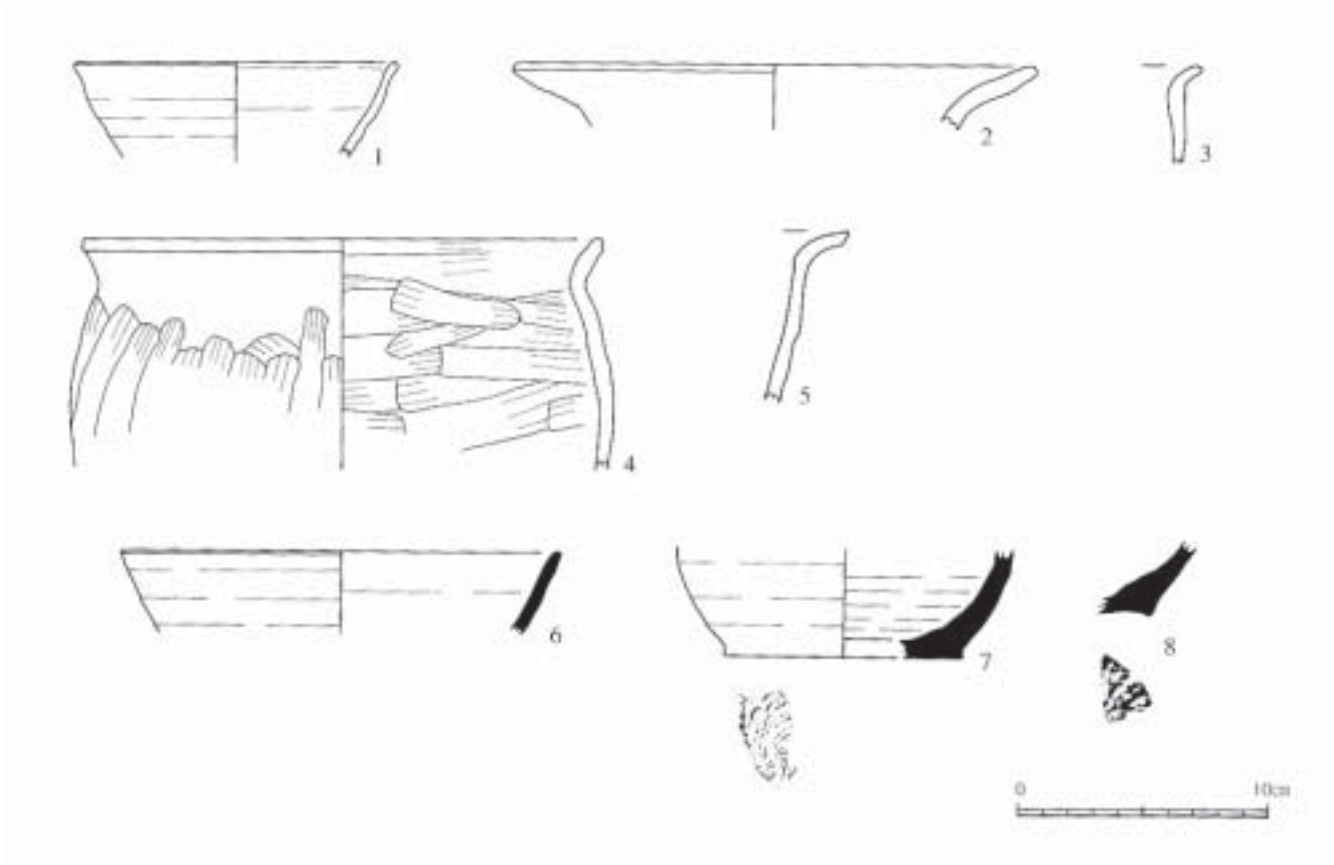
(沼宮内 陽一郎)



第56図 遺構外出土遺物(土器・1)



第57図 遺構外出土遺物(土器・2)

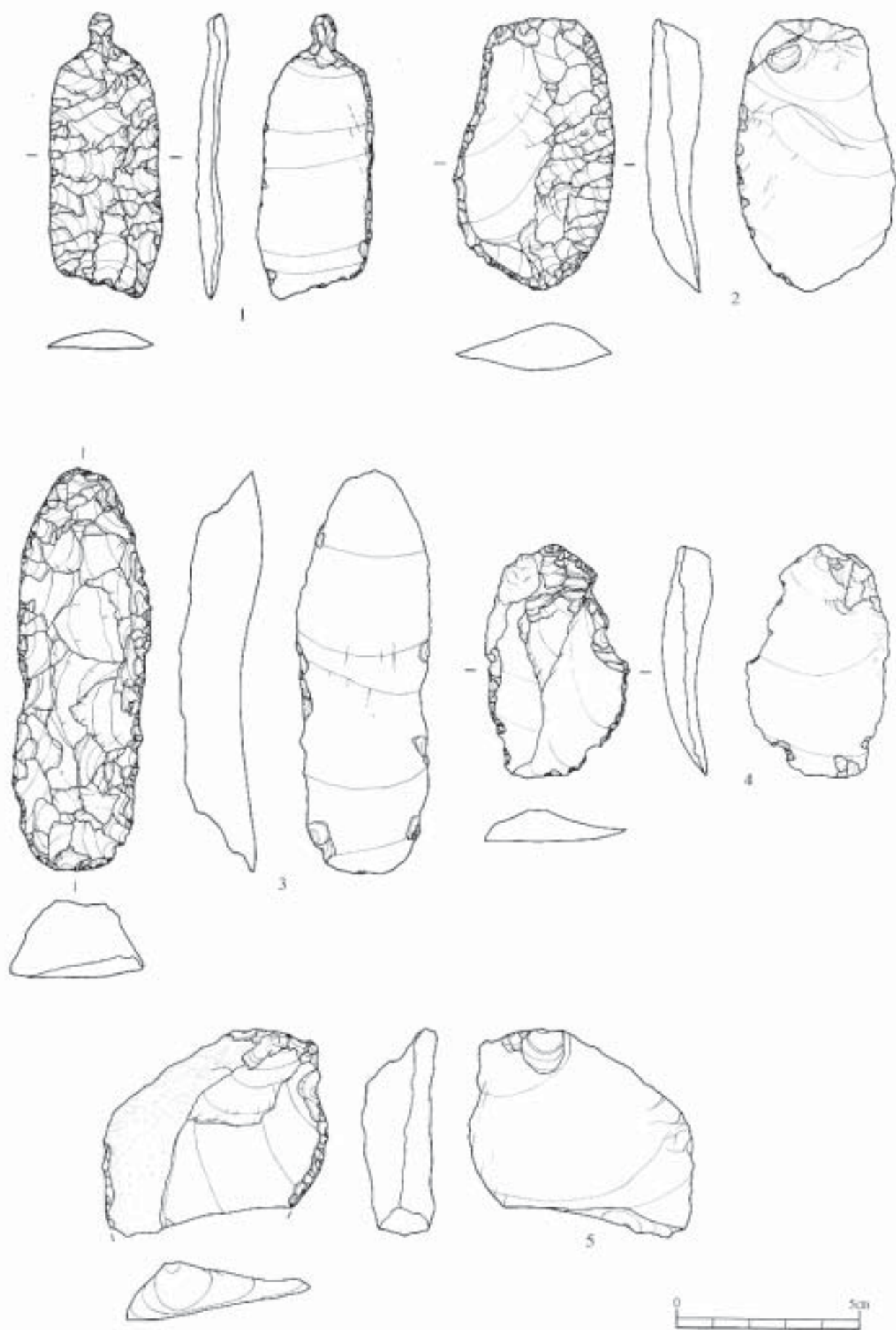


第58図 遺構外出土遺物（土器・3）

番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	法量 (cm)			文様	分類	備考
						口径	器高	底径			
56-1	AH-77		縄文	深鉢	口縁部	(10.2)	-	-	横位捺糸圧痕	-1	繊維含有
56-2	H-53	-	縄文	深鉢	胴部	-	-	-	結束羽状縄文	-1	繊維含有
56-3	G-50		縄文	深鉢	胴部	-	-	-	結束羽状縄文	-1	繊維含有
56-4	T.T.-2	~	縄文	深鉢	口縁部	-	-	-	隆帯 鋸歯状捺糸圧痕	-2	
56-5	WAA-6673	~	縄文	深鉢	口縁部	(34.0)	-	-	口唇部肥大 円・波状隆帯	-2	
56-6	L-60	-	縄文	深鉢	口縁部	(22.8)	-	-	波状口縁 爪形捺糸圧痕	-2	
56-7	AAAE-6876		縄文	深鉢	口縁部	(15.0)	-	-	波状隆帯 刺突	-2	8と同一個体
56-8	AAAE-6876		縄文	深鉢	口縁部	(15.0)	-	-	波状隆帯 刺突	-2	
56-9	S-64他		縄文	深鉢	口縁部	-	-	-	刺突	-2	10・11と同一個体
56-10	S-64他		縄文	深鉢	口縁部	-	-	-	刺突	-2	
56-11	S-64他		縄文	深鉢	口縁部	-	-	-	刺突 RL斜縄文	-2	
56-12	E-39		縄文	深鉢	略完形	30.8	53.6	14.8	口縁部磨消 RL・LR縄文	-2	
57-1	X-67		縄文	深鉢	胴部	-	-	-	RL横位縄文 沈線	-2	
57-2	AE BN-7387	-	縄文	深鉢	口縁部	-	-	-	隆帯上に縄圧痕	-3	
57-3	X-70		縄文	小型鉢	口縁部	(9.0)	-	-	LR充填縄文 方形文か	-3	
57-4	X-71		縄文	深鉢	口縁部	-	-	-	RL充填縄文 方形文か	-3	
57-5	WAA-6673	~	縄文	小型鉢	口縁部	(4.2)	-	-	波状口縁 口唇部肥大 磨消縄文	-3	
57-6	X-68		縄文	壺	胴部	-	-	-	隆帯 方形文	-3	
57-7	不明		縄文	鉢	口縁部	(19.8)	-	-	沈線 山形文	-3	
57-8	T.T.-2	~	縄文	壺	口縁部	(8.2)	-	-	横位沈線	-3	
57-9	AAAE-6876	~	縄文	深鉢	胴部	-	-	-	沈線 方形文か	-3	
57-10	X-70		縄文	深鉢	胴部	-	-	-	沈線 方形文か	-3	
57-11	T.T.-2	~	縄文	深鉢	胴部	-	-	-	沈線 円形・鋸歯文	-3	
57-12	PT-6168	~	縄文	深鉢	胴部	-	-	-	網目状捺糸文	-3	13と同一個体
57-13	PT-6168	~	縄文	深鉢	底部	-	-	(12.8)	平底 網目状捺糸文	-3	
57-14	AC-73		縄文	台付鉢	台部	-	-	-	LR縄文	-4	
57-15	BG・BH-79・80	-	弥生	甕	口縁部	(17.4)	-	-	RL縄文 横位沈線 内面沈線	-1	
57-16	AE BN-7387	~	弥生	鉢	胴部	-	-	-	変形工字文	-1	
57-17	T.T.-3	~	弥生	鉢	口縁部	(15.8)	-	-	山形口縁 流水工字文	-1	
57-18	T.T.-3		弥生	高台付	脚部	-	-	-	6条横位沈線	-1	朱微量付着
57-19	BG・BH-79・80	-	弥生	鉢	口縁部	(21.0)	-	-	LR斜縄文 横位沈線 内面沈線	-1	
57-20	T.T.-1	~	弥生	甕?	口縁部	(15.6)	-	-	LR横走縄文 横位沈線	-2	21と同一個体
57-21	T.T.-1	~	弥生	甕?	胴部	-	-	-	LR横走縄文	-2	
57-22	BH・BI-85・86	-	弥生	甕?	肩部	-	-	-	沈線 刺突	-2	
57-23	J-55	-	弥生	鉢	胴部	-	-	-	波状沈線 鋸歯状沈線 刺突	-2	
57-24	V-73		弥生	鉢	胴部	-	-	-	突起 単軸絡条体回転文	-3	
57-25	Y-73		弥生	鉢	口縁部	-	-	-	単軸絡条体回転文	-3	
57-26	X-67		弥生	鉢?	胴部	-	-	-	刺突 微隆起線文 帯縄文	-3	

番号	出土地点	器種	種別	層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	底調整	磨耗率	分類	備考
					口径	器高	底径						
58-1	X-72	土師器	壺		(13.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	12%	4	砂粒微量
58-2	AH75 BL86	土師器	甕		(21.0)	-	-	ナデ	ナデ	-	12%	B	砂粒多量
58-3	X_70 AA73	土師器	甕	・	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-		
58-4	AH-75	土師器	甕	表土	(20.8)	-	-	ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	-	12.5%	B 2	砂粒少量
58-5	X_70 AA73	土師器	甕	・	-	-	-	ナデ	ヘラナデ	-	33%	B	砂粒少量
58-6	G-50	須恵器	坏		(17.6)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	9%		砂粒微量
58-7	AK-78	須恵器	壺		-	-	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切	14%		砂粒微量
58-8	BL-85	須恵器	壺	-	-	-	-	-	菊花文?	-			

第21表 遺構外出土遺物観察表(土器)



第59図 遺構外出土遺物(石器1)





第60図 遺構外出土遺物(石器2)



第 61 図 遺構外出土遺物（石器 3）

番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
59-1	K - 51		73	31	8	15.8	珪質頁岩	石 匙	松原型石匙
59-2	X - 72		75	44	15	45.3	珪質頁岩	不定形石器	スクレイパー
59-3	AH75 ~ BL86	不 明	110	37	22	85.5	珪質頁岩	石 籠	
59-4	T - 70	表 土	64	40	13	23.9	珪質頁岩	不定形石器	スクレイパー
59-5	O63 ~ T76	・	61	57	20	58.1	珪質頁岩	不定形石器	スクレイパー
60-1	B L - 85	不 明	70	68	54	266.7	珪質頁岩	石 核	
60-2	AH75 ~ BL86	不 明	(58)	58	23	(129.9)	輝緑凝灰岩	磨製石斧	
60-3	G - 48	不 明	70	61	42	(236.4)	安山岩	敲磨器類	凹み・タタキ
60-4	G - 48	不 明	70	62	38	212.2	安山岩	敲磨器類	スリ
60-5	X70 ~ AA73	・	96	79	64	(674.0)	安山岩	敲磨器類	タタキ
60-6	Y - 73	木根痕	93	(74)	53	(455.9)	安山岩	敲磨器類	タタキ
61-1	Y - 73	木根痕	101	52	39	269.6	安山岩	敲磨器類	タタキ
61-2	Z - 73	・	118	67	36	(442.1)	安山岩	敲磨器類	タタキ
61-3	G - 48	不 明	134	70	41	(541.9)	安山岩	敲磨器類	スリ・擦痕・タタキ
61-4	Z - 73	・	120	49	17	(168.4)	安山岩	敲磨器類	凹み・タタキ
61-5	P - 60	表 土	87	61	47	389.9	安山岩	敲磨器類	スリ・タタキ
61-6	Z - 73	・	144	82	32	(499.6)	安山岩	敲磨器類	スリ・タタキ
61-7	R - 63		156	55	73	(1,000)	安山岩	敲磨器類	スリ・タタキ

第 22 表 遺構外出土遺物観察表（石器）

# 第 章 自然科学的分析

## 放射性炭素年代測定

葛野(2)遺跡で出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した。その結果は下記のとおりであった。

### 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

学習院大学教授 木越 邦彦

年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差は線の計数値の標準偏差にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。測定した炭素の $^{13}\text{C}$ (パーミル)の値が記入してある場合は、上記の年代値は同位体効果の補正をした値です。 $^{13}\text{C}$ の値の記載がない場合は同位体効果の補正は行っていません。

また試料の線の計数率と自然計数率の差が2以下のときは、3に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料の線の計数率と現在の標準偏差(MODERN STANDARD CARVON)についての計数率との差が2以下のときには、Modernと表示し、 $^{14}\text{C}$ %を付記してあります。

#### 記

CodeNo	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK - 20139	木炭 from 青森市大字大別内字葛野 葛野(2)遺跡 (第1号竪穴式住居跡・床直)	1380 ± 40 $^{13}\text{C} = -28.4$ A.D. 570

## 葛野(2)遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

葛野(2)遺跡から出土した須恵器と土師器の分析結果について報告する。今回分析した全資料の分析データを表1にまとめている。

はじめに、須恵器の分析結果を説明する。

図1にはK - Ca、Rb - Srの両分布図を示す。両図には、これまでに分析された約100点の五所川原窯跡群出土須恵器の分析データに基づいて五所川原領域を描いてある。平均値を中心にして、両軸に沿って $\pm 2$  (標準偏差)をとり、長方形の領域を描き、比較対照のための領域とした。

図1より、両分布図で五所川原領域に分布するのは過半数の資料である。ここで、2群間判別分析によって、これらの資料が五所川原領域に帰属するかどうかを確かめた。計算された $D^2$ (五所)は表1に示されている。 $D^2$ (五所)の計算には、K、Ca、Rb、Srの4因子が使用された。5%危険率をかけた $T^2$ 検定の結果、五所川原群へ帰属するための必要条件は $D^2$ (五所)  $\leq 10$ であることがわかっている。表1より、この条件を満足するのはNo2・4・5・7・8・9・11の7点であることがわかる。

五所川原窯群の製品であるためには、もう一つの条件が必要である。Fe > 3.0という条件である。五所川原窯群の須恵器の素材粘土は八甲田山の火山活動により噴出した岩石の風化によって生成したためであろうか、Feの含有量が多く、そのため、胎土は外見上、暗褐色～黒褐色を呈するものが多い。表1より、No4の鉢以外はすべてこの条件を満足していることがわかる。したがって、No2・5・7・8・9・11の6点の資料は五所川原窯群の製品と考えられる。 $D^2$ (五所)の値は五所川原窯群への帰属条件を満足したものの、Feの含有量の少ないNo4の鉢は五所川原窯群の製品ではないと考えられる。

以上の結果、No2・5・7・8・9・11以外の資料は産地不明となった。このうち、No3・6・12の3点は図2の両分布図でも類似した位置に分布しており、かつ、Fe、Naの分析値も似ていることが表1からわかる。したがって、これら3点の資料は同一産地の製品と推定される。他方、No10・13の2点も全因子で類似しており、別の同一産地の製品と推定される。したがって、今回分析した13点の須恵器資料は地元、五所川原窯群産、それに、外部地域とみられる2カ所の産地の製品、都合、3カ所の生産地から供給されたものであることがわかった。このうち、No10・13はK、Rb量が多く、かつ、Fe量が少ないところから、富山県まで含めた東北地方日本海側、北陸地方の製品である可能性をもつ。No3・6・12は未だ特定されていないが、東北地方の窯の製品である。No4については目下のところ、全く不明であり、これと同じ胎土をもつ資料は他にない。

このようにして、青森県内の遺跡出土須恵器の産地問題に関する胎土分析の手法は次第に固まって来つつある。

これに対して、生産地である窯跡が残っていない土師器については分析データから胎土を分類する基礎研究の段階にある。

次に、土師器の分析結果について説明する。

図3には、今回分析した土師器の両分布図を示す。かなり大きくばらついて分布しており、幾種類もの胎土が混ざっていることを示している。そこで、これらの胎土を分類し整理するために、クラスター分

析を行うことにした。

K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、クラスター分析した結果を図4に示す。デンドログラムから、簡単に大枝ごとに区分することは危険である。そこで、図3の両分布図での分布と比較しつつ、まず、小枝から一つの集団を形成してもよいかどうかを確かめながら区切ることにした。クラスター番号6・9・12・17(試料番号にしてNo19・22・25・30)は両分布図でもよくまとまって分布しており、同じ胎土と考えた。これをA群とした。しかし、このうち、No19・22にはFe量が多く、No25・30にはFe量は少ないので、これを同一胎土と考える訳にはいかないで、前者をA1群、後者をA2群とした。デンドログラム上でA群の枝に結び付いているNo16は両分布図でもA群から少しずれて分布しているが、Fe、Na因子でも対応しないので、ここでは別胎土であると考えた。

同様に、もう一つの小枝に結び付いているNo14・15・21・24も同じ胎土と考え、これをB群とした。

この他にNo16・17・29とNo26・31はそれぞれ、同じ胎土である可能性があることは図3の両分布図での分布と、表1のFe・Naの分析値から推察できるが、A・B群程のまとまりがなかったので、分類せずにいた。

この結果、葛野(2)遺跡から出土した土師器の坏は同一場所で作られたものではなく、あちこちで作られたものが持ち込まれていることがわかった。このうち、とくに、K、Rb量の多いNo26・31は青森県内の製品ではなく、外部からの搬入品である可能性をもつ。

このように、土師器の胎土研究は須恵器に比べて遅れており、未だ、胎土を分類するという基礎研究の段階にある。

試料番号	種別	器種	出土地点・層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sup>2</sup> (五所)	D <sup>2</sup> (瀬谷子)	推定産地
1	須恵器	坏	2H・覆土	0.450	0.306	2.91	0.430	0.412	0.160	29.4	31.7	不明
2	"	坏	11H・"	0.298	0.291	3.53	0.351	0.357	0.145	6.7	46.5	五所川原
3	"	壺	3H・"	0.344	0.167	3.49	0.420	0.359	0.164	23.7	8.0	不明
4	"	鉢・壺	5H・床直	0.332	0.343	2.15	0.414	0.463	0.249	8.2	29.9	"
5	"	壺	6H・覆土	0.354	0.293	3.10	0.435	0.379	0.213	1.3	39.8	五所川原
6	"	"	15H・"	0.312	0.214	3.86	0.291	0.317	0.150	40.9	35.9	不明
7	"	鉢	5HPit1・底直	0.299	0.338	3.31	0.377	0.371	0.213	2.3	68.2	五所川原
8	"	甕	5H・覆土	0.283	0.317	3.34	0.360	0.360	0.160	3.3	62.3	"
9	"	"	13H・"	0.312	0.318	2.92	0.400	0.390	0.222	2.9	48.1	"
10	"	"	13H・"	0.428	0.591	1.78	0.559	0.797	0.398	78.1	124.0	不明
11	"	"	P-60・不明	0.364	0.326	3.45	0.454	0.390	0.205	0.38	53.8	五所川原
12	"	"	P-73・	0.245	0.252	4.11	0.295	0.294	0.106	11.8	66.4	"
13	"	"	AG-77・	0.477	0.537	1.75	0.707	0.754	0.490	69.9	165.0	不明
14	土師器	坏	2H・床直	0.295	0.259	2.58	0.399	0.407	0.173			B
15	"	"	5H・覆土	0.339	0.278	2.11	0.365	0.479	0.175			"
16	"	"	6H・"	0.203	0.172	2.30	0.201	0.292	0.188			未分類
17	"	"	6H・床面	0.278	0.104	1.96	0.312	0.305	0.166			"
18	"	"	8H・カマド	0.389	0.388	1.94	0.442	0.572	0.305			"
19	"	"	9H・覆土	0.390	0.161	4.50	0.399	0.265	0.163			A <sub>1</sub>
20	"	"	9HPit14・2層	0.381	0.299	2.46	0.572	0.467	0.225			未分類
21	"	"	13H・覆土	0.378	0.274	2.32	0.473	0.425	0.259			B
22	"	"	13H・"	0.313	0.158	3.07	0.435	0.254	0.131			A <sub>1</sub>
23	"	"	14H・"	0.276	0.577	2.49	0.307	0.645	0.361			未分類
24	"	"	15H・"	0.364	0.247	2.37	0.412	0.459	0.241			B
25	"	"	1H・床面	0.341	0.165	1.80	0.405	0.244	0.074			A <sub>2</sub>
26	"	"	5H・"	0.619	0.156	3.02	0.582	0.259	0.138			未分類
27	"	"	8H・カマド	0.401	0.490	2.10	0.416	0.625	0.294			"
28	"	"	9HPit17・覆土	0.333	0.146	1.87	0.655	0.275	0.077			"
29	"	"	14H・"	0.324	0.099	3.77	0.347	0.158	0.062			"
30	"	"	15H・"	0.326	0.170	1.77	0.421	0.238	0.085			A <sub>2</sub>
31	"	"	15H・"	0.482	0.278	3.21	0.605	0.343	0.152			未分類

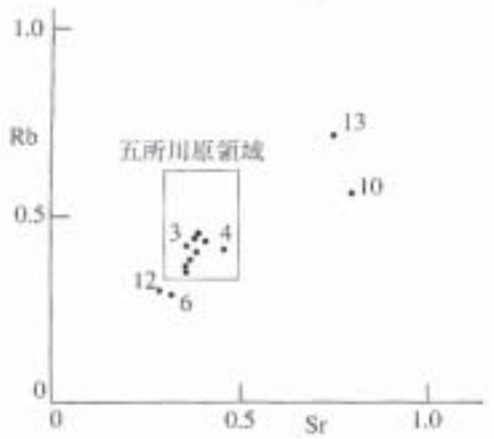
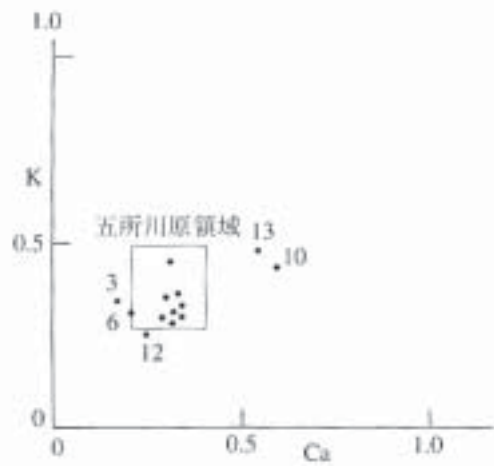


図2 須恵器のK-Ca・Rb-Sr 両分布図

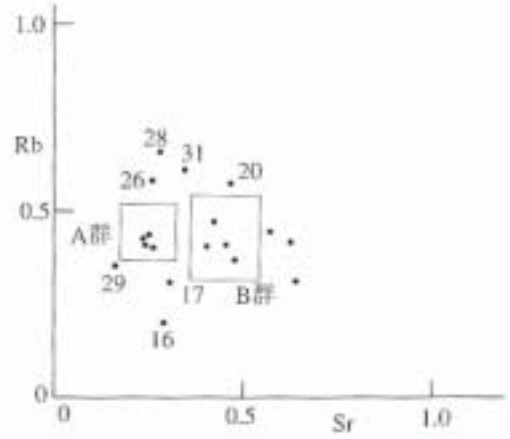
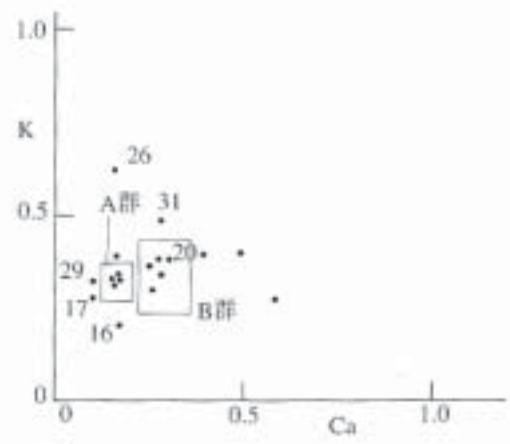


図3 土師器のK-Ca・Rb-Sr 両分布図

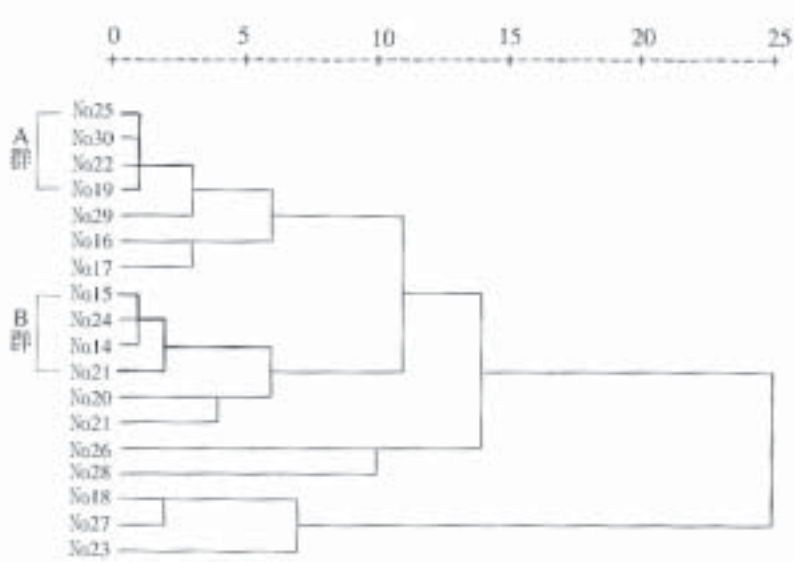


図4 デンドログラム

## 第 章 分析と考察

### 1. 住居跡変遷

今回の調査により16軒の平安時代の竪穴式住居跡を検出した。16軒の住居跡の検出状況を見ると、平成8年度調査区域からの検出、北西方向に約80m程離れた標高約65m付近の丘陵地の平坦部分からの検出、さらに北上した谷地形を挟んだ南側と北側からの検出の四地域に大別できる。土坑については第30号土坑のみが第7号竪穴式住居跡と重複関係にあり、その他の土坑の殆どは住居跡群と重複関係が無く、土坑群でのまとまりが伺える区域も存在する。

これら各住居跡は構造上の違い及び出土遺物から一時期に存在したのではなく、時期的な変遷を経て集落が営まれたことが伺われた。そこで住居跡について、各住居跡構造について項目別に分析をおこなうことにより得られた情報と、遺物側から、土器の変遷を検討し集落の変遷過程と住居跡の帰属時期について考察する。

#### 第1節 竪穴式住居跡構造の分析と形態からみた帰属時期について

##### 1. 平面形・規模

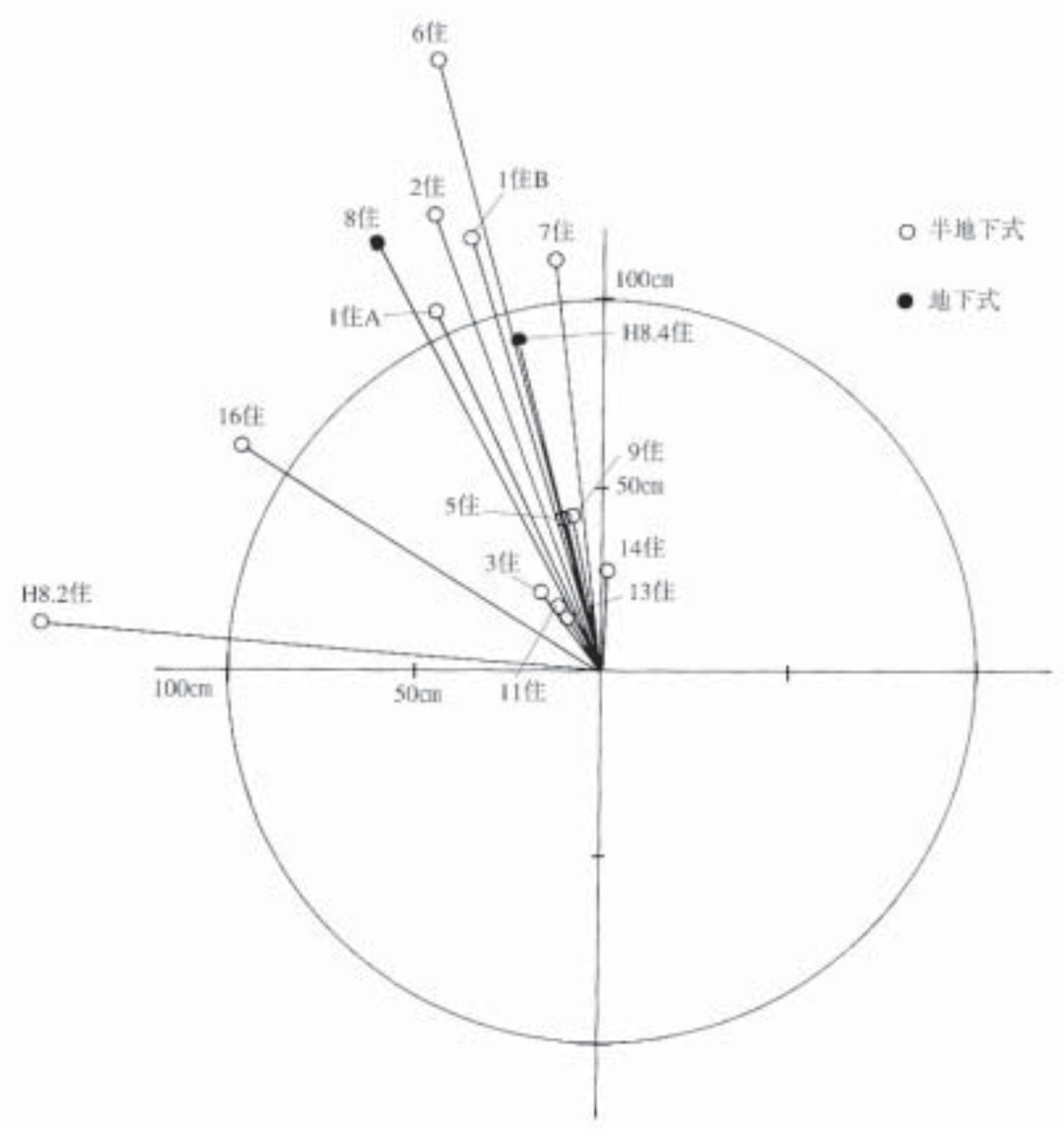
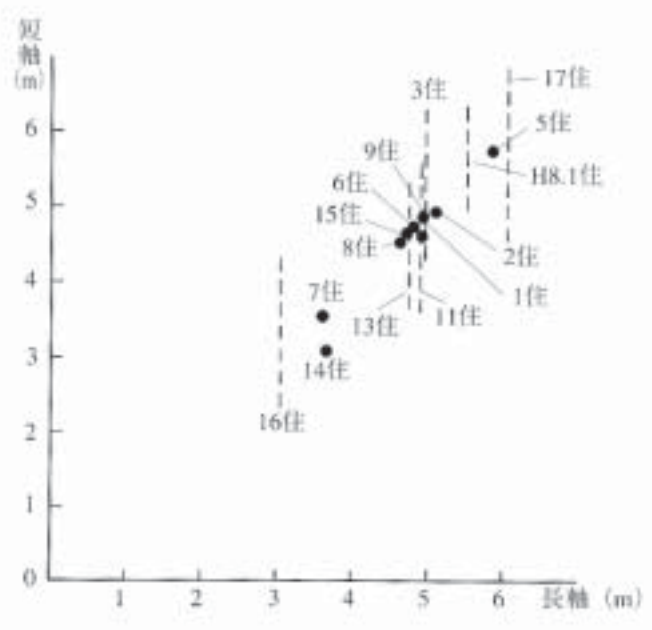
検出した16軒中未精査部分が残る第11・12・13・43号竪穴式住居跡及び、南西壁が検出しなかった第3・16号竪穴式住居跡を除く9軒の住居跡についてであるが、これらの住居跡は第14号竪穴式住居跡以外ほぼ方形を呈する平面形と認識できる。北・南、東・西各対辺の midpoint 同士を結んだ線分の長軸・短軸の差を線分に対しての割合として求めると、第14号竪穴式住居跡以外は、10%以下である。

住居跡の規模について、4方向の壁が検出した9軒の各住居跡の壁長の平均値では、3m50cm以下に2軒、4m50cm～5mの範囲内に6軒、6m弱が1軒である。また、第12号竪穴式住居跡を除く住居跡と平成8年度に検出した第1号竪穴式住居跡を対象とし、壁長の長軸・短軸を計測し大別すると、1辺3m50cm以下のもの4軒(7住・14住・16住・H8年4住)、1辺4m50cm～5mのもの9軒(1住・2住・3住・6住・8住・9住・11住・13住・16住)、1辺が6m前後のもの2軒(5住・43住)である。

第62図は、壁長の長軸と短軸の相関図である。長軸×短軸が、3m～3m50cm、4m～4m50cm、5m～6mの3領域に分かれる分布を見せる。

##### 2. カマド

検出したカマドは14基、平成8年度に検出した第2号竪穴式住居跡を含めると15基である。南壁中央より西側に設置されているものが10基である。残り4基のカマドについてはいずれも南壁中央より東側に設置されている。第1号竪穴式住居跡カマドA以外のカマドは斜面に構築されており、南壁西側の地山が浅いため煙道の崩落を避けるためなどの地形的影響を受け東側に設置したものと考えられる。第23表にカマドが構築された壁を4等分し、東側からA・B・C・Dとして、カマド設置位置を表した。煙道部は半地下式のもの13基、地下式のもの2基である。第1号竪穴式住居跡カマドAは、堆積土に焼土化したロームブロックが含まれるが、現地地形から判断すると、カマドが機能していた時期において、地下式と考えられるほど地山のロームが堆積していないことから、半地下式と考えるのが妥当と思われる。カマドB(半地下式)からカマドA(半地下式)へと移行したものと思われ、他の住居跡より



第 62 図 住居跡壁長相関図・カマド主軸方位と煙道部長



は比較的時期幅を持ち存続していたことが考えられる。その際に煙出し底面をピット状に掘り込む(カマドB)構造から、掘り込みをもたない(カマドA)構造へと変化を見せる。第1号竪穴式住居跡カマドB以外で煙出し底面をピット状に掘り込んでいるものは、第16・H8年2号竪穴式住居跡である。煙道部底面については第2・6号竪穴式住居跡の底面が、煙出しへ向かい緩やかに上昇し中程で一旦落ち込むという類似した構造である。

煙道部の長さは、40cm未満の短いもの、1m以上の長いものの2つに大別できる。1m以上の長い煙道部については概ね120cm内外のものが多い。煙道部長と半地下式・地下式により以下の3つに分類できる。

- |                  |                                |
|------------------|--------------------------------|
| 1類 煙道部が短く半地下式のもの | 6基(3住・5住・9住・11住・13住・14住)       |
| 2類 煙道部が長く半地下式のもの | 7基(1住A・1住B・2住・6住・7住・16住・H8年2住) |
| 3類 煙道部が長く地下式のもの  | 2基(8住・H8年4住)                   |

袖部は、粘土のみ用いているもの3軒(1住・7住・9住)、礫を芯材として用いているもの4軒(3住・5住・16住・H8年2住)である。第6号竪穴式住居跡は袖部の遺存状態が悪く、袖部の構造については不明である。第8号竪穴式住居跡については、潰れた状態のカマドの下から土師器甕が6個体潰れた状態で出土したことから、これを芯材として用いていたと考えられる。芯材として用いられている礫は、4軒とも丸みを帯びた河原石が用いられている。

これらのことを総合すると煙道部と袖部構造の組み合わせは、多岐にわたる類型となり、ある限られたカマド構造にはまとまらない傾向を見せる。

### 3. 主軸方位

カマドの主軸方位は概ね南東方向を向く(第62図)。これらを煙道部の長さで併せ分析すると、煙道が短いものでN - 35° - W前後の主軸方位をもつ第3・11・13号竪穴式住居跡、N - 10° - 15° - W前後の主軸方位をもつ第5・9号竪穴式住居跡、煙道の長いものでは、第1号B・2・6号竪穴式住居跡がN - 15° - 20° - Wとほぼ同じ主軸方位であり、主軸方位のみでは南南東方向に集中するが、カマド本体の構造と組み合わせると、まとまりのある構成はみられない。

### 4. 壁溝

壁溝を検出した住居跡は、16軒中8軒(1住・2住・5住・6住・8住・9住・11住・13住)、平成8年度に検出した住居跡(1住・3住)を加えると10軒である。

今年度検出した住居跡では、全周またはほぼ全周するものが5軒、第9号竪穴式住居跡については、東・南壁の一部からの検出である。

住居跡の規模別にみると、1辺が3m50cm以下のもの4軒は壁溝の検出が無い。1辺4m50cm～5mのもの9軒については、第3・15号竪穴式住居跡の2軒を除き壁溝を検出する。1辺が6m前後のものについて5住は壁溝を検出し、第17号竪穴式住居跡の精査部分からは検出しなかった。これらのことから1辺が3m50cm以下の小規模な住居跡は壁溝を伴わず、1辺が4m50cm～6mの中・大規模な住居

跡に伴う傾向が見られる。

## 5. ピット・柱穴

住居跡内から検出したピットについては20cm × 10cm ~ 189cm × 179cmを測るが、用途について判断し得ないものが多い。これらのピットから明確な柱痕を確認できたものは無く、第 4 章及び本章で柱穴としたものはすべて配列と深さから判断している。

柱穴配置が判断できたものは第2・5・9・11・13・8年度1号竪穴式住居跡の6軒でありこれらは中・大規模の住居跡である。柱穴配置別でみると、住居内中央寄りに2本と南壁際に1または2本配置するもの(2住・5住・11住・13住)、中央よりも壁寄りあるいは壁際に配置するもの(9住・17住)、住居跡中央寄りに3または4本配置するもの(8年度1住)となる(第63図)。また、第9号竪穴式住居跡については住居プラン外から5基のピットを検出しており、本住居跡については外柱穴を伴う可能性がある。第5号竪穴式住居跡ピット2・9も柱穴と捉え得る配置を呈するが、本住居跡が拡張された根拠を示すものが無く、深さも9cmと7cmと浅いため柱穴として判断することは困難である。壁溝内のピットも壁柱穴として機能していたことも考えられる。第11号竪穴式住居跡と第13号竪穴式住居跡については調査区外に続くが、住居内中央寄りに2本と南壁際に1または2本配置する配置が推察できる。第2号竪穴式住居跡と第5号竪穴式住居跡の柱穴配置は、2軒ともほぼ方形を呈する平面形に対して、支柱穴配置はカマド方向に長い配置となっており、柱穴配置の長軸に対しての短軸の比率は7割強から8割となっている。

これらのことから、柱穴配置には、a:住居跡中央寄りに3または4本配置するもの、b:住居内中央寄りに2本と南壁際に1または2本配置するもの、c:中央よりも壁寄りあるいは壁際に配置するものとなり、aについては壁柱穴を伴わないものと伴うものが存在する。

以下にa類、b類、c類の柱穴配置について、県内の過去の報告例から類似するものを抜粋すると以下のとおりである。

a類: 発茶沢遺跡第402号住居跡(苦小牧降下火山灰以前に構築され、降下以降に廃棄されたもの)

山元(3)遺跡第26号住居跡:9世紀中葉~後葉

b類: 発茶沢遺跡第107・108・201・205号住居跡:苦小牧降下火山灰以降に構築され廃棄されたもの

(青森県教委1989)

山元(3)遺跡第6号住居跡:9世紀後半~10世紀初頭(青森県教育委員会1994)

c類: 宇田野(2)遺跡第2号住居跡:9世紀末~10世紀初頭(青森県教育委員会1997)

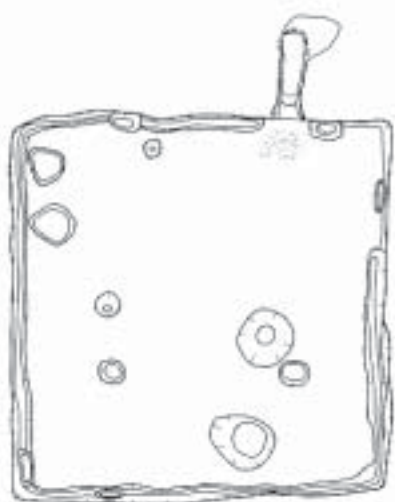
野木遺跡第216号竪穴式住居跡:10世紀前葉(青森県教育委員会1998)

山元(3)遺跡第1号住居跡:10世紀前半

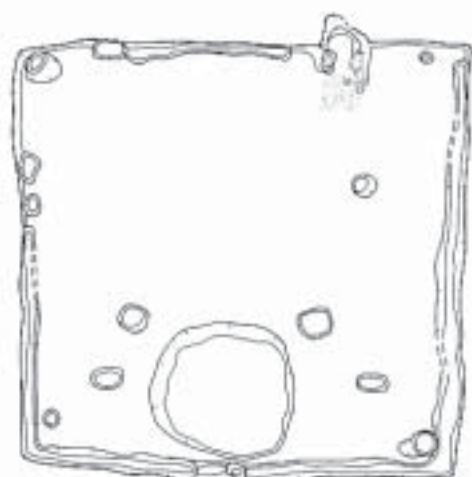
これらのことを参考にすると、本遺跡から検出した竪穴式住居跡について柱穴配置からのみ推察すれば、8年度1住 第2・5・11・13住 第9・17住の変遷が想定される。

## 6. 堆積土に含まれる火山灰

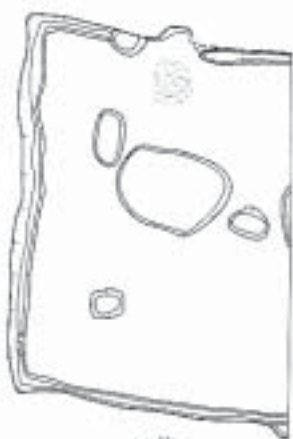
15軒の住居跡には堆積土に火山灰(但し、これらの火山灰については自然科学的分析を行っていない



2住



5住



11住



13住



9住



17住

第63図 住居跡柱穴配置図

住居番号	重複関係	平面形	規模(m)	壁溝	柱穴	力マド				降下火山灰	備考
						主軸方位	位置	芯材	煙道		
1A	-	方形	4.9×4.6	一巡		N-25°-W	A	粘土	半地下式		
B				-		N-17°-W	C	-	半地下式	-	人為堆積
2	-	方形	5.1×4.9	ほぼ一巡	b	N-20°-W	CD	-	半地下式	-	人為堆積
3	-	方形	4.9×4.2~	北西壁のみ	-	N-37°-W	CD	礫	半地下式	B-Tm	人為堆積
5	-	方形	5.8×5.8	ほぼ一巡	b	N-13°-W	C	礫	半地下式	B-Tm	人為堆積
6	-	方形	4.8×4.7	一巡	-	N-15°-W	CD	?	半地下式	-	人為堆積
7	30土・不明	方形	3.6×3.5	-	-	N-6°-W	D	粘土	半地下式	-	人為堆積
8	-	方形	4.6×4.5	一巡	-	N-28°-W	D	甕?	地下式	-	
9	-	方形	4.9×4.9	東・南壁に一部	c	N-10°-W	D	粘土	半地下式	B-Tm	
11	不明	方形	4.9×4.8~	北~東~南~壁	b	N-30°-W	B	-	半地下式	-	
12	不明	方形	9.5~	-	-	-	-	-	-	-	
13	不明	方形	4.7×3.7~	北西 北東 南東	b	N-30°-W	C	-	半地下式	-	
14	-	長方形	3.7×3.1	-	-	N-2°-W	A	-	半地下式	-	
15	-	方形	4.7×4.7	-	-	-	-	-	-	B-Tm	人為堆積
16	-	方形	3.0×2.8~	-	-	N-58°-W	AB	礫	半地下式	-	
17	不明	方形	6.1×1.5~	-	c?	-	-	-	-	-	
H8-1	-	方形	x	南西 北西 北東	a? -	-	-	-	-	-	人為堆積
2	-	方形	x	-	a・b・?	N-85°-W	-	礫	半地下式	-	人為堆積
3	-	方形	x	-	-	-	-	-	-	-	人為堆積
4	H8.1豎より旧	方形	3.2×2.8	-	-	-	-	羽口	地下式	-	人為堆積

第23表 竪穴式住居跡観察表

ため、視覚的・触覚的な見地からの判断に基づくであり、本来火山灰と思われるものと記述すべきであるが、便宜上火山灰として記述する)を含むものが4軒(3住・5住・9住・15住)存在する。

堆積土中に含まれる火山灰は4軒の住居跡のいずれも苦小牧・白頭山火山灰と思われるものであり、十和田a火山灰が含まれる住居跡は存在しない。

これらの火山灰の出土状況については、堆積状況に差異が見受けられる。堆積土中に一つの層として認識できる堆積と、堆積土中に粒状に広く分布して堆積する2通りである。前者の堆積がみられる住居跡として、第5・9号竪穴式住居跡、後者の住居跡として第3・15号竪穴式住居跡がある。

いずれの住居跡も堆積土中に含まれる火山灰が苦小牧・白頭山火山灰1枚であり、これよりも降下年代が8～9年溯るとされる十和田a火山灰(註1)が含まれないことから、火山灰が堆積した原因を述べるにはいささか不安要素(雨水等による、降下後の流れ込みも想定し得るため)が残るが、堆積土に残される情報から推察すれば、層として認識できる堆積を呈する第5・9号竪穴式住居跡に堆積したものは自然堆積、特に第5号竪穴式住居跡については、覆土の堆積状況と遺物の出土状況から人為堆積後の降下と思われる。第3・15号竪穴式住居跡のものは堆積土に粒状に分布することから、短時間の降下により自然堆積したとは考え難い。降下後に雨水等により少量ずつ流れ込んだことも想定し得るが、住居跡覆土の堆積状況は、短時間での堆積を伺わせる。このことから第3・15号竪穴式住居跡のものはひとつの可能性として人為堆積による埋め戻しの際、すでに降下し堆積していた火山灰が混入したことが考えられる。

#### 小結．住居構造からみた年代

これまでの分析結果をまとめると次のようになる(第23表)。

住居跡の規模は3m～3m50cm、4m～4m50cm、5m～6mの3領域に分かれるが、煙道部と袖部からみたカマド構造、主軸方位を組み合わせると、特定の類型に集中するようなまとまりはない。住居跡の構造については、比較的中規模な住居跡に壁溝が伴う傾向があるが、柱穴配置をみた場合では、柱穴を伴うものと伴わないものが存在し、柱穴配置のみの観点ではある程度の住居跡変遷がうかがえる。また、カマド煙道部構造では、一概に判断できないが、第8号竪穴式住居跡は過去の報告例を参考にすると、半地下式の煙道部構造よりも古い時期が想定される。これらのことから、今回の調査によって検出した竪穴式住居跡はいくつかの類型に分かれる住居跡群と推察される。

しかし、この結果からは各住居跡の帰属時期が明瞭に伺えない。このため、傍証として出土した火山灰を参考とし、おおまかな帰属時期を考えてみたい。

火山灰の出土状況から、第5・9号竪穴式住居跡は住居跡廃絶後の降下であり、第5号竪穴式住居跡は、廃絶後の人為堆積後の降下、第9号竪穴式住居跡も床面直上に堆積することから、廃絶後大きく時間が経過しない堆積と考えられる。第3・15号竪穴式住居跡は二次堆積の要素も想定し得るが、降下してからある程度時間が経ってからの廃絶と考えることができる。このことから、第5号竪穴式住居跡と類似する柱穴配置である第2・11・13号竪穴式住居跡は、第5号竪穴式住居跡と大きく時間を隔てない時期に存在していた住居跡と捉えることができ、過去の報告例からおおよそ9世紀後半から10世紀前半に帰属する住居跡と考えられる。また、第5号竪穴式住居跡と第9号竪穴式住居跡の柱穴配置に違いが見られることから、この2軒の住居跡間での5住・9住の前後関係が考えられる。しかし、第5号竪穴式住居跡と類似する柱穴配置をもつ第11・13号竪穴式住居跡と、第3号竪穴式住居跡のカマド主軸方位

がほぼ同じことから、現段階ではこれらの住居跡の前後関係について十分な検討を行うことはできない。このため、次の第2節において、出土遺物の共伴関係・前後関係を検証し、さらに具体的な遺構の存在時期を考えてみたい。

## 第2節 器種組成からの変遷

今年度の調査により出土した土師器・須恵器を第1章第2節で18類型に分類した。本節ではこの分類をもとにして、第1節において住居跡構造等から推察できた結論について、遺物の視点から遺物間での共伴・前後関係を踏まえ検討を加える。

### 1. 住居跡別出土状況からみた共伴関係

本来遺構の帰属年代を探るうえで有効な床面・カマド出土遺物を対象とするのが望ましいが、検出した住居跡間において、遺物の接合関係から住居跡の同時期における廃絶が想定でき得る資料が存在するため、覆土中からの出土遺物も対象とした。分類した各遺物群を出土状況別に表した第24表から遺物間の共伴関係の傾向を考えてみる。

第24表から、床面・カマド出土の坏・甕を対象として、器種別にみると、坏では坏3類と坏4類を共伴して出土する住居跡が2軒(1住・3住)存在する。甕を対象とすると、甕間での共伴関係は見られないが、特定の器種を多く出土する住居跡として、甕B群1類aを多く出土する第8号竪穴式住居跡がある。坏と甕の共伴をみると、坏3類と甕B群1類bを共伴して出土するものが第8号竪穴式住居跡・第9号竪穴式住居跡、坏4類と甕B群2類bを共伴するものが第2号竪穴式住居跡と第3号竪穴式住居跡、坏3類と坏4類と甕B群1類を共伴するものが第1号竪穴式住居跡と第3号竪穴式住居跡、坏3類と甕B群V類が共伴するものが第1号竪穴式住居跡と第14号竪穴式住居跡、床直からの出土であるが第5号竪穴式住居跡からも同様に出土する。

堆積土が人為堆積と考えられる住居跡では第1号竪穴式住居跡の床面・カマドと第5号竪穴式住居跡の床直間で坏3類と甕B群1類の共伴関係があり、遺物間の共伴関係ではないが、第2号竪穴式住居跡出土の甕B1類(第13図1)は第7号竪穴式住居跡を壊す風木倒と、同じく第2号竪穴式住居跡出土の甕B群1類(第13図3)は第5号竪穴式住居跡・第6号竪穴式住居跡覆土から出土のものと接合関係がある。

以上のように、遺物の出土量が少量であるため、これらの共伴関係を群構成として括ることが困難であるが、遺物組成には坏3類・4類が伴い、または坏3類・4類が単独で他類型と共伴する傾向がある。

### 2. 坏3類・4類について

第1項から群構成とは捉え難いが坏3類・4類に係わる共伴関係が示唆された。そこで本項においてこの2類型の坏を再検証し個々の類型において器形変化がみられるのか、さらにそこから本類型内での変遷が明らかになるのかを探る。坏3類・4類の傾向を把握するため出土状況にこだわらず記述する。

坏3類の器形には3つの類型がみうけられる。

A: 底部がくびれるように立ち上がるもの(1住第8図6・5住第19図3・14住第37図3)



B：胴部下半にやや張りをもちながら立ち上がるもの（3住第15図1・8住第26図2・9住第29図4）

C：立ち上がる角度がBよりもきついもの（2住第12図2）

である。底部切り離し方法は、第15図2が静止糸切である以外いずれも左回転による回転糸切であり、いずれの胎土にも砂粒がみられる。

坏 4類には5つの類型がみうけられる。

A：底部がくびれるように立ち上がるもの（13住第34図4）

B：底部から立ち上がる角度がきついもの（2住第12図1・第13図2）

C：口縁部付近で垂直に立ち上がるもの（7住第24図1）

D：口唇部が外反するもの（1住第8図5・9住第28図5）

E：口唇部が外反せず立ち上がるもの（3住第15図2・13住第34図3）

である。また、底部切り離し方法は、第8図5・第28図5・第29図1が静止糸切、第34図4・第15図2が左回転による回転糸切である。

この様に器形変化が多岐におよび、器形変化から坏 3類・4類の変遷は可能性も考えられるが、資料数が少量であり推察が難しい。また器形変化の多様さについて、観察視野を狭めたためによる製作者の技術差や個人差レベルまで下がった分類となることもあるが、本遺跡の場合において第 2章第2節での土師器胎土分析結果と、海綿骨針を含む第22図2（坏 3類）・第34図3の存在から本遺跡には他地域からの搬入とそれによる在地土器の影響が考えられることも、同一類型内における器形の多様化につながり、変遷過程を追うことを困難にしていると思われる。しかし、これら多様なバリエーションの中でも、器形・法量・切り離し手法などの観点から変遷過程の一貫性を伺わせる資料も存在する。それが第8図5・第28図5・第15図1の3点である。これらは第15図1は坏 3類、第8図5・第28図5は坏 4類と異なる分類であるが、底部からの立ち上がりと口唇部の外反が類似していること、底径値が6.0～6.4cmとほぼ同値で底部切り離しがいずれも静止糸切であることなどから、明確に数値的な指摘はできないが非常に近い類型内での変遷が感じられる資料であることを参考までに述べておく。

### 3. 遺物組成の前後関係

前述の様に器形の多様さと搬入品の影響の可能性も考えられることから、器形から坏 3類・4類内の変遷から組成全体の変遷を探ることは困難と思われたため、第1項で明らかになった遺物組成との相関と住居跡に堆積する降下火山灰から共伴関係にある遺物組成の前後関係を推察する。

第1項で明らかになった共伴関係を今一度記述する。坏 3類と坏 4類を共伴する第1号竪穴式住居跡と第3号竪穴式住居跡では坏・甕以外の遺物も視野に入れると土師器・壺の共伴関係がみられる。坏 3類・4類を共伴して出土する第1号竪穴式住居跡・第3号竪穴式住居跡では第1号竪穴式住居跡が大型の甕を多く出土する傾向がみられる。この坏 3類、坏 4類、土師器・壺の組み合わせを1型とする。なお第3号竪穴式住居跡カマドから甕B群 類が出土しているが、第3号竪穴式住居跡出土遺物内で本資料のみが本住居跡の廃絶した時期よりも溯ると思われる様相を呈するため、堆積途中の混入と考えて良いと思われる。

坏 3類と甕B群 1類bを共伴して出土する第8号竪穴式住居跡・第9号竪穴式住居跡について、第8号竪穴式住居跡では甕B群 1類aを多く出土するが第9号竪穴式住居跡では出土しておらず、底部に再調整を施す坏 4類と、須恵器坏が第9号竪穴式住居跡床面から出土するが、第8号竪穴式住居跡で



は出土していない。この坏 3類と甕B群 1類bの組み合わせを2型とする。さらに、第8号竪穴式住居跡は甕B群 1類aを多く出土する特徴が認められるため、坏 3類と甕B群 1類bに甕B群 1類aを共伴する第8号竪穴式住居跡を2a型、第9号竪穴式住居跡を2b型とする。

坏 3類と甕B群 類を床面・カマドから出土する第1号竪穴式住居跡と床直から出土する第5号竪穴式住居跡では、先述の土師器・壺が第5号竪穴式住居跡からは出土しないが、甕B群 2類aを、第1号竪穴式住居跡からはカマドからの出土、第5号竪穴式住居跡からは床直資料として出土している。出土遺物量が少量であるが、第14号竪穴式住居跡でも坏 3類と甕B群 類の組み合わせがみられることから、これを3型とする。

坏 4類と甕B群 2類bを共伴する第2号竪穴式住居跡と第3号竪穴式住居跡では、第2号竪穴式住居跡床面から坏 4類を出土するが、第3号竪穴式住居跡からは坏 類は出土せず、第3号竪穴式住居跡から出土する壺は第2号竪穴式住居跡からは出土しない。坏 4類と甕B群 2類bの組み合わせを4型とする。

これらの遺物組成の違いから共伴関係の前後関係を推察する。検出した住居跡はいずれも重複関係がないことから、まず第1節により白頭山火山灰が関係する第3号竪穴式住居跡と第5号竪穴式住居跡を軸とした検証を行う。

第5号竪穴式住居跡床直からの3型の出土及び第5号竪穴式住居跡が白頭山火山灰降下以前の廃絶と考えられることから、3型と1型の組成間では3型が古いと思われる。第1号竪穴式住居跡に1型と3型が存在するが、第1号竪穴式住居跡が存続時期に幅があることを考慮すればこれを強く否定する材料ではないと思われる。

次に3型と4型の比較であるが、第3号竪穴式住居跡と第5号竪穴式住居跡の新旧関係のみ比較すると3型 4型が伺えるが、第1号竪穴式住居跡に4型の組成がみられないことから疑問視される。また、第2号竪穴式住居跡・第3号竪穴式住居跡間での器形に若干の変化があり、同一類型内での変化も考慮され、第1節で触れた柱穴配置も類似することから、3型と4型の前後関係は不明である。

最後に1型と2a・2b型の比較であるが、9Hに堆積する白頭山火山灰が自然堆積と考えられることから、1型より古いと思われる。2a・2b型と3型については、第5号竪穴式住居跡と第9号竪穴式住居跡に共に白頭山降下火山灰が堆積するが、遺物絶対量に乏しく、遺物組成の視点からは前後関係を追うことはできない。また、2a・2b型の前後関係については、第9号竪穴式住居跡に白頭山火山灰が堆積し第8号竪穴式住居跡には堆積していないが、第8号竪穴式住居跡は覆土の多くが失われていることと遺物絶対量の貧弱さから、遺物組成の視点からは同様に前後関係は不明である。

以上のことから4型の位置づけが不明であるが2a・b型？ ？3型 1型の前後関係が考えられる。

#### 4. 想定される遺物の帰属時期

本遺跡からの資料のみで出土遺物の帰属時期を探ることは困難であるため、本遺跡の出土遺物と過去の報告例を比較検討し各遺物組成の実年代を検証する。

1型であるが、まず出土した資料の中から、第1号竪穴式住居跡・第3号竪穴式住居跡から出土した特徴的な遺物と思われる土師器・壺をもとに設定したい。

本資料と類似する資料は、県内では空沢遺跡第4号住居跡・第5号住居跡（青森県教委1990）、発茶

沢遺跡第208号住居跡（青森県教育委員会1989）山元（3）遺跡第6号住居跡（青森県教育委員会1994）野尻（4）遺跡第23・25号建物跡85土（青森県教育委員会1996）等から出土している（空沢遺跡、山元（3）遺跡、野尻（4）遺跡では甕と分類されるが本書では壺として扱う）。これらの類例で、最も古いものが野尻（4）遺跡第23・25号建物跡85土の9世紀中葉前後、最も新しいのが空沢遺跡第4号住居跡で10世紀後半以降から11世紀代とされ、発茶沢遺跡第208号住居跡では苫小牧火山灰以降の構築、山元（3）遺跡第6号住居跡では9後半～10前半に報告されている。この中で野尻（4）遺跡第23・25号建物跡85土は出土甕の器形が組成的に類似しているが、本報告書では、第3号竪穴式住居跡の廃絶時期が白頭山火山灰降下以降と考えられることから、本器種を10世紀前～中葉という年代を設定することができ、1型は当該期のものと考えられる。空沢遺跡では10世紀後半以降から11世紀代とされているが、白頭山火山灰の降下年代が923～924年（註<sub>1</sub>）とすると、この時期設定も若干溯ると考えられる。

2型の年代であるが、2a型の甕B群 1類aからおおよその年代を推察してみたい。

本資料と類似する資料は野木遺跡第234号竪穴式住居跡・第258号竪穴式住居跡9世紀後半（青森県教育委員会1998）から出土しており、第234号竪穴式住居跡は10世紀前半、第258号竪穴式住居跡は9世紀後半と報告されている。第258号竪穴式住居跡は重複関係のある住居跡であり若干の検討の余地があるが、第9号竪穴式住居跡床面から底部にヘラケズリの再調整を施す坏 4類が出土していることから、2型については9世紀後半～10世紀初頭と設定することができる。

最後に3型の年代であるが、床面からの出土である第1号竪穴式住居跡甕B群 類を参考に考えたい。本類と類似する資料は、空沢遺跡第10号住居跡、野尻（4）遺跡第21号建物跡（1996）宇田野（2）遺跡第2号住居跡・第6号住居跡（青森県教育委員会1997）等から出土している。最も古いもので宇田野（2）遺跡第2号住居跡・第6号住居跡の9世紀末～10世紀初頭、最も新しいもので空沢遺跡第10号住居跡10後半～11世紀初頭と幅広い時期差であるが、宇田野（2）遺跡第2号住居跡・第6号住居跡の出土のものがいずれもカマドからの出土であることと、本遺跡での第5号竪穴式住居跡の廃絶時期等を考慮し、3型の年代を9世紀末～10世紀初頭とし、2型と3型の前後関係については、重複する時期も考慮されるが2 3の前後関係と考えられる。

## 5. 遺物接合関係と住居跡の同時存在の可能性

住居跡間での接合関係は第1項でも触れたが、第2号竪穴式住居跡出土の甕B群 1類（第13図1）と第7号竪穴式住居跡を壊す風木倒、第2号竪穴式住居跡出土の甕B群 類（第13図2）と第5号竪穴式住居跡・第6号竪穴式住居跡覆土との接合関係である。

これら4軒の住居跡は堆積土及び接合関係からいずれも人為堆積と考えられる住居跡である。住居跡が立地する地形は平坦地であり、接合関係にある遺物が流れ込み等により入り込んだとは想定し難い。また、4軒の住居跡が廃絶した後の凹地を利用した遺物の廃棄行為の可能性であるが、遺物絶対量がいずれの住居跡も少量であること、土層の観察からこれらの住居跡は一時期に埋めもどされたと考えられるため、遺物廃棄場所となっていた可能性は低い。これらのことから第2・5・6・7号竪穴式住居跡には4軒間でのほぼ同時期の遺物廃棄の関係が成り立つと思われる。

また、第5号竪穴式住居跡の実年代であるが、第3層として床面から床面直上まで自然堆積の様相を呈する堆積が見られ、第1節第6項で述べた降下火山灰が人為堆積による覆土第2層上面に堆積することから、本住居跡が廃絶した年代は、10世紀前半代（註1）白頭山火山灰降下以前であるがそれから時

間を大きく隔てない年代と考えられる。このことから、第2・6・7号堅穴式住居跡の3軒については、第5号堅穴式住居跡が廃絶された後に第5号堅穴式住居跡を埋め戻す際に同時に埋め戻したと考えられる。これら3軒の住居跡からは白頭山火山灰は出土していないが、覆土上面に堆積した火山灰が表土掘り下げの際に削平されたことも考えられるため、これら3軒の住居跡の廃絶時期が降下火山灰以前かそれ以後かについては不明であるが、4軒の住居跡がほぼ同じ時期に廃絶された可能性は指摘できるであろう。

#### 6. 住居構造からみる前後関係との比較

第4項で述べたように、遺物側の視点から2型 3型 1型の前後関係が明らかになり、第5項で第2・5・6・7号堅穴式住居跡の接合関係からほぼ同時期の住居跡廃絶が考えられた。このことから、前後関係が明らかとなった各器種構成を出土する住居跡(1住・3住・5住・8住・9住・14住)の帰属時期が遺物側の視点からの指摘が可能であると考えられる。

2型である第8・9号堅穴式住居跡の出現が9世紀後半、それと重複するような形で3型である第5・14・1号堅穴式住居跡が9世紀末～10世紀初頭にかけて出現し、1型が10世紀前半から中頃にかけて出現する。第1号堅穴式住居跡は器種構成の点から第3号堅穴式住居跡と重複するように時間的幅をもって存続したと考えられる。

これら共伴関係の前後関係から、それぞれの器種構成は終期と開始期に重複が伺えることから、各組成が時間的に連続して変遷していったと考えられる。

ここで第1節で帰結した結論との整合性を考えてみる。カマドの構造から、地下式の煙道を持つ第8号堅穴式住居跡は第1節では帰属時期は明らかではないが、本遺跡から検出した住居跡群の中でも比較的古い位置づけをした。また、第2・5・11・13号堅穴式住居跡については過去の報告例を参考とした柱穴配置及び白頭山火山灰の存在から、9世紀末から10世紀前半の帰属と考えた。これらの前後関係は遺物組成からの前後関係とほぼ一致する。ただし、第1節で推定した第5号堅穴式住居跡と第9号堅穴式住居跡の前後関係が本節とは矛盾すること、第11・13号堅穴式住居跡については、帰属時期を設定しうる資料が床面・カマドから出土しなかったこと、分類した類型別の実年代を個別に設定できなかったことである程度の時間幅を持たせたほうが良いであろう。

#### 6. まとめ

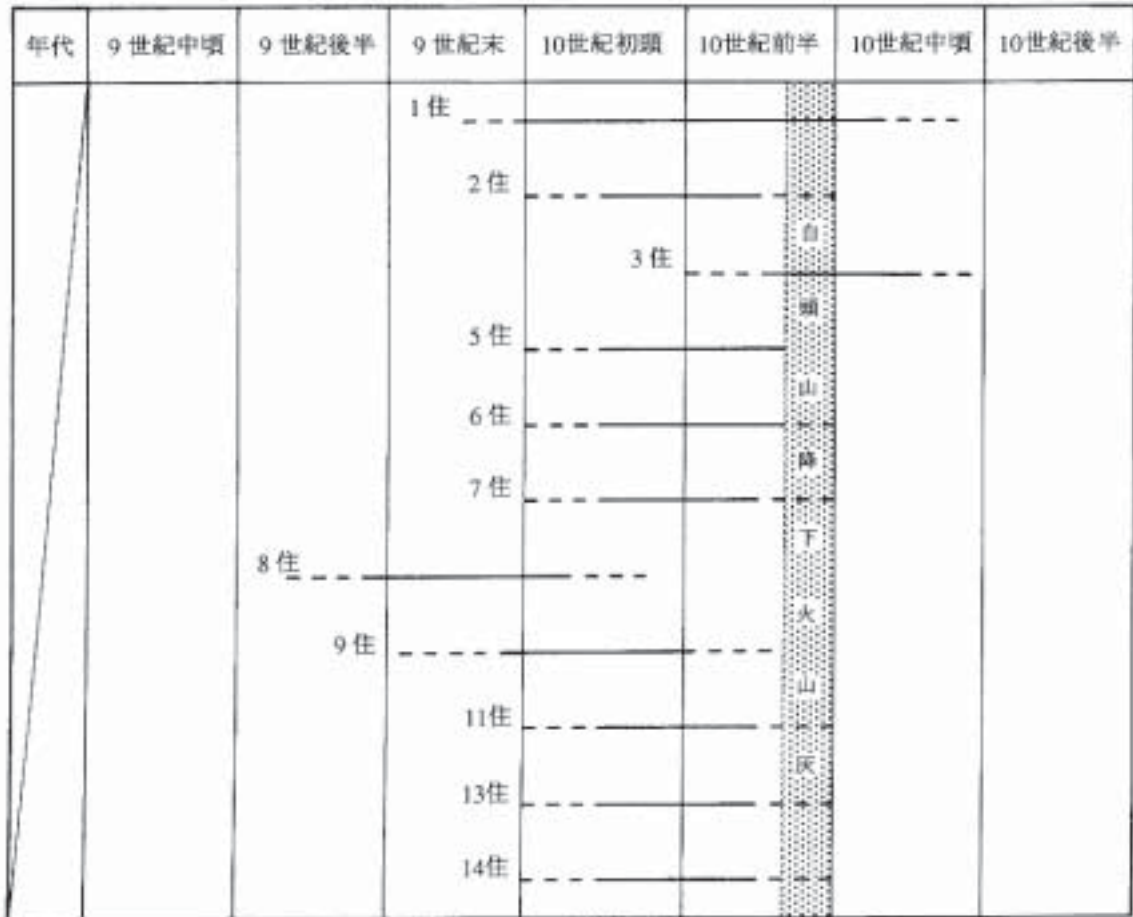
これまで述べた様に住居構造と遺物の共伴関係両面から、住居跡の帰属時期について考察をおこなった結果、本遺跡は9世紀後半から10世紀中頃にかけて営まれた集落跡と考えられる。しかし同時にいくつかの問題点も浮上してくる。住居構造からみた場合、同時廃絶の可能性が想定される第2・5・6・7号堅穴式住居跡のカマド煙道部構造について、近接した時期と考えられる遺構間で差異がみられること、またカマド主軸方位にもバラツキがみられることである。これらは住居構築時期の違い、あるいは住居の機能としての違いから等から派生した差異が考えられるが、いずれの住居跡からも構築時期を考え得る要素となる遺物を出土していないこと、住居機能を推察させる傍証が無いこと、また第2章第2節での土師器胎土分析結果と、海綿骨針を含む土器群の出土から在地土器を持った集団と、非在地土器を持ちこんだ集団の違いということも一つの可能性として考えられるため判断できない。

また、遺物の共伴関係の面から四つの遺物組成を考えることができたが、これらは遺物量の少なさと集

落跡の一部の調査であることに大きく起因し、今後の資料の増加により再検討されることが考えられる。

(沼宮内 陽一郎)

註1 白頭山降下火山灰の降下年代が、町田・福沢(1996)の研究により923～24年と推定されている。



第64図 葛野(2)遺跡竪穴式住居跡新旧関係図

## 2. 土坑の形状区分と焼成遺構の機能について

### 土坑の形状区分

土坑は35基検出した。縄文時代中期から後期、平安時代に帰属すると思われるが、明瞭に遺物が伴う例が少なく、また降下火山灰も検出しなかったため、時期を特定し得た土坑は少ない。形状を比較することにより時期区分を試みた（第25表）。

第25表 形状別土坑一覧

形状は断面形と深さによって区分し、ナベ形は壁面が垂直もしくはゆるく外反するもの、袋状は壁面が内傾するもの、一部袋状のもの、その他の形状と大きく分けた。その結果、深さ1～40cmにナベ形、41～60cmに一部袋状、61cm以上に袋状と、深さにまとまりが認められた。

深さ(cm)	ナベ形	袋状	一部袋状	その他	計
1～20	3・4・10・14・ 26・27・40				7
21～40	1・7・11・13・ 24・28・39・41・ 15・19・44・	16・	2・	23(溝状)・	11
41～60			6・20・48・	38(不整形)・	7
61～80		22・45・46・	5・21・		5
81cm以上		29・33・47		30(円筒形)・ 32(不整形)・	5
計	18	7	6	4	35

註 数字は土坑番号。深さは確認面からの計測値

袋状としたものは、縄文時代のフラスコ形土坑に断面形・規模が類似する。遺物の出土から時期を特定できた土坑は第29号土坑で、後期に帰属する。第33・45～47号土坑は深さ・断面形の類似から同時期に想定できる。しかしながら、第16号土坑は浅く、覆土からは土師器片が出土している。また第22号土坑は深く掘りこまれるものの、フラスコ形土坑にみられる頸部のくびれが認められず、円筒形に近似する断面形である。いずれも検出状況からフラスコ形土坑の構築を目的として掘り込まれたものではなく、単に崩落によって壁が内傾した可能性も考えられ、遺物・位置関係から縄文時代よりも平安時代に帰属時期を想定し、縄文時代のフラスコ形土坑と区分される可能性がある。

ナベ形としたものの中には、平面形が長方形と楕円形のものがある。長方形のものは、住居付近に位置する傾向が認められ、楕円形のは土坑集中区にまとまりをもつ。長方形を呈する第39・40号土坑からは土師器が、楕円形を呈する第11号土坑からは縄文式土器が出土している。平面形・位置により、深く掘り込まれないナベ形土坑内での時期の違いがあると考えられる。

一部袋状としたものは形状の比較において顕著な差異が認められず、どの時代に帰属するかはあいまいである。底面から開口部にかけての傾斜から、構築時にフラスコ形を意識して掘り込まれたとは考えられず、部分的に壁が崩落したため内傾したと考えられる。ナベ形の土坑と同様に平面形・位置からの時期差は考えられるが、明確な判断はし得ない。

形状区分の結果、明確な時期分けはできない。が、断面形が浅いナベ形で方形の平面形を呈する土坑は平安時代に、やや深さがあり平面形が楕円形を呈するものや断面形がフラスコ形を呈する土坑は縄文時代に帰属する可能性は高い。

### 焼成遺構の機能

第7号土坑から多量の炭化物が出土したことから、炭化物が出土した他の土坑と比較した（第26表）。第7号土坑は他の5基に比べ、炭化物を多量に含み、壁・底面に被熱による赤色変化した部分の散在が認められる。土坑の位置にも若干の差異が認められ、住居跡集中区からやや離れた場所に位置する。

青森市内の遺跡の類似例と比較してみると、新町野・野木遺跡（青森県教委 1998）では焼成遺構が

散在し、本遺跡内の土坑と住居跡との位置関係に類似性が認められる。野木遺跡・第1号堅穴遺構（青森市教委 1998）は、『古代の土師器生産と焼成遺構』（木立 1997）で定義づけられている土師器焼成坑を想定している。本土坑では灰・赤褐色土の塊・土器焼成の痕跡を残す遺物が出土せず、形状は類似するが土師器焼成坑としての機能は特定し難い。平成8年度葛野（2）遺跡第5号土坑（青森市教委1997）では天蓋部をもつ窯跡の可能性を想定しているが、天蓋部の痕跡が出土していないこと、焼土化した部分が底面に散在すること、土坑の形状が異なることから窯跡とも考えられない。また炭化材を原位置で検出したことから製炭機能が考えられるが、底面の焼土が偏在せず、青灰色変化も認められない。

類似例と比較した結果、形状・遺物・痕跡から土師器焼成か製炭かどちらかの機能が考えられるが、決定的な根拠にかけ、判断し難い。しかし本土坑内で焼成が行われたことは確実であり、集落内での生産行為があったことを窺わせる。

第26表 炭化材・物検出土坑

観察項目	14土	15土	28土	40土	7土	平成8年度第5号土坑
平面形	長方形	円形	長方形	長方形	長方形	不整形円形
規模	128cm(長辺)	134cm(直径)	110cm(長辺)	110cm(長辺)	164cm(長辺)	171×150cm
深さ(cm)	8cm	48cm	28cm	5cm	28cm	28cm
炭化物・粒被熱痕跡	粒多量 無	材少量 部分 無	粒多量 無	物少量 部分 無	物 土坑全面に遺存 壁・底面に散在	多量 焼土塊 北側の底面に偏在
遺物時期	無 不明	土師器少量 平安時代	無 不明	土師器片 平安時代	無 不明	土師器・羽口 平安時代
他の遺構との位置関係	2住と6住の 中間の平坦地	8住より15m 南東の斜面上	2住より5m 東の平坦地	11住より6m 南の斜面上	5住より22m北のゆるやかな斜面上中間に土坑群が位置する。	住居より8.8m北の平坦地

註 平面形・規模は開口部計測値。

## 弥生時代後期の土器（群3類土器）について

今回の調査では、前回の調査（平成8年度）で出土しなかった縄文時代中期・晩期・弥生時代に属する土器が出土した。しかしながら、主体となる土師器とは出土量に隔たりがあり、器形を復元し得た土器は1個体という状況である。分類するに当たっては器形分類は行わず、対応するであろう時期・型式の記述に止めた。ここでは 群3類土器について記述する。

群3類土器は弥生時代後期と続縄文時代に帰属する土器群である。第54図3・7～10は口縁部と胴部に2種類の単軸絡条体が回転施文される。胴部には縦位方向にL単軸絡条体第1類が、口縁部には横位方向に、平賀町鳥海山遺跡 群5類土器にみられる「絡条体回転文の土器で、軸棒に絡げる撚り紐の絡げ方が特異な絡条体回転文」が施される。東北南部の天王山式に比定でき、弥生時代終末に帰属する。第54図2・第57図26は微隆起線と帯縄文が施される土器で、北海道続縄文時代に帰属する。三角形の断面となる微隆起線文が特徴として上げられる。後北C<sub>1</sub>式に比定できる。上記の土器には共伴する可能性が考えられるが、数点の出土で層位的な根拠などに不足し、決定的な判断はし難い。

本遺跡から出土した土器の時期は、縄文時代前期末から弥生時代終末期を経て平安時代に至る。途中断絶はするものの、継続して人間が活動した痕跡が認められる。東北地方北部では、弥生時代に東北地方南部の天王山式土器文化の影響と北海道の後北式土器文化の進出がいわれている。本遺跡でもかすかな痕跡からではあるが同様な傾向が認められると考える。

（蝦名 純）

## ま と め

葛野(2)遺跡は、八甲田山から延びる台地の標高65m付近の裾野に立地している。この台地はここ数年の分布調査等により新規登録遺跡が増加した地域であり、本遺跡も平成5年度に当教育委員会が実施した市内遺跡詳細分布調査事業により新規登録となった遺跡である。

本調査は、県営高田地区農免農道事業に先立つ発掘調査であり、今年度実施した発掘調査は平成8年度に続いて第2年次となる。

今年度の調査では堅穴式住居跡16軒、堅穴遺構1基、土坑35基、ピット2基を検出し、土師器を始めとする歴史時代の土器を主体として、縄文式土器、弥生式土器、石器、羽口、鉄製品、土製品等が出土した。

遺構の帰属時期については、堅穴式住居跡・堅穴遺構が平安時代(9世紀後半～10世紀中頃)、土坑・ピットについて時期を比定できたものは、縄文時代後期、平安時代(9世紀後半～10世紀中頃)である。平成8年度刊行の報告では縄文時代と平安時代が報告されていたが、今回の調査により弥生時代の遺物が出土したことは、当該時期の周知の遺跡の報告が少ない本市においては非常に興味深い事例である。

遺構の検出状況としては、平成8年度調査区域に相当する緩やかに北方向へ下る平坦地からの検出、そこから約80m離れた丘陵地の平坦部分からの検出、さらに比高差約3mの谷地形2カ所を含む南西方向に向かい傾斜する二つの斜面からの概ね4区域から検出したといえる。このような検出状況から集落跡の北東側への展開はほぼ確実であると考えられる。

本遺跡の性格については、それを明確に体現し得ないまでも、生産行為を伺わせる第7号土坑をはじめ、遺構外からまとめて出土した多量の鉄滓など、集落内での生産活動を示唆する遺構・遺物が出土している。

最後となったが、調査から本書刊行に至るまで、ご指導ご協力を賜った多くの方々、並びに調査区設定等種々の協議に好意的な対応をいただいた、委託者である東青農村整備事務所に対し、改めて感謝の意を表する次第である。

(担当者一同)

引用・参考文献一覧

- |            |      |         |  |
|------------|------|---------|--|
| 青森県教育委員会   | 1977 | 第 32 集  | 『鳥海山遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1977 | 第 33 集  | 『近野遺跡・三内丸山（ ）遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1983 | 第 82 集  | 『和野前山遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1986 | 第 101 集 | 『沖附（2）遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1986 | 第 105 集 | 『山本遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1986 | 第 106 集 | 『弥栄平（4）遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1987 | 第 115 集 | 『上尾駁（2）遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1988 | 第 120 集 | 『発茶沢（1）遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1990 | 第 130 集 | 『杓沢遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1991 | 第 134 集 | 『中野平遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1994 | 第 159 集 | 『山元（3）遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1994 | 第 171 集 | 『山元（2）遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1995 | 第 172 集 | 『野尻（2）遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1996 | 第 186 集 | 『野尻（2）遺跡 ・野尻（3）遺跡・野尻（4）遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1997 | 第 217 集 | 『宇田野（2）宇田野（3）・草薙（3）遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1998 | 第 239 集 | 『新町野・野木遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1998 | 第 243 集 | 『高屋敷館遺跡発掘調査報告書』  |
| ”          | 1998 | 第 244 集 | 『隠川（4）隠川（12）遺跡発掘調査報告書』   |
| 青森市教育委員会   | 1994 | 第 22 集  | 『小三内遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1997 | 第 34 集  | 『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』   |
| ”          | 1998 | 第 38 集  | 『野木遺跡発掘調査報告書』  |
| 五所川原市教育委員会 | 1998 | 第 21 集  | 『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』   |
| 秋田県教育委員会   | 1989 | 第 178 集 | 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書<br>- 福田遺跡・石黒遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡 - 』          |
| 三浦圭介       | 1990 |         | 『日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相』シンポジウム<br>土器からみた中世社会の成立』                     |
| 須藤隆        | 1996 |         | 『東北地方の弥生土器』「日本土器事典」雄山閣   |
| 三浦圭介       | 1993 |         | 『青森県における古代の土器様相』「北日本における律令期の土器様相」  |
| 櫻田隆        | 1993 |         | 『砂底』「土器考」翔古論聚 - 久保哲三先生追悼論文集  |
| 工藤清泰       | 1996 |         | 『青森県の9世紀の土器』『青森県の10世紀の土器』「日本土器事典」雄山閣                                     |
| 平尾政幸       | 1996 |         | 『畿内土師器甕の製作技法』「古代の土器研究 - 律令土器様式の西・東4 煮<br>炊具 - 」                          |
| 町田洋・福沢仁之   |      |         | 『湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代』「シンポジウム・最<br>終氷期の終 と縄文文化の成立・展開」日本第四紀学会         |
| 三浦圭介・神康夫   | 1997 |         | 『五所川原古窯跡で生産された須恵器について』「蝦夷・律令国家・日本海 -<br>シンポジウム ・資料集 - 」日本考古学協会秋田県大会実行委員会 |
| 木立雅朗       | 1997 |         | 『古代の土師器生産と焼成遺構』土師器焼成遺構を定義するために」窯跡研<br>究会 真陽社                             |
| 工藤清泰       | 1998 |         | 『津軽平野の様相』「シンポジウム城柵と地域社会の変容第24回古代城柵官<br>衙遺跡検討会資料 - 資料集 - 」古代城柵官衙遺跡検討会     |



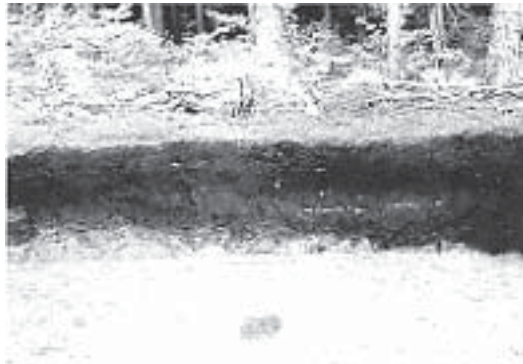
写 真 图 版



遺跡近景



作業風景



基本土層



鉄滓出土状況 X-72・73 W



第1号竪穴式住居跡東西セクション N



第1号竪穴式住居跡炭化物出土状況 N



第1号竪穴式住居跡炭化材出土状況 N



第1号竪穴式住居跡カマドAセクション N

写真1 調査状況・竪穴式住居跡



第2号竪穴式住居跡東西セクション N



第2号竪穴式住居跡完掘 N



第2号竪穴式住居跡カマド完掘 N



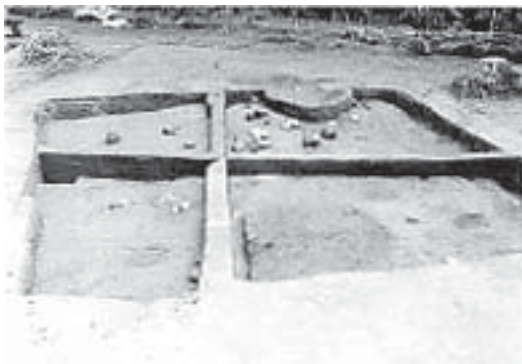
第3号竪穴式住居跡南北セクション W



第3号竪穴式住居跡カマドセクション N



第3号竪穴式住居跡カマドセクション W



第5号竪穴式住居跡東西セクション N



第5号竪穴式住居跡遺物出土状況

写真2 竪穴式住居跡



第5号竪穴式住居跡遺物出土状況 N



第5号竪穴式住居跡完掘 N



第5号竪穴式住居跡カマドセクション N



第5号竪穴式住居跡南北セクション N



第3号竪穴式住居跡カマド完掘 N



第6号竪穴式住居跡東西セクション N



第6号竪穴式住居跡完掘 N



第6号竪穴式住居跡カマドセクション N

写真3 竪穴式住居跡



第7号竖穴式住居跡完掘 N



第7号竖穴式住居跡カマドセクション W



第7号竖穴式住居跡カマド遺物出土状況 N



第8号竖穴式住居跡完掘 N



第8号竖穴式住居跡カマドセクション N



第8号竖穴式住居跡カマド完掘 N



第9号竖穴式住居跡火山灰出土状況 N



第9号竖穴式住居跡遺物出土状況

写真4 竖穴式住居跡



第9号竪穴式住居跡完掘 N



第9号竪穴式住居跡カマド完掘 N



第11号竪穴式住居跡礫出土状況 N



第11号竪穴式住居跡完掘 N



第12号竪穴式住居跡南北セクション E



第13号竪穴式住居跡完掘 N



第14号竪穴式住居跡完掘 N



第14号竪穴式住居跡カマド遺物出土状況 N

写真5 竪穴式住居跡



第 15 号 竪穴式住居跡東西セクション N



第 15 号 竪穴式住居跡炭化物出土状況 N



第 15 号 竪穴式住居跡完掘 N



第 16 号 竪穴式住居跡東西セクション S



第 16 号 竪穴式住居跡完掘 N



第 16 号 竪穴式住居跡カマド検出状況 N

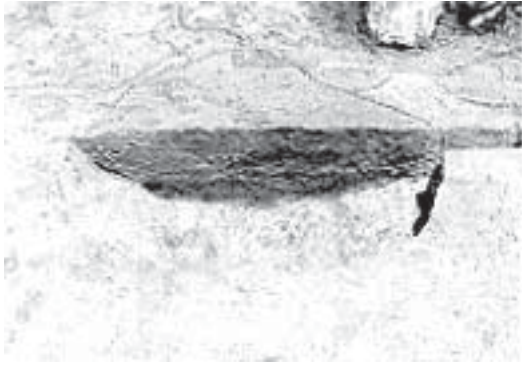


第 15 号 竪穴式住居跡東西セクション N



第 1 号 竪穴遺構完掘 S

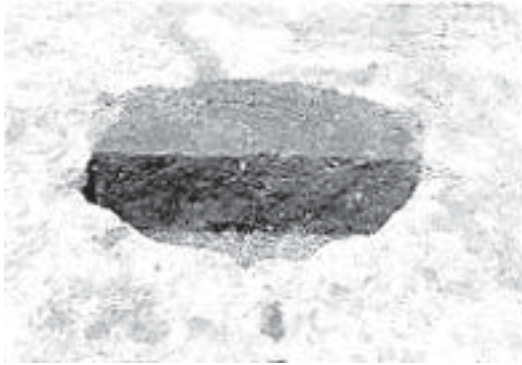
写真 6 竪穴式住居跡・竪穴遺構



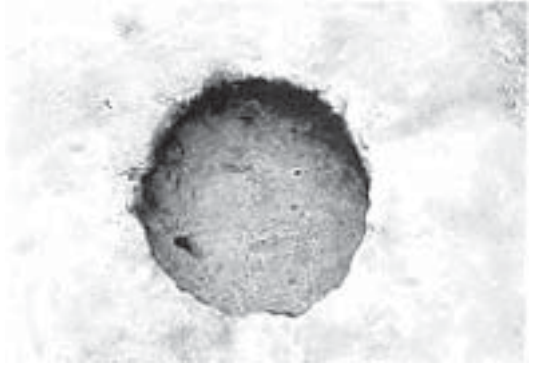
第1号土坑セクション S



第1号土坑完掘 N



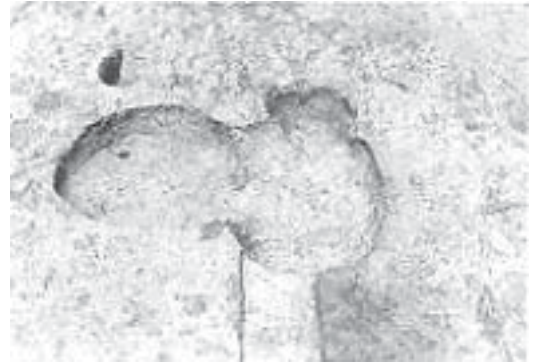
第2号土坑セクション W



第2号土坑完掘 S



第3・27号土坑セクション E



第3・27号土坑, 第1号ピット完掘 E



第4号土坑セクション S



第4号土坑完掘 S

写真7 土 坑





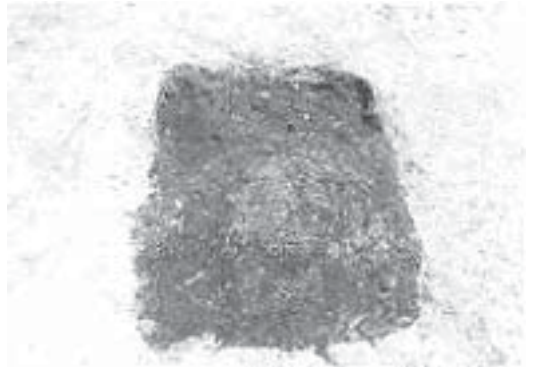
第5号土坑セクション S



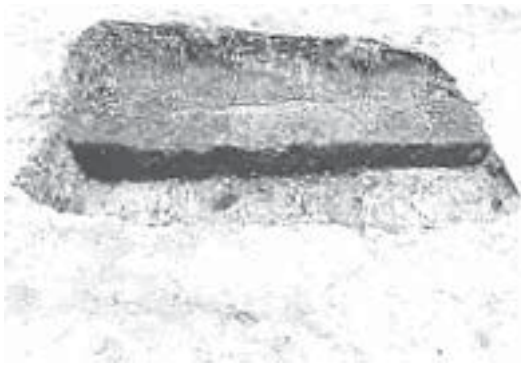
第6号土坑セクション W



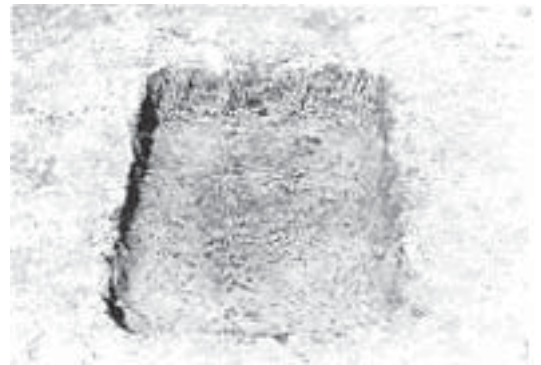
第5・6号土坑完掘 W



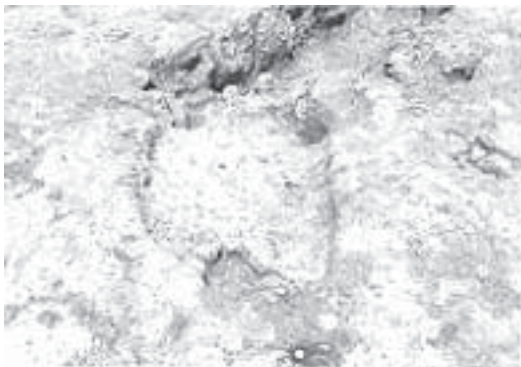
第7号土坑確認 W



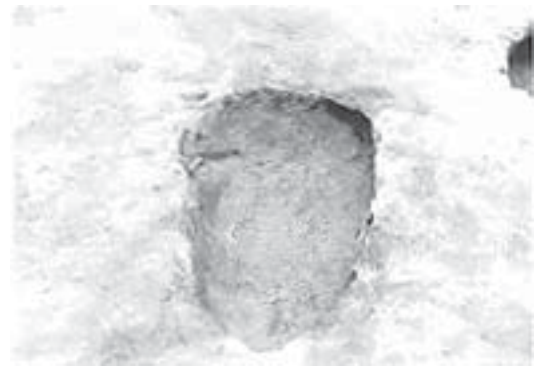
第7号土坑セクション N



第7号土坑完掘 W



第10号土坑完掘 S

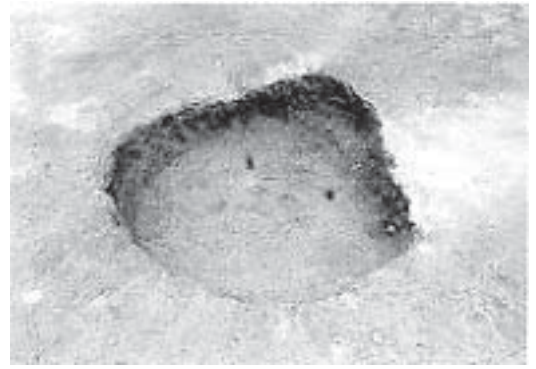


第11号土坑完掘 S

写真8 土 坑



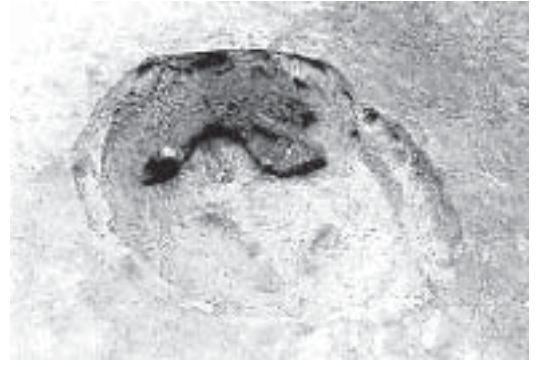
第 13 号土坑セクション S



第 13 号土坑完掘 S



第 14 号土坑炭化物出土状況 S



第 15 号土坑炭化物出土状況 S



第 15 号土坑セクション S



第 16 号土坑完掘 W



第 16 号土坑セクション S



第 16 号土坑完掘 N

写真 9 土 坑



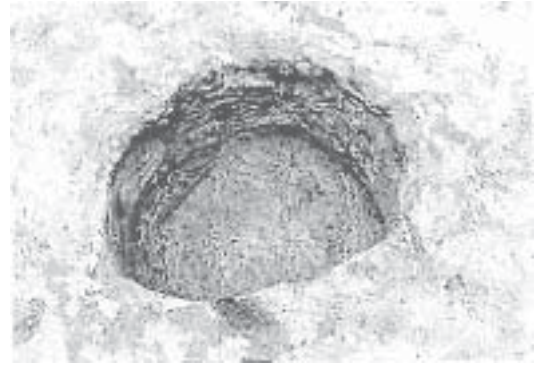
第 19 号土坑セクション S



第 19 号土坑完掘 E



第 20 号土坑セクション W



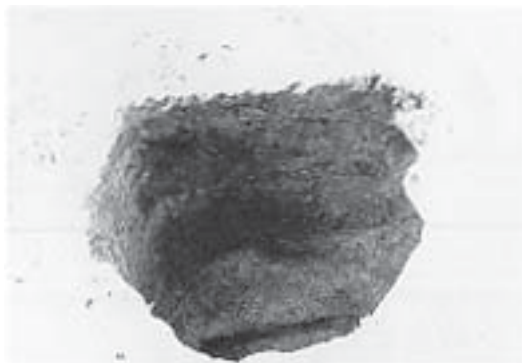
第 20 号土坑完掘 W



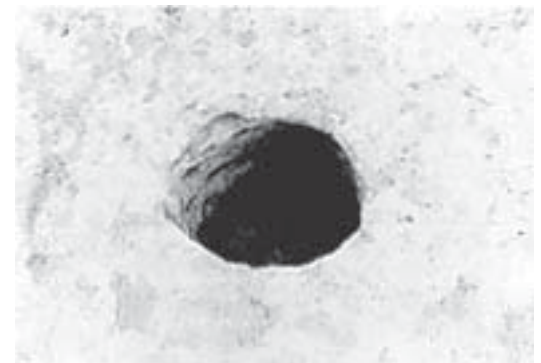
第 21 号土坑セクション S



第 21 号土坑完掘 E

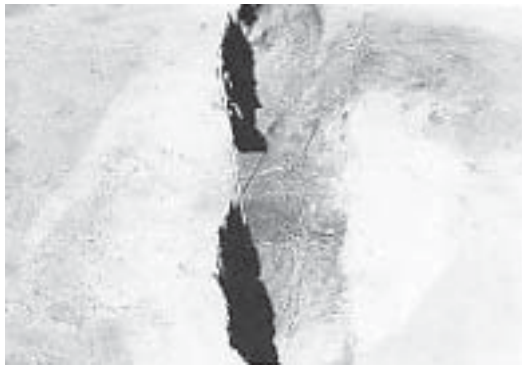


第 22 号土坑セクション S



第 22 号土坑完掘 E

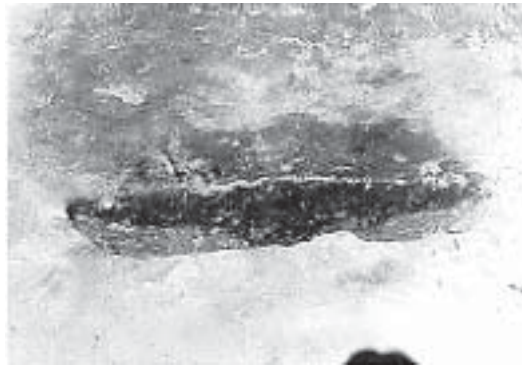
写真 10 土 坑



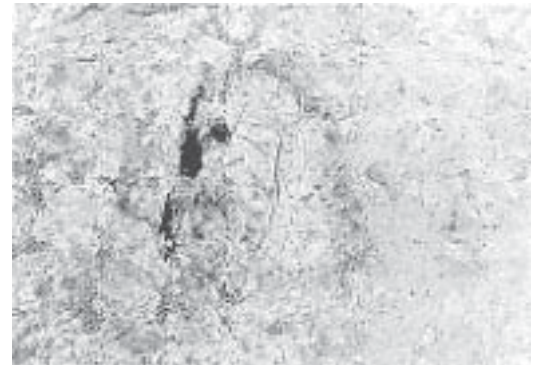
第23号土坑セクション W



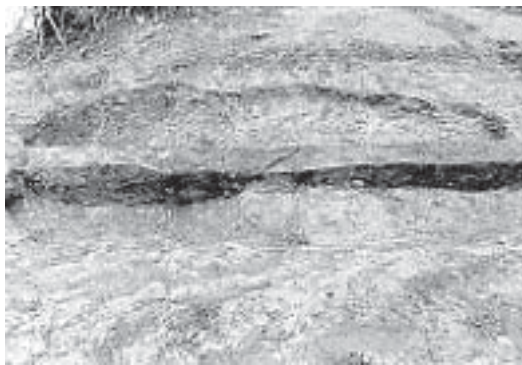
第23号土坑完掘 W



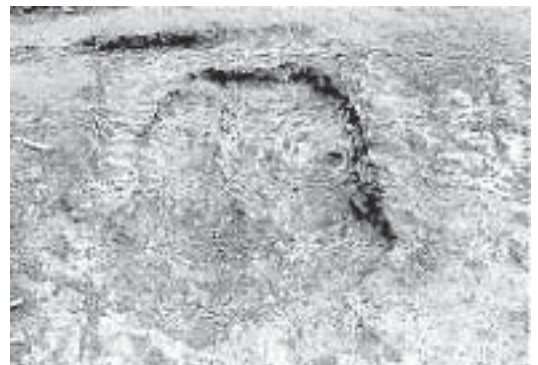
第24号土坑セクション W



第24号土坑完掘 S



第26号土坑セクション S



第26号土坑完掘 W



第28号土坑セクション E

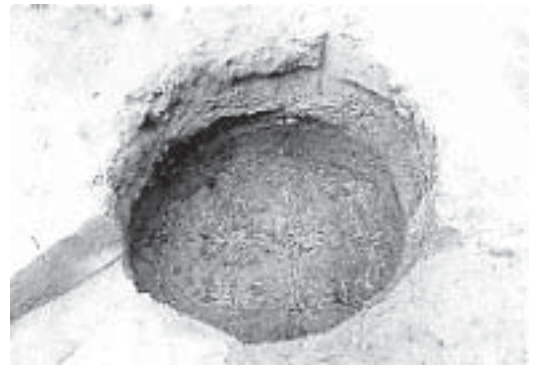


第28号土坑完掘 S

写真11 土 坑



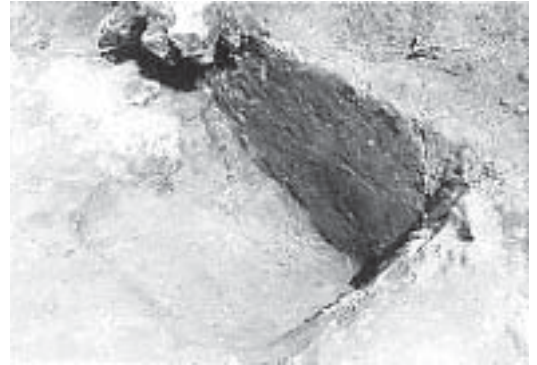
第29号土坑セクション S



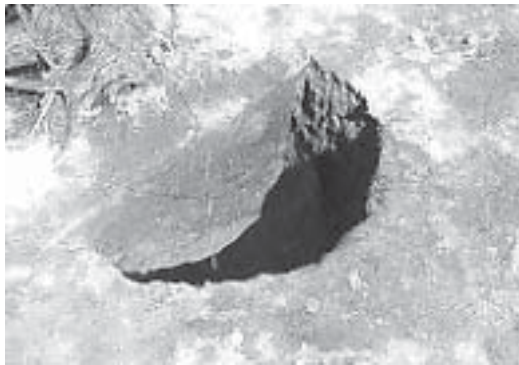
第29号土坑完掘 E



第30号土坑セクション N



第32号土坑完掘 S



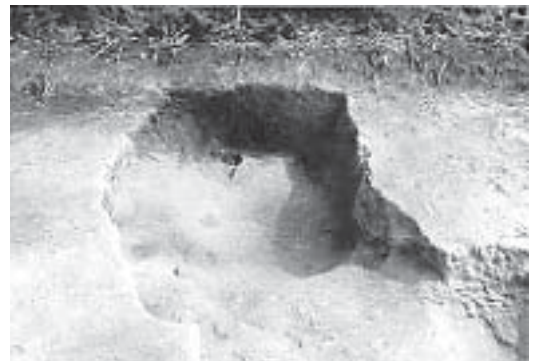
第33号土坑セクション S



第33号土坑完掘 W

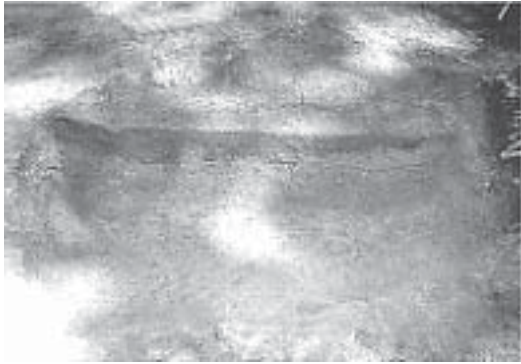


第38号土坑セクション E



第38号土坑完掘 S

写真12 土 坑



第 39 号土坑セクション W



第 39 号土坑完掘 N



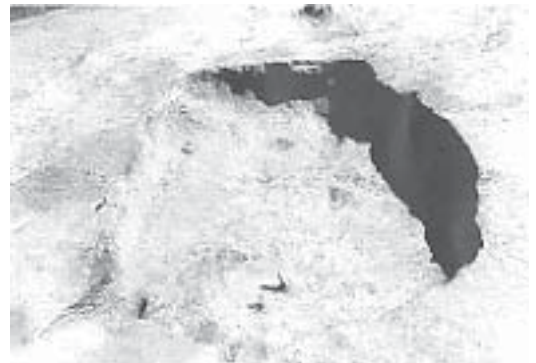
第 40 号土坑セクション S



第 40 号土坑炭化物出土状況 W



第 41 号土坑セクション W



第 41 号土坑完掘 N



第 44 号土坑セクション S

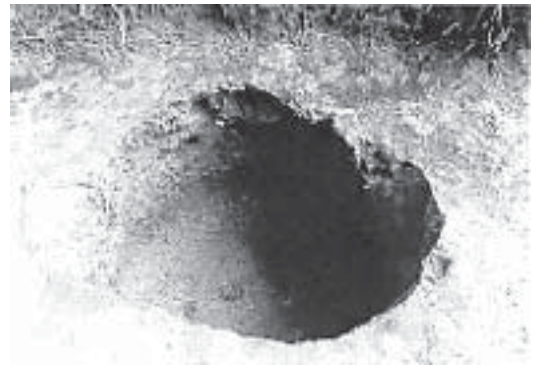


第 44 号土坑完掘 W

写真 13 土 坑



第45号土坑セクション S



第45号土坑完掘 S



第26号土坑セクション S



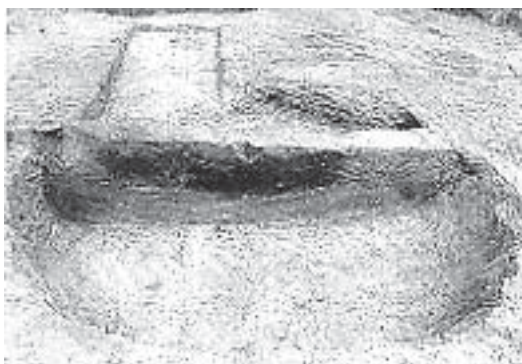
第46号土坑完掘 S



第47号土坑セクション N



第47号土坑完掘 N



第48号土坑セクション E



第48号土坑完掘 W

写真14 土 坑

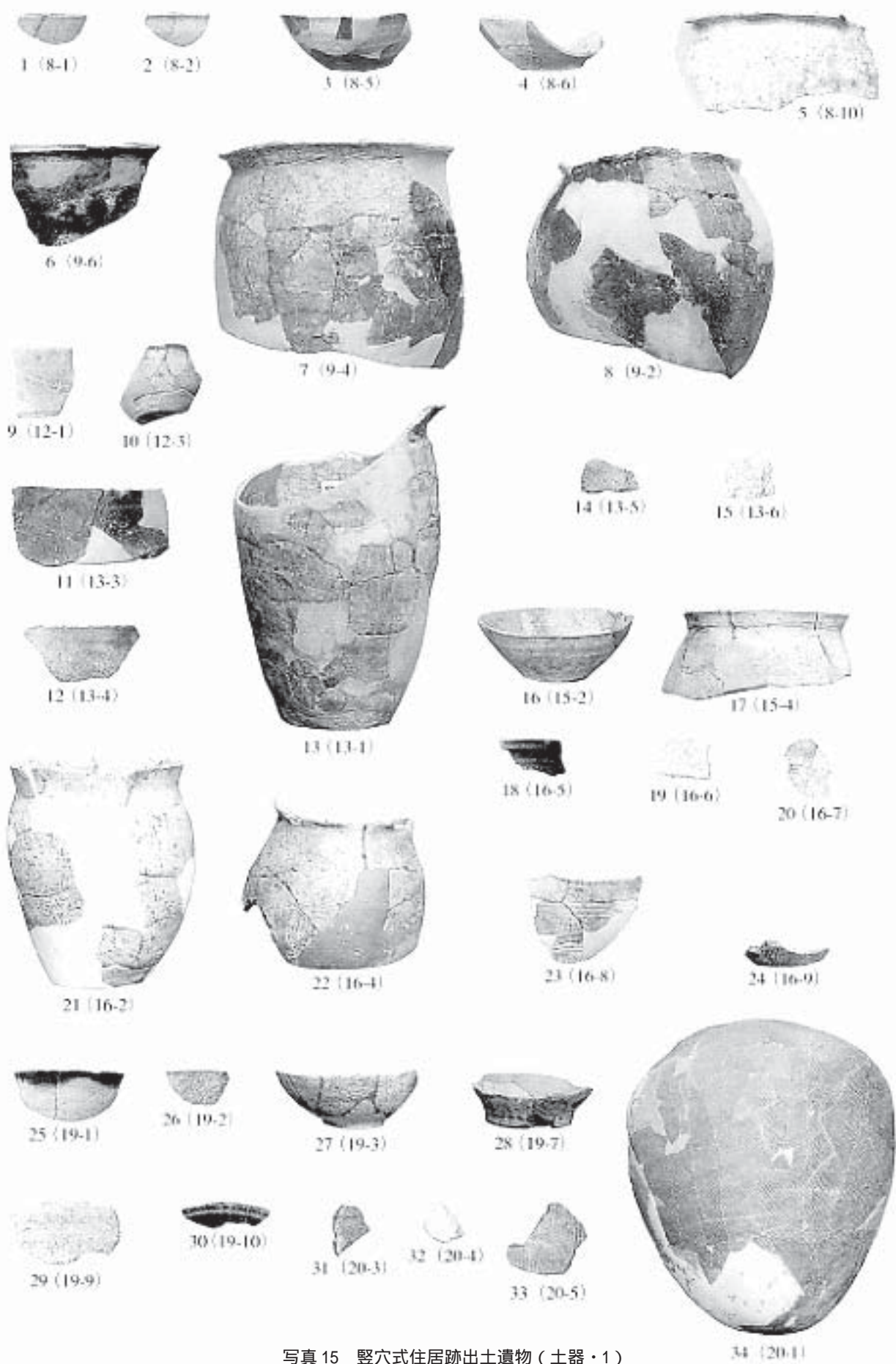


写真 15 竪穴式住居跡出土遺物（土器・1）



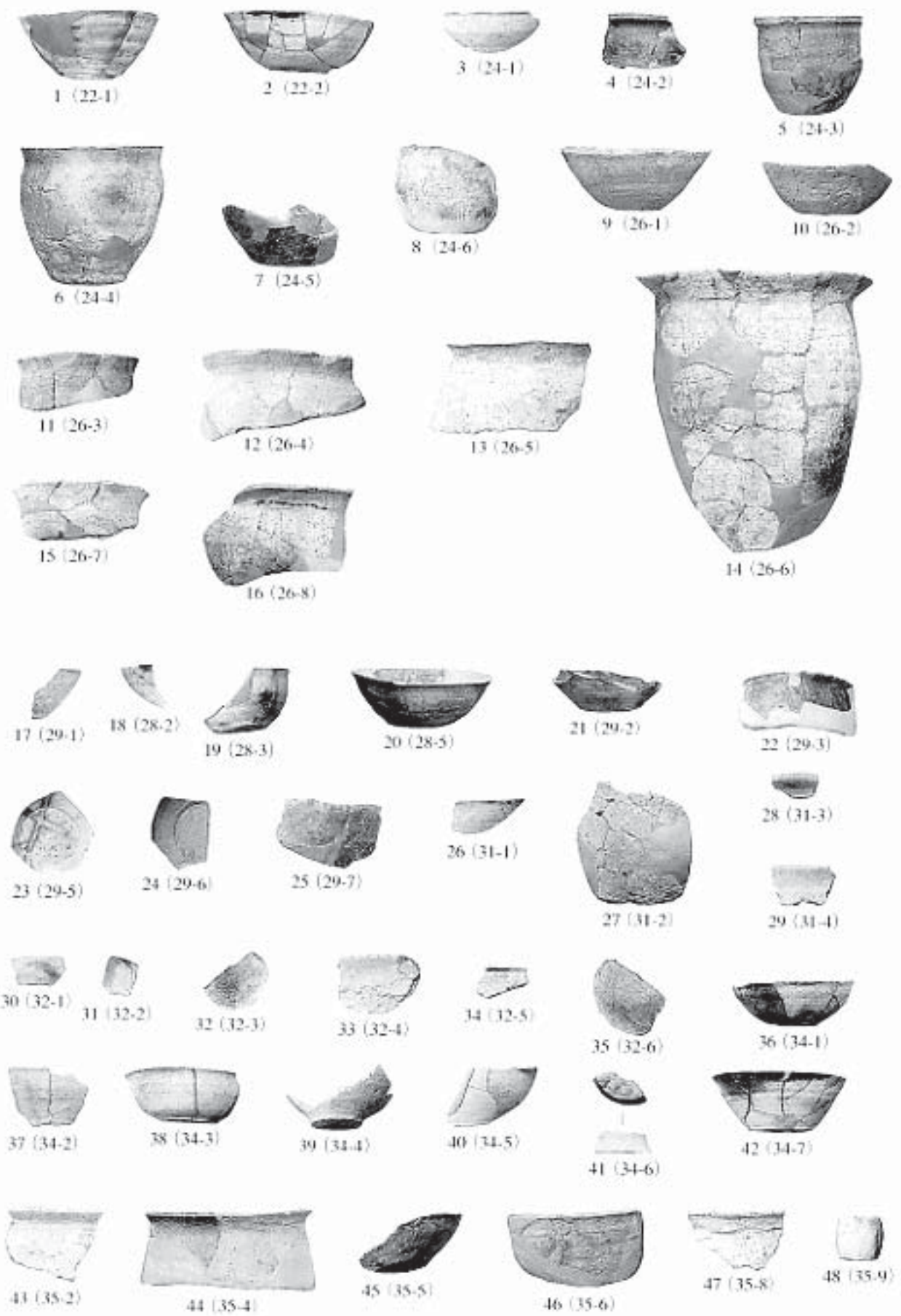


写真 16 竪穴式住居跡出土遺物（土器・2）

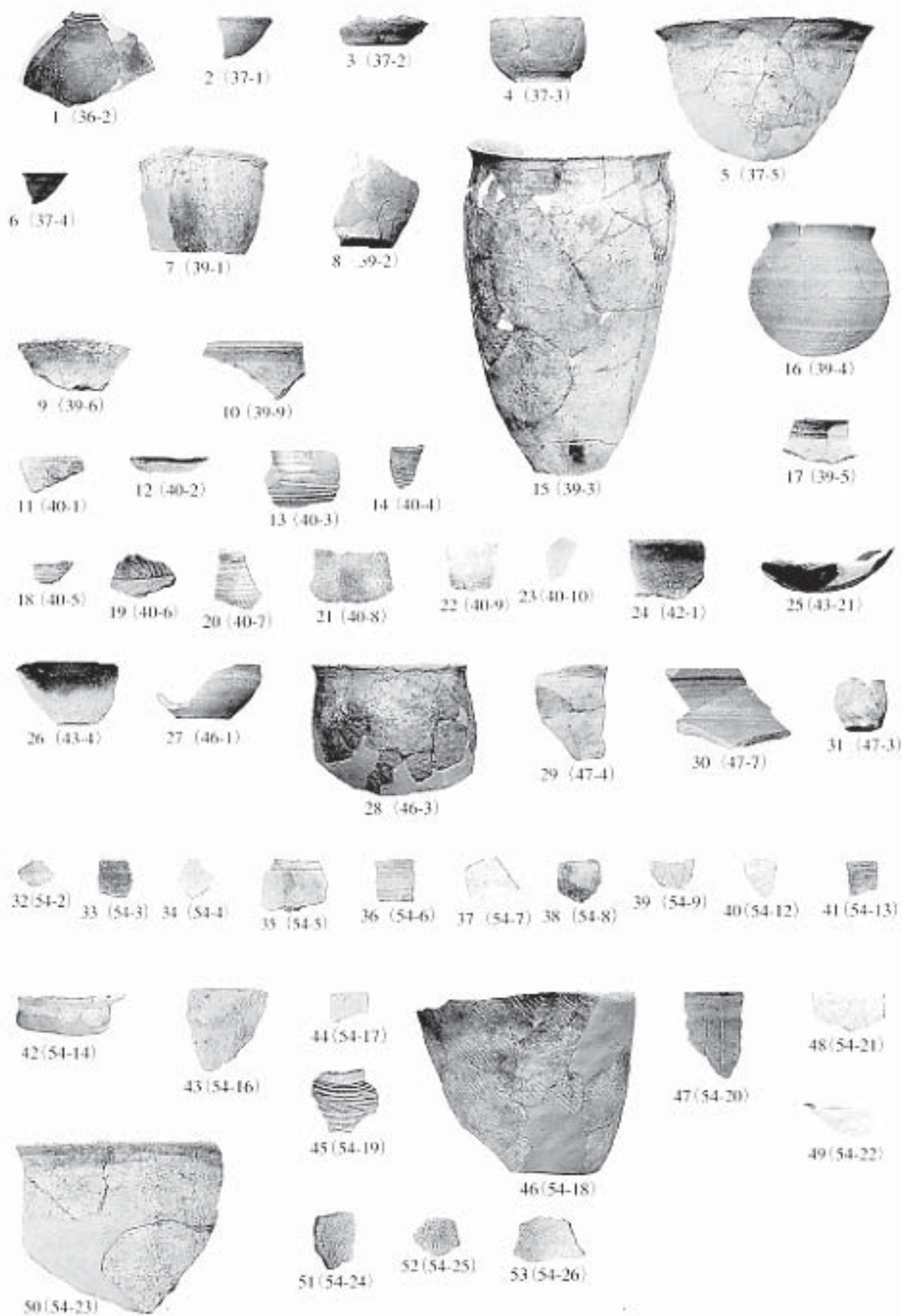


写真 17 竪穴式住居跡出土遺物(土器・3)・土坑出土遺物(土器)

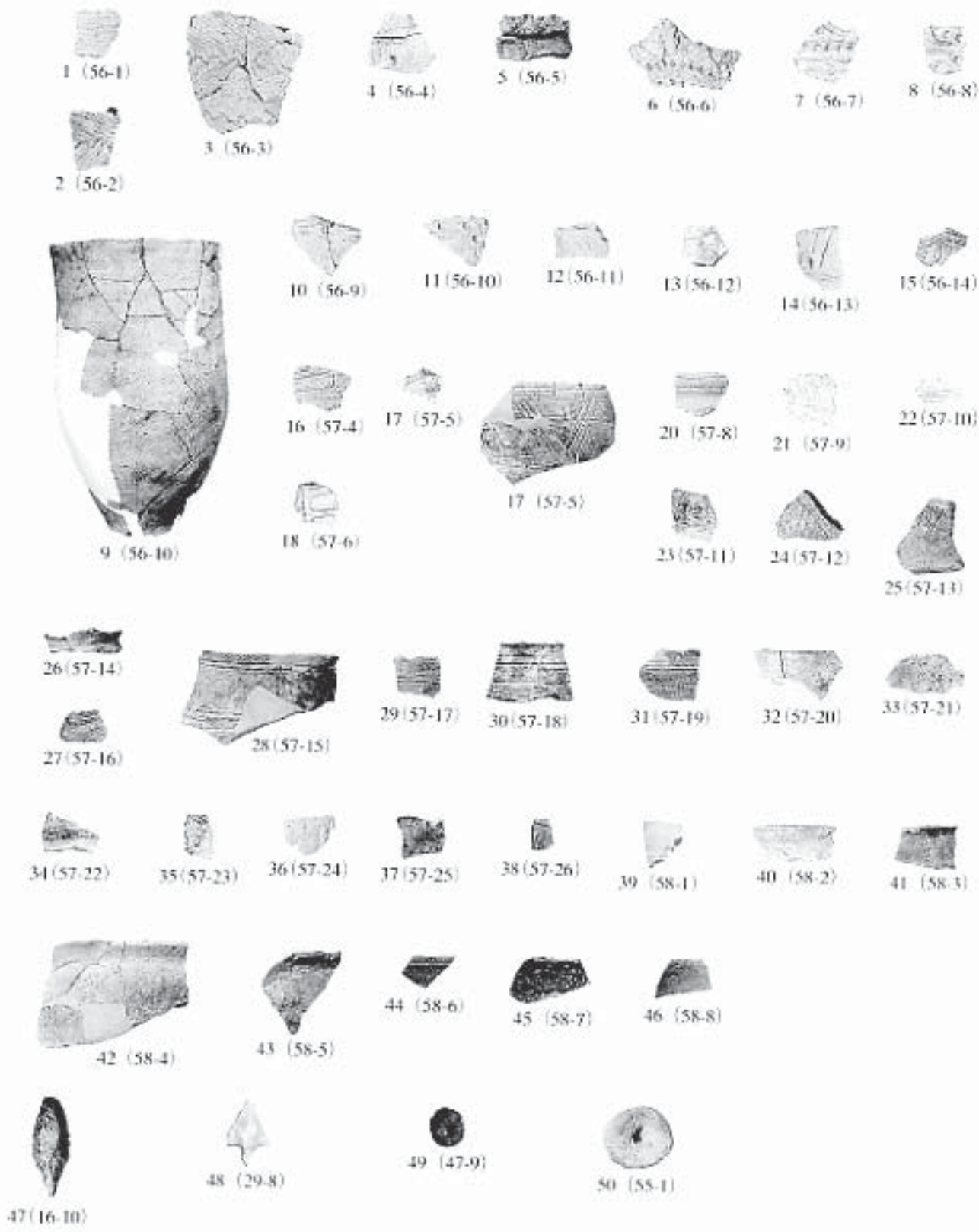


写真 18 遺構外出土遺物（土器）・竪穴式住居跡・竪穴遺構・土坑（石器・土製品）



写真 19 竪穴式住居跡・遺構外出土石器



1 (42-3)



2 (45-2)



3 (20-7)



4 (36-7)



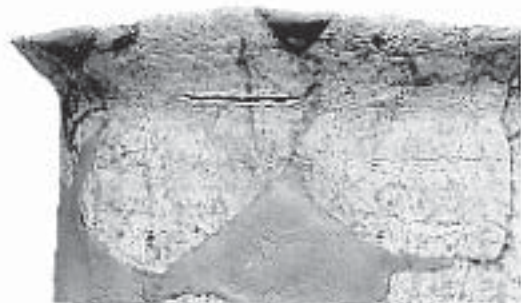
X-72・73出土鉄滓



20-1 鏡3台痕



22-1 墨書? 抵大写真



26-6 ヘラ記号拡大写真

写真 20 竪穴式住居跡出土遺物（羽口・鉄製品・木製品）遺構外出土遺物（鉄滓）

報 告 書 抄 録

ふりがな	くずのかっこにいせきはくつちょうさほうこくしょ に						
書名	葛野(2) 遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第44集						
編著者名	沼宮内陽一郎、蝦名純						
編集機関	青森市教育委員会						
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 0177-34-1111						
発行年月日	西暦 1999年3月25日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くずのかっこに 葛野(2)	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 おおべつないあざくずの 大別内字葛野	02201	218	40°	140°	19980511	6,220	道路建設(県 管高田地区農 免農道事業) に伴う事前調 査
				44	44			
58	22							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
くずのかっこに 葛野(2)	集落跡	縄文 弥生 平安	竪穴住居跡 15軒 竪穴遺構 1基 土坑 35基 ピット 6基	縄文式土器・石器 弥生式土器 土師器・須恵器 鉄製品・鉄滓 木製品・土製品			第一次調査成 果は平成8年 度に刊行	

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
"	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
"	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
"	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
"	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
"	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
"	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
"	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蚩沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
"		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
"		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
"		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
"		1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第 16 集		1991	『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
"	第 17 集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
"	第 18 集	1993	『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
"	第 19 集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第 20 集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
"	第 21 集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第 22 集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
"	第 23 集	1994	『三内丸山（2）・小三内遺跡発掘調査報告書』
"	第 24 集	1995	『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
"	第 25 集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第 26 集	1995	『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
"	第 27 集	1996	『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
"	第 28 集	1996	『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』
"	第 29 集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第 30 集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 31 集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第 32 集	1997	『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
"	第 33 集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
"	第 34 集	1997	『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
"	第 35 集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 36 集	1998	『桜峯（1）遺跡発掘調査報告書』
"	第 37 集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
"	第 38 集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
"	第 39 集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第 40 集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 41 集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
"	第 42 集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
"	第 43 集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	第 44 集	1999	『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
"	第 45 集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 46 集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
"	第 47 集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第 44 集

葛野(2)遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 11 年 3 月 25 日

発行 青森市教育委員会

〒030 - 8555 青森市中央一丁目 22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030 - 0902 青森市合浦一丁目 2-12

TEL 0177 - 42 - 2221